山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

西Ⅰ遺跡・祇園原Ⅰ遺跡
石橋Ⅰ遺跡・高瀬城北遺跡

古墳時代後期集落等の調査

２００３年３月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　1

西Ⅰ遺跡・祇園原Ⅰ遺跡
石橋Ⅰ遺跡・高瀬城北遺跡

古墳時代後期集落等の調査

2003年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

序

山陰自動車道鳥取益田線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち宍道～出雲間につきましては、平成14年３月から鋭意建設を進めております。これに先立ち、路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である斐川町における西Ｉ遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査がはるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を、時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来の道しるべとなるとともに、今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成15年３月

日本道路公団中国支社　松江工事事務所

所　長　　竹　下　幸　次

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成12年度から山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど当該区間において初めての報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書は、いずれも簸川郡斐川町に所在する西Ⅰ遺跡、祇園原Ⅰ遺跡、石橋Ⅰ遺跡、高瀬城北遺跡についての調査成果をまとめたものです。なかでも西Ⅰ遺跡では、古墳時代後期に営まれた集落跡が調査され、出雲平野南部における古墳時代集落の一端が明らかになりました。

本報告書が、地域の歴史を解明する手がかりとなり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力いただきました地元の方々、日本道路公団中国支社、斐川町教育委員会、その他関係機関、関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

島根県教育委員会

教育長　広　沢　卓　嗣

例　　言

1．本書は日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成13年度に実施した、山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県簸川郡斐川町大字三絡字武部西2184他		西Ⅰ遺跡
同	直江町3429－２他	祇園原Ⅰ遺跡
同	直江町3475他	石橋Ⅰ遺跡
同	神庭1558－２他	高瀬城北遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

（平成13年度）現地調査

［事務局］　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）・内田　融（同総務課長）・松本岩雄（同調査第１課長）・川原和人（同調査第２課長）・今岡　宏（同総務係長11月まで）

［調査員］　川原和人・大庭俊次（同文化財保護主事）・岩橋孝典（同主事）・福場康芳（同教諭兼文化財保護主事）・奥村昌子（同教諭兼文化財保護主事）・赤木　努（同教諭兼文化財保護主事）・横木尚文（同教諭兼主事）・植田寿子（同講師兼主事）・糸賀伸文（同調査補助員）・露梨靖子（同調査補助員）・伊藤悟郎（同調査補助員）・松崎恵美子（同調査補助員）

［遺物整理］河野真由美（同内業作業員）・小豆沢美貴（同内業作業員）

（平成14年度）報告書作成

［事務局］　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）・卜部吉博（同副所長）・内田　融（同総務課長）・川原和人（同調査第２課長）・坂本淑子（同総務係長）

［調査員］　川原和人・大庭俊次（同文化財保護主事）・岩橋孝典（古代文化センター主任研究員）横木尚文（埋蔵文化財調査センター教諭兼文化財保護主事）・松崎恵美子（同調査補助員）

4．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、日本道路公団・社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

（現場担当）　矢野秀夫（技術員）・藤原　恒（技術員）・加本宏文（技術員）

（事務担当）　飯塚春美（事務員）

5．現地調査及び資料整理に際しては、文化財課・古代文化センター・埋蔵文化財調査センター各職員および以下に記す方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。

陰山　昇（斐川町教育委員会文化財課長）・宍道年弘（斐川町ふるさとデザイン課）陰山真樹（斐川町教育委員会）・江角　健（斐川町教育委員会）・阿部賢治（斐川町教育委員会）・池田敏雄（斐川町文化財保護審議会委員）

6．挿図中北は、測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指す。平面直角座標系ＸＹ座標は、日本測

地系による。レベル高は海抜高を示す。

7．第１図、第３図は国土交通省国土地理院発行のものを使用した。

8．本書に掲載した写真のうち空撮は株式会社ジェクトが撮影し、その他の遺構・遺物写真は岩橋、大庭、横木、広江耕史（文化財課主幹）が撮影した。

9．本書に掲載した実測図は川原、岩橋、横木、露梨、伊藤が作成し、露梨、松崎、河野、小豆沢、横木、岩橋、赤木のほか、西　郁子（埋蔵文化財調査センター内業作業員）、田中路子（同内業作業員）が浄書した。題字は横木が作製した。

10．本書の執筆は岩橋、大庭、川原、福場、横木が分担して行い、その文責を目次に記した。編集は横木が行った。

11．本書掲載の遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本文目次

第１章　調査に至る経緯……（横木）……　1

第２章　遺跡の位置と歴史的環境……（福場）……　3

第３章　西Ⅰ遺跡の調査……（岩橋・大庭）……　12

第４章　祇園原Ⅰ遺跡の調査……（大庭）……　67

第５章　石橋Ⅰ遺跡の調査……（大庭）……　72

第６章　高瀬城北遺跡の調査……（川原）……　75

表目次

第１表　山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)ルート上の遺跡一覧……　2
第２表　本書掲載遺跡と周辺の遺跡……　4
第３表　西Ⅰ遺跡　段状遺構１ピット計測表……　16
第４表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　掘立柱建物１計測表……　16
第５表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　掘立柱建物２計測表……　16
第６表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　段状遺構１掘立柱建物１付近出土遺物観察表……　22
第７表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１中央部出土遺物観察表……　22
第８表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１掘立柱建物２付近出土遺物観察表……　22
第９表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１掘立柱建物２付近出土石製品観察表……　23
第10表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１掘立柱建物２付近出土鉄製品観察表……　23
第11表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土遺物観察表……　23
第12表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土石器観察表……　23
第13表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土銭貨観察表……　23
第14表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土鉄滓観察表……　23
第15表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構１下方包含層出土遺物観察表……　23
第16表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　中段包含層出土鉄製品観察表……　23
第17表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１(掘立柱建物２付近)出土遺物構成表……　24
第18表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　段状遺構１(掘立柱建物１付近)出土遺物構成表……　24
第19表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２ピット計測表……　24
第20表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２掘立柱建物３計測表……　24
第21表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２出土遺物観察表……　28
第22表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２出土石器観察表……　28

第23表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２及び周辺出土遺物構成表 …… 29
第24表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　上・中段包含層出土遺物観察表 …… 29
第25表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　上・中段包含層出土石器観察表 …… 29
第26表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３ピット計測表 …… 30
第27表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３古段階出土遺物観察表 …… 32
第28表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３古段階出土鉄製品観察表 …… 32
第29表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３新段階出土遺物観察表 …… 34
第30表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３出土石器観察表 …… 34
第31表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３古段階出土遺物構成表 …… 34
第32表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３新段階出土遺物構成表 …… 34
第33表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４ピット計測表 …… 35
第34表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４出土遺物構成表 …… 37
第35表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４出土遺物観察表 …… 38
第36表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４出土鉄製品観察表 …… 38
第37表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５ピット計測表 …… 38
第38表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５出土遺物構成表 …… 43
第39表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５床面出土遺物観察表 …… 44
第40表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５床面出土鉄製品観察表 …… 44
第41表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５覆土出土遺物観察表 …… 45
第42表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　小規模ピット群ピット計測表 …… 47
第43表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　柵列１付近ピット計測表 …… 47
第44表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　柵列１計測表 …… 47
第45－１表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　下段・下段斜面出土遺物観察表１ …… 50
第45－２表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　下段・下段斜面出土遺物観察表２ …… 51
第46－１表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面出土遺物観察表１ …… 52
第46－２表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面出土遺物観察表２ …… 53
第47表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面出土石器観察表 …… 53
第48表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面出土鉄製品観察表 …… 53
第49表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面出土鉄滓観察表 …… 53
第50表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面出土石製品観察表 …… 53
第51表　西Ⅰ遺跡Ａ区　包含層出土遺物構成表 …… 53
第52表　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良・平安時代の遺物観察表 …… 56
第53表　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良時代の遺物構成表 …… 57
第54表　西Ⅰ遺跡Ａ区　平安時代の遺物構成表 …… 57
第55表　西Ⅰ遺跡Ｂ区　遺物構成表 …… 60
第56表　西Ⅰ遺跡Ａ区　出土須恵器杯蓋構成表 …… 63
第57表　島根県内出土三輪玉一覧 …… 63
第58表　祇園原Ⅰ遺跡　土坑規模計測表 …… 71
第59表　祇園原Ⅰ遺跡　出土遺物観察表 …… 72

挿図目次

第１図　山陰自動車道鳥取益田線(宍道～出雲間)ルート上の遺跡（S＝1/50,000）…… 2
第２図　本書掲載遺跡位置図 …… 3
第３図　本書掲載遺跡の位置と周辺の遺跡（S＝1/50,000）…… 5
第４図　西Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡周辺図（S＝1/2,000）…… 13
第５図　西Ⅰ遺跡Ａ・Ｂ区　調査前地形図（S＝1/400）…… 14
第６図　西Ⅰ遺跡Ａ・Ｂ区　調査後地形図（S＝1/400）…… 15
第７図　西Ⅰ遺跡Ａ区　区割図（S＝1/400）…… 16
第８図　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　段状遺構１東側・掘立柱建物１実測図（S＝1/60）…… 17
第９図　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１西側・掘立柱建物２実測図（S＝1/60）…… 18
第10図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１出土遺物実測図
（S＝土器1/4・金属製品1/3・石製品2/3）…… 20
第11図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１遺物出土状況図
（S＝1/120・土器1/6・石製品 鉄製品1/2）…… 21
第12図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１下方包含層出土遺物実測図（S＝土器1/4・鉄製品1/3）… 22
第13図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２・掘立柱建物３実測図（S＝1/60）…… 25
第14図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２出土遺物実測図（S＝土器1/4・石製品2/3）…… 26
第15図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２遺物出土状況図（S＝1/20・土器1/6・石製品1/1）…… 27
第16図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２周辺出土遺物実測図（S＝土器1/4・石製品2/3）…… 28
第17図　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３実測図（S＝1/60）…… 31
第18図　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３出土遺物実測図
（S＝土器1/4・石製品2/3・鉄製品1/3）…… 32
第19図　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３遺物出土状況図（S＝1/20・土器1/6）…… 33
第20図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４出土遺物実測図（S＝土器1/4・鉄製品1/3）…… 35
第21図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４実測図（S＝1/60）…… 36
第22図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構４遺物出土状況図（S＝1/60・土器1/6・鉄製品1/4）… 37
第23図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５実測図（S＝1/60）…… 39
第24図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５床面出土遺物実測図（S＝土器1/4・鉄製品1/3）…… 40
第25図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５覆土出土遺物実測図（S＝1/4）…… 41
第26図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５遺物出土状況図（S＝1/20・土器1/6）…… 42
第27図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　下段小規模ピット群・Ａ－２・３区　中段柵列１実測図
（S＝1/60）…… 46
第28図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　下段・下段斜面包含層出土遺物実測図（S＝1/4）…… 48
第29図　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　下段・下段斜面包含層出土遺物実測図（S＝1/4）…… 49
第30図　西Ⅰ遺跡Ａ－１・２・３区　下段・下段斜面包含層出土遺物実測図
（S＝石製品2/3・鉄滓1/3）…… 49
第31図　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　下段包含層出土遺物実測図（S＝1/3）…… 50
第32図　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良・平安時代遺物実測図（S＝1/4）…… 54
第33図　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良時代の遺物分布状況図（S＝1/400・土器1/6）…… 55

第34図　西Ⅰ遺跡Ａ区　平安時代の遺物分布状況図（S＝1/400・土器1/6）…… 57
第35図　西Ⅰ遺跡Ａ区　石製品・鉄製品分布状況図
（S＝1/400・石製品1/2・金属製品 砥石1/4）…… 58
第36図　西Ⅰ遺跡Ａ区　手捏ね土器分布状況図（S＝1/400・土器1/4）…… 59
第37図　西Ⅰ遺跡Ｃ区　出土土師器実測図（S＝1/2）…… 60
第38図　西Ⅰ遺跡Ｃ区・Ｄ区　位置図（S＝1/800）…… 61
第39図　西Ⅰ遺跡Ａ区　煮沸具類分布状況図（S＝1/400）…… 64
第40図　祇園原Ⅰ遺跡　調査区位置図（S＝1/2,000）…… 67
第41図　祇園原Ⅰ遺跡　焼土溜まり土層断面図（S＝1/50）…… 68
第42図　祇園原Ⅰ遺跡　遺構及び遺物分布平面図（S＝1/100）…… 69
第43図　祇園原Ⅰ遺跡　土坑実測図（S＝1/40）…… 71
第44図　祇園原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図（S＝土師質土器1/4・黒曜石剥片2/3）…… 72
第45図　石橋Ⅰ遺跡　遺構実測図（S＝1/100）…… 73
第46図　石橋Ⅰ遺跡　土層実測図（S＝1/50）…… 74
第47図　高瀬城北遺跡　遺跡周辺の地形図（S＝1/1,000）…… 75
第48図　高瀬城北遺跡第１調査区　調査前地形測量図（S＝1/200）…… 77
第49図　高瀬城北遺跡第１調査区　調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1/120）…… 78
第50図　高瀬城北遺跡第１調査区　土層図（S＝1/60）…… 79
第51図　高瀬城北遺跡第１調査区　第１土坑実測図（S＝1/30）…… 80
第52図　高瀬城北遺跡第１調査区　出土遺物実測図（S＝1/3・16のみ2/3）…… 81
第53図　高瀬城北遺跡第２調査区　調査前地形測量図（S＝1/200）…… 83
第54図　高瀬城北遺跡第２調査区　調査後地形測量図・遺構配置図・土層図（S＝1/60）…… 83
第55図　高瀬城北遺跡第２調査区　第１土坑実測図（S＝1/30）…… 84
第56図　高瀬城北遺跡第２調査区　第２土坑実測図（S＝1/30）…… 84

図版目次

図版１　西Ⅰ遺跡　全景(南東上空より)
図版２　西Ⅰ遺跡(中央)・石橋Ⅰ遺跡(左上)　遠景
図版３上　西Ⅰ遺跡　遠景(西側上空より)
図版３下　西Ⅰ遺跡　全景(東側上空より)
図版４上　西Ⅰ遺跡Ａ区　全景(上空より)
図版４下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・３・４・５(北側より)
図版４下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２(北西側より)
図版５上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・３・４(北西側より)
図版５下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・３・４・５(北西側より)
図版６上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・掘立柱建物１
図版６下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・掘立柱建物２
図版７上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２・掘立柱建物３

図版７下　西Ⅰ遺跡Ａ区　小規模ピット群
図版８上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３（西側より）
図版８下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３（東側より）
図版８下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３新段階・遺物出土状況
図版９上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３新段階・遺構検出状況（南西側より）
図版９中　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３新段階・遺構完掘状況（北東側より）
図版９下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５・床面検出状況（北東側より）
図版10上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構４・遺構完掘状況（北西側より）
図版10下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構４・遺構完掘状況（東側より）
図版10下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３（西側より）
図版11上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５（西側より）
図版11下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５（北西側より）
図版12上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５・床面検出状況（北西側より）
図版12中　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５・土層堆積状況（北側より）
図版12下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５・遺物出土状況（北側より）
図版13　西Ⅰ遺跡Ａ区　古墳時代後期遺物群
図版14　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１出土遺物
図版15　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１及び下方斜面包含層出土遺物
図版16上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１下方包含層出土遺物
図版16下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２出土遺物
図版17上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２出土遺物
図版17下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２周辺出土遺物
図版18上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２周辺出土遺物
図版18下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３出土遺物
図版19　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３・４出土遺物
図版20上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構４出土遺物
図版20下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構４・５出土遺物
図版21　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５床面出土遺物
図版22上　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５床面出土遺物
図版22下　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５覆土出土遺物
図版23　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５覆土出土遺物
図版24　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５覆土・Ａ－１区下段包含層出土遺物
図版25　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－１区下段・下段斜面包含層出土遺物
図版26上　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－１区下段・下段斜面包含層出土遺物
図版26下　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－１区下段・下段斜面包含層出土遺物
図版27上　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－１区下段・下段斜面包含層出土遺物
図版27下　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－２区下段・下段斜面包含層出土遺物
図版28　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－２区下段・下段斜面包含層出土遺物
図版29　西Ⅰ遺跡Ａ区　Ａ－２区下段・下段斜面包含層出土遺物　奈良・平安時代の出土遺物
図版30上　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良時代の出土遺物
図版30下　西Ⅰ遺跡Ａ区　平安時代の出土遺物

図版31　西Ⅰ遺跡Ａ区　出土石器
図版32上　西Ⅰ遺跡Ａ区　出土金属器
図版32下　西Ⅰ遺跡Ａ区　出土鍛冶関連遺物
図版33上　祇園原Ⅰ遺跡　遠景(東から)
図版33下　祇園原Ⅰ遺跡　完掘状況(南から)
図版34上　祇園原Ⅰ遺跡　焼土坑 SK06・同08
図版34下　祇園原Ⅰ遺跡　土師質土器
図版35上　石橋Ⅰ遺跡　山頂部調査前(東から)
図版35下　石橋Ⅰ遺跡　山頂部柱穴列(東から)
図版36上　石橋Ⅰ遺跡　山頂部柱穴列(東から)・同(西から)
図版36下　石橋Ⅰ遺跡　完掘状況空中撮影
図版37上　高瀬城北遺跡第１調査区　遠景
図版37下　高瀬城北遺跡第１調査区　近景(北から)
図版38上　高瀬城北遺跡第１調査区　近景(南から)
図版38下　高瀬城北遺跡第１調査区　焼土検出状況
図版39上　高瀬城北遺跡第１調査区　第１土坑検出状況
図版39下　高瀬城北遺跡第１調査区　第１土坑完掘状況遠景
図版40上　高瀬城北遺跡第１調査区　第１土坑完掘状況近景
図版40下　高瀬城北遺跡第１調査区　遺物(須恵器)出土状況
図版41上　高瀬城北遺跡第１調査区　東西畦土層
図版41下　高瀬城北遺跡第１調査区　南北畦土層
図版42上　高瀬城北遺跡第２調査区　近景(南から)
図版42下　高瀬城北遺跡第２調査区　近景(西から)
図版43上　高瀬城北遺跡第２調査区　第１土坑
図版43下　高瀬城北遺跡第２調査区　第２土坑
図版44　高瀬城北遺跡　出土遺物

第１章　調査に至る経緯

山陰自動車道鳥取益田線は、中国横断自動車道尾道松江線・山陽自動車道・中国縦貫自動車道・西瀬戸自動車道（通称しまなみ海道）と接続し、日本海側地域と瀬戸内海地域の広域的な高速交通ネットワークを形成することにより沿線地域の産業・経済・文化の発展と活性化を図ることを目的に、昭和62年に予定路線が決定した。宍道～出雲間18.1kmについては平成３年12月に基本計画が、そして平成８年12月には整備計画も決定した。

この計画にともなう埋蔵文化財調査（トンネル予定地を除く八束郡宍道町・簸川郡斐川町・出雲市地内にかかわるもの）については、平成９年２月７日付で県土木部より県教育委員会に分布調査の依頼があった。これを受け、同年３月後半から分布調査を開始し、６月に調査結果を回答した。しかしこの調査は樹木の繁茂した中でのものであり、路線決定（用地杭設置）後及び立木伐採後の各段階での再踏査が必要であると確認された。なお、斐川町では県高速道路事務所の依頼を受け、この年８月から９月にかけて祇園原遺跡のトレンチ調査を行い、結果を９月末に回答している。12月には日本道路公団に対して施行命令があり、翌平成10年１月には工事実施計画も認可された。再踏査は条件の整った平成11年２月に行われた。

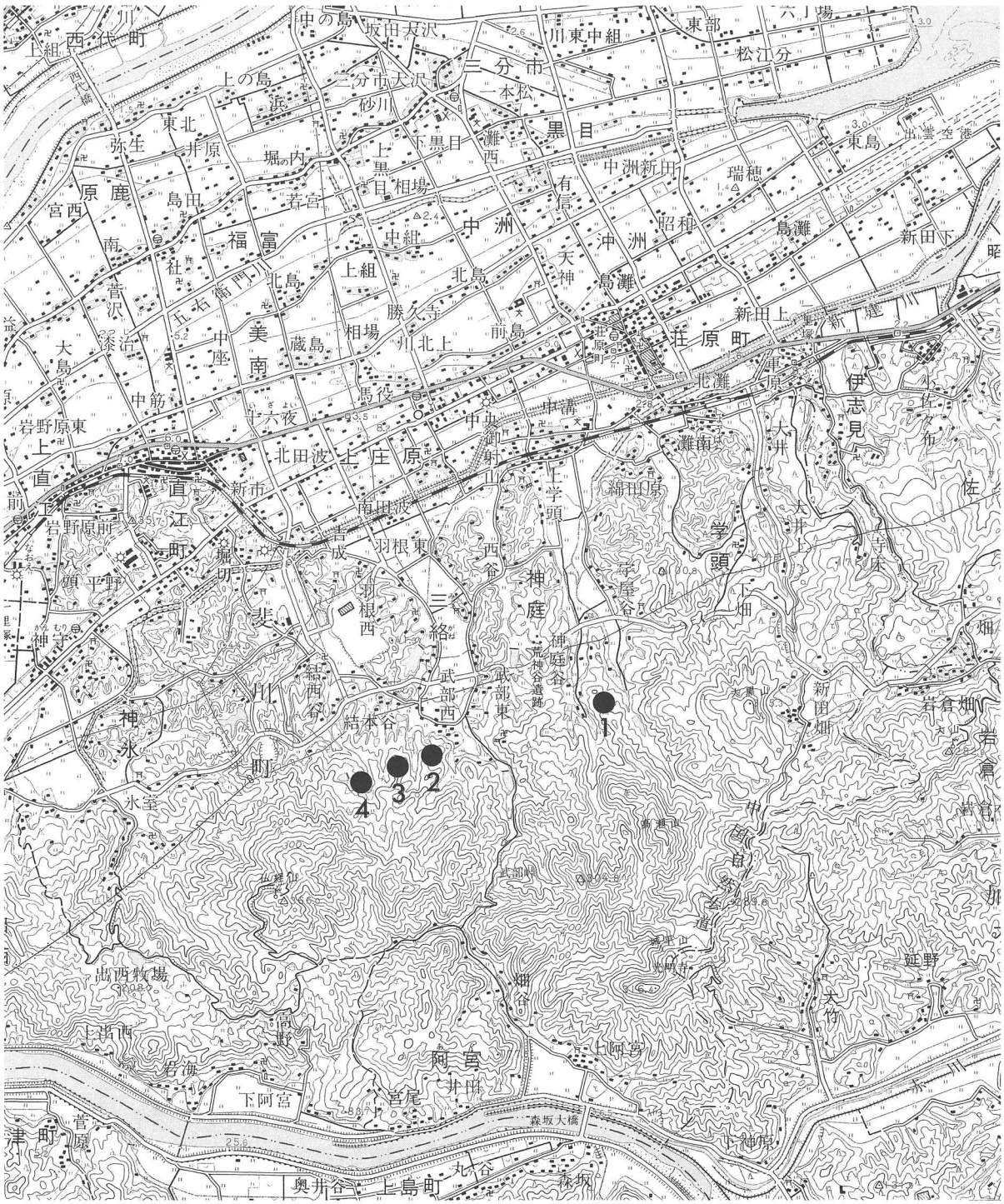
平成12年４月１日、県教育委員会は日本道路公団との間に「平成12年度埋蔵文化財発掘調査」の契約を結び、山陰自動車道建設予定地内の調査を本格的に開始した。５月には、社団法人中国建設弘済会に調査補助業務を委託するための契約も結ばれた。

平成12年度は６月から１パーティで斐川町の３遺跡を調査した。大井Ⅱ遺跡・大井Ⅰ遺跡・畑谷Ⅰ遺跡を対象としたこの年の調査は９月６日に終了、道路公団には10月２日付で結果を通知した。これに並行して８月には次年度を見据え、ルート上の同町学頭～神庭に所在する遺跡の調査範囲も決定された。

平成13年度は４パーティでの調査体制となった。４月25日に開始した西Ⅰ遺跡の調査を皮切りに、23遺跡を調査対象とした。斐川町内では学頭地区３遺跡、神庭地区５遺跡、三絡地区５遺跡、直江地区４遺跡、さらに出雲市内では上津地区６遺跡を調査し、12月に調査は終了した。調査結果は翌平成14年３月20日付で道路公団へ通知した。

平成14年度は２パーティの体制となる。調査は出雲市内のみとなり、上津地区６遺跡、神門地区12遺跡を対象とした。調査は４月18日に開始し、翌年１月に終了した。

今回報告する遺跡は、平成13年度に調査した西Ⅰ遺跡、祇園原Ⅰ遺跡、石橋Ⅰ遺跡、高瀬城北遺跡であり、いずれも斐川町内に所在する。



第１図　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）ルート上の遺跡（S＝1/50,000）

第１表　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）ルート上の遺跡一覧

番号	遺 跡 名	調査年度	主 な 内 容	報告書シリーズ名
1	高瀬城北遺跡	平成13年度	性格不明の土坑３基、焼土溜まり３か所	山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
2	西 Ｉ 遺 跡	平成13年度	加工段５、掘立柱建物３、須恵器、土師器、三輪玉、臼玉、鉄器	山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
3	石橋Ｉ遺跡	平成13年度	柱穴３、小規模ピット１、遺物なし	山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1
4	祇園原Ｉ遺跡	平成13年度	焼土・灰土坑６基、焼土・灰溜まり３か所、土師質土器多く出土	山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

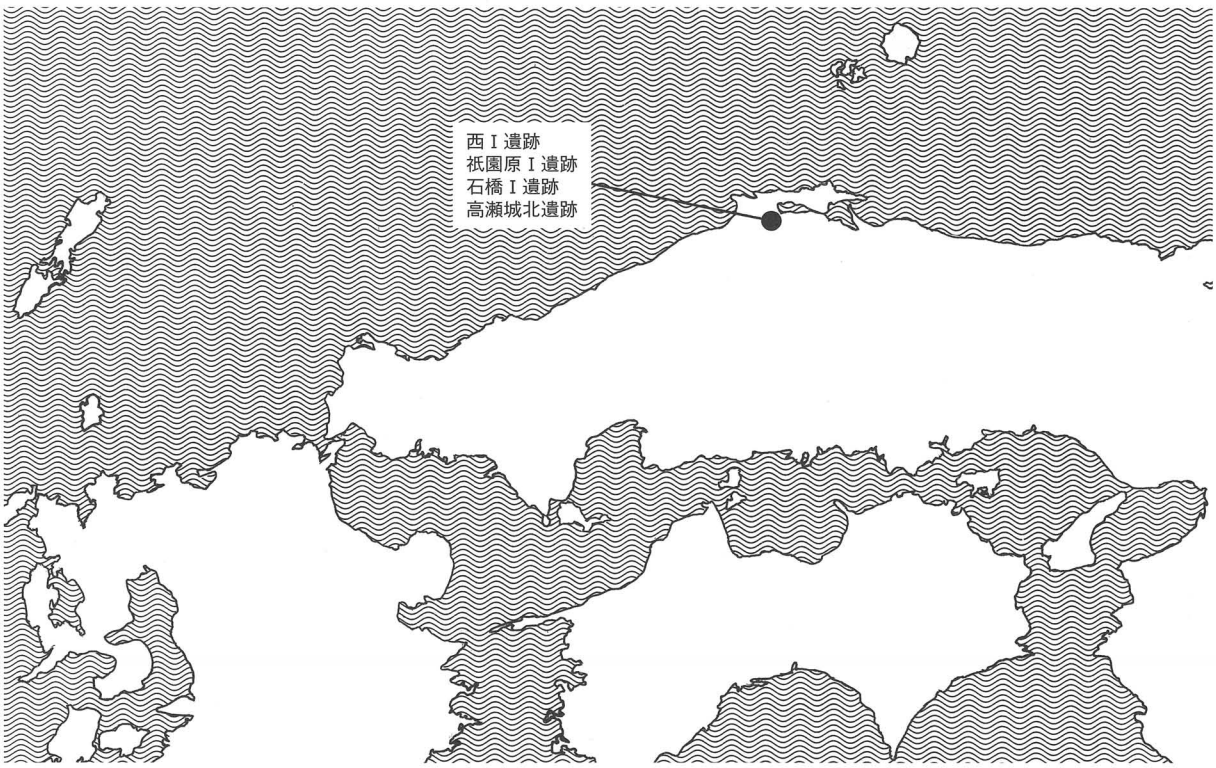
（西Ⅰ遺跡・祇園原Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡・高瀬城北遺跡）

【はじめに】本書で扱う４つの遺跡は、荒神谷遺跡で知られる島根県簸川郡斐川町に所在し、各遺跡はこれと至近の距離にある。斐川町はその名の通り、中国山地に源を発する一級河川斐伊川が南から時計回りに迂回しつつ宍道湖に注ぐ、その蛇行の内側に位置する町である。町の北部、いわば時計の上半分は近世に至って漸く現在の形となった沖積平野であり、南部すなわち下半分がこれらの遺跡を擁する丘陵や山麓で占められ、円の中心近くに荒神谷遺跡があるといえよう。この山麓には『出雲国風土記』に書かれた古代出雲郡の神名火山にも比定される仏経山（標高366m）をはじめ、高瀬山（314m）・大黒山（315m）などがあり、こうした山々からは低丘陵がいくつか北に伸びている。遺跡はこれら南側の山麓や丘陵周辺に集中しており、長らく入海（宍道湖）であった北側の平野部では発見されていない。

目を転じて斐伊川左岸の出雲平野を俯瞰してみよう。この平野は斐伊川と神戸川という二つの河川によって形成された沖積平野であり、この地に住む人々は時には豊かな土壌の恩恵を蒙り、時には氾濫という災害にも見舞われてきた。稲作の始まる弥生時代以降、肥沃なこの地域は高い生産力を保ち続け、しばしば政治的・文化的発信地となってきた。この左岸の動向は、当然斐川の地にも大きな影響を与えたであろうし、同一地域と考えるのがむしろ相応しい場合も多々あろう。こうした点も踏まえ、上記の４遺跡を取り巻く地理的・歴史的環境を概説したい。

１．旧石器時代以前

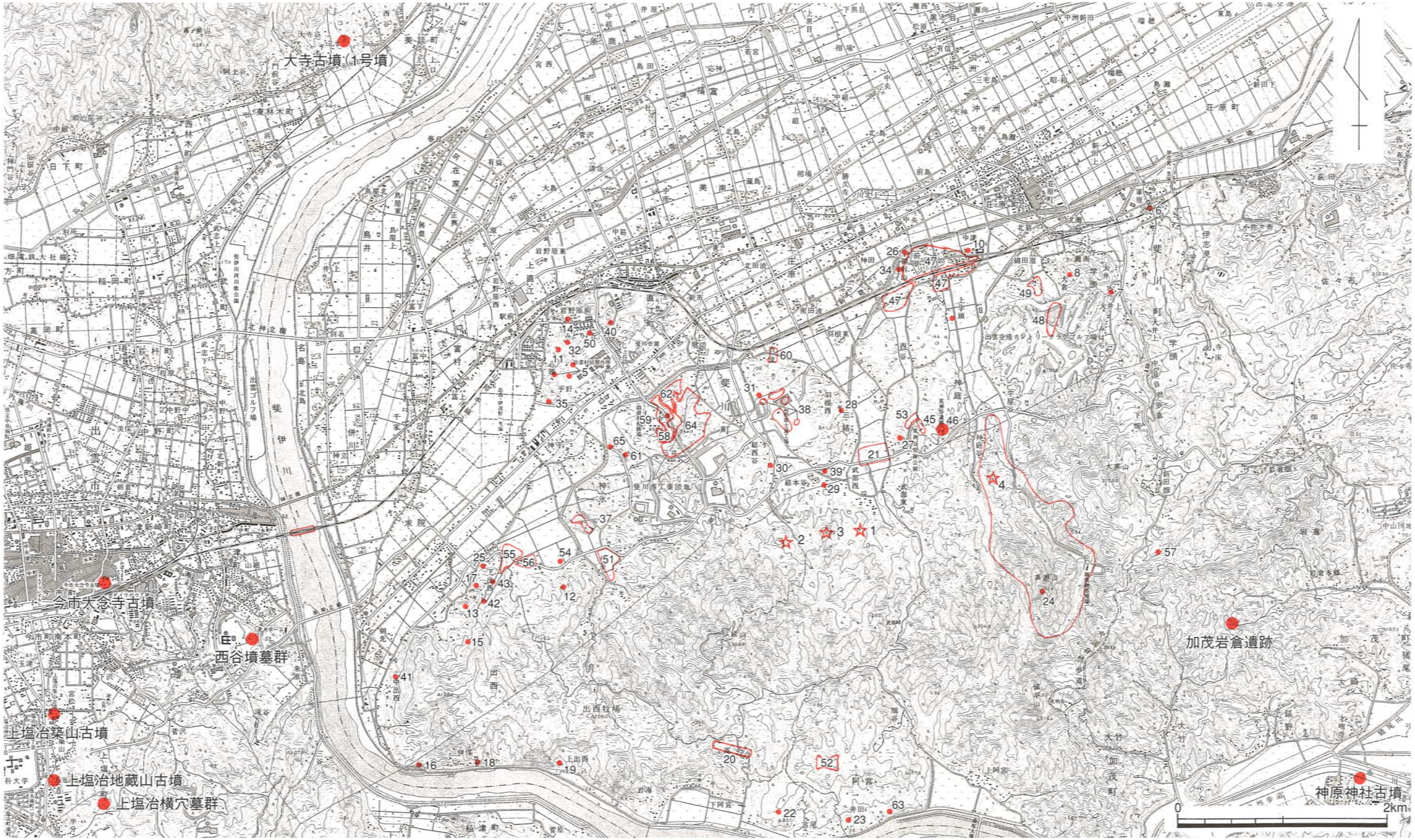
最終氷期（12万年前から１万２千年前）は地球的規模で海が後退した時代で、最も寒冷な時期といえる２万年前には、100m以上海面が低かった。従って現在の宍道湖・中海は存在せず、そこには東西に長く延びる深い谷があり、谷の底には松江市あたりを分水嶺とした「古宍道川」が流れていた。またその両岸には河岸段丘が広がっていた[1]。宍道湖周辺部ではこうした段丘面を中心に旧



第２図　本書掲載遺跡位置図

第２表　本書掲載遺跡と周辺の遺跡

	名　称	種　別	所在地	主な遺構	主な遺物
1	**西Ⅰ遺跡**	集落跡	武部	段状遺構、掘立柱建物、柵列	土師器、須恵器、三輪玉、白玉、石器、金属製品、鉄滓
2	**祇園原Ⅰ遺跡**	散布地	直江	土坑	中国陶磁器、土師質土器，須恵器
3	**石橋Ⅰ遺跡**	城跡	直江	柱穴	
4	**高瀬城北遺跡**	散布地	神庭	土坑	須恵器、土師器、石鏃
5	平野Ⅰ遺跡	散布地	上直江　平野		弥生土器、土師器、須恵器
6	軍原古墳	古墳	学頭　軍原	（前方後）円墳	直刀、貝輪、櫛、管玉、小札
7	大井城跡	城跡	学頭　大井	山城・郭５、土塁１、空堀１	鉄釘、陶磁器
8	大倉横穴群	横穴群	学頭　大倉	６穴以上	須恵器
9	小丸子山古墳	古墳	学頭　上学頭	円墳、礫床２	直刀、甲、須恵器
10	神庭岩船山古墳	古墳	神庭　中溝	前方後円墳、舟形石棺	円筒埴輪
11	剣山横穴群	横穴群	上直江　平野	４穴	直刀、須恵器
12	外ヶ市古墳	古墳	神氷　外ヶ市	横穴式石室	須恵器
13	出西小丸古墳群	古墳群	出西　随心	３基（横穴式石室２）	「廾」状陽刻の閉塞石、子持壷
14	岩野原横穴群	横穴群	上直江	３穴	
15	山ノ奥横穴群	横穴群	出西　山ノ奥	23穴以上	
16	海の平横穴群	横穴群	出西　上出西	３穴	
17	八幡宮横穴	横穴	出西		
18	岩樋上横穴	横穴	出西　上出西		
19	岩海横穴群	横穴群	出西　上出西	４穴	
20	高野古墳群	古墳群	阿宮　高野	３基（円墳１、横穴式石室３）	
21	武部遺跡	散布地	三絡　武部西～東	柱穴	縄文土器、須恵器、土師器、石鏃
22	布子谷古墳	古墳	阿宮　下阿宮	横穴式石室	
23	墓田横穴群	横穴群	阿宮　井田	３穴	
24	高瀬城跡	中世山城跡	神庭～学頭	山城・甲の丸、二の丸、鉄砲立	
25	沢田横穴群	横穴群	出西　沢田		
26	御射山古墳群	古墳群	荘原　御射山	３基（円墳２）	須恵器、刀、耳環
27	鍛冶屋横穴	横穴	三絡　武部東		須恵器
28	西光院横古墳	古墳	三絡　羽根西	横穴式石室	
29	武部西古墳群	古墳群	三絡　武部西	円墳２基、横穴式石室	
30	結城古墳	古墳	直江　結本谷	横穴式石室	
31	貴船古墳	古墳	三絡　貴船	横穴式石室	須恵器、埴輪
32	コモゴ山横穴群	横穴群	上直江　八頭	２穴	須恵器
33	稲城横穴	横穴	出西　後谷		
34	御射山横穴群	横穴群	荘原　御射山	２穴	須恵器、直刀、刀子、鉄鏃、金環
35	亀山横穴	横穴	上直江　平野		須恵器
36	水越古墳	古墳	阿宮　下阿宮	横穴式石室	
37	城山古墳群	古墳群	神氷　城山	15基（方墳７・円墳２他）	剣片、砥石
38	結遺跡	古墳群、住居跡	直江～三絡	古墳29基（方墳１・礫槨、円墳２・割竹形木棺）、建物３か所	蛇行鉄剣、鉄鏃、刀子、小剣、円筒埴輪、須恵器、縄文土器、石鏃、石匙、石斧
39	西古墳群	古墳群、土壙墓	三絡　西	２基（方墳２）、土壙墓	須恵器、土師器、直刀、短刀、鎌、鉄器、土師質土器
40	新市横穴群	横穴群	直江　新市	３穴以上	
41	剣先横穴群	横穴群	出西　剣先	２穴以上	
42	後谷横穴群	横穴群	出西　後谷	３穴	
43	後谷町道脇古墳	古墳	出西　後谷	横穴式石室	
44	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	併川神立～出雲市		弥生土器、古式土師器
45	西谷遺跡	散布地	神庭　西谷	溝状遺構	弥生土器、古式土師器、須恵器
46	荒神谷遺跡	青銅器埋納地	神庭　西谷		銅剣、銅鐸、銅矛、須恵器
47	神庭丘陵北遺跡	散布地	神庭～荘原		
48	大倉Ⅳ遺跡	散布地	学頭　大倉	溝状遺構	須恵器、土師器、碧玉、砥石
49	綿田原Ⅰ遺跡	散布地	学頭　綿田原		須恵器、青磁
50	平野横穴群	横穴群	上直江　平野	19穴	鉄刀、鉄製轡、刀子、鉄鏃、金環、勾玉、須恵器、土師器
51	氷室Ⅳ遺跡	散布地	神氷　氷室		弥生土器、須恵器、土師器
52	天寺平廃寺	寺院跡	阿宮　下阿宮	基壇２	礎石、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、のし瓦、鬼瓦、塼
53	西谷Ⅱ遺跡	散布地	神庭　西谷	溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器
54	小野遺跡	散布地	神氷　小野		須恵器、土師質土器、陶磁器、軒丸瓦、平瓦、鴟尾、弥生土器
55	後谷(旧後谷Ⅴ)遺跡	官衙跡	出西　後谷	礎石建物２か所、竪穴住居	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師質土器、白磁
56	稲城遺跡	散布地	出西　稲木谷		呪符木簡、須恵器、土師器、軒丸瓦
57	新田畑Ⅰ遺跡	散布地	学頭　新田畑	集落遺構	縄文土器、黒曜石
58	杉沢Ⅰ遺跡	住居跡	直江　杉沢	段状遺構、竪穴住居	弥生土器
60	宮谷遺跡	散布地	三絡		弥生土器、石器、円筒埴輪、陶磁器
61	三メ田(ミシメデン)遺跡	散布地	神氷　三メ田	掘立柱建物	須恵器、土師質土器、磨製石斧
62	杉沢Ⅲ遺跡	住居跡	直江　杉沢	総柱建物跡、側柱建物跡	土師器、土製品、須恵器、石鏃
63	井田横穴群	横穴群	阿宮　井田	２穴	
64	三井Ⅱ遺跡	住居跡	直江　三井	竪穴住居、掘立柱建物	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、石器、鉄器
65	上ヶ谷(アゲダニ)遺跡	散布地	神氷　上ヶ谷	総柱建物跡、溝状遺構	縄文土器、土師器、須恵器、石錘、磨製石斧、田下駄



第３図　本書掲載遺跡の位置と周辺の遺跡（S＝1/50,000）

石器時代の遺跡が20か所以上見つかっている。また、近隣では大黒山の東麓にあたる宍道町**首谷**で玉髄質角錐形細石核が表採されている[2]。しかし、斐川町域ではまだ旧石器時代の遺物・遺構は見つかっていない。

2．縄文時代

著しく海水面が上昇したいわゆる「縄文海進」期には、出雲平野にあたる部分に大きく海が入り込み、古宍道湾を形成していた。海進が鈍化すると、斐伊川と神戸川による河川堆積が進み、島根半島と陸続きになった。つまり東に古宍道湖、西に神門水海（かんどのみずうみ）の成立を見ることになる（約5,000年前）[3]。しかし斐川町域では平野部の大部分はまだ水面下であった。その後沖積作用を受け陸地が拡がってくるものの、基本的にこの地勢は江戸初期まで変わらない。

早期の遺跡としては、赤変した集石遺構と、200点を超える石器（石鏃・スクレーパー・石槍など）を検出した**新田畑（しんたばた）Ⅰ遺跡**がある。丘陵の奥深い谷にある**結（むすび）遺跡**でも早期末から前期初頭の刺突文土器・条痕文土器が出土した[4]。中期に属する遺跡に**上ヶ谷（あげだに）遺跡**があり、ほぼ完形に近い深鉢（船元Ⅰ式）が出土している[5]。また**後谷（うしろだに）遺跡**（旧後谷Ⅴ遺跡）からは晩期の竪穴住居跡のほか、後期前葉の磨消縄文を施す土器（中津Ⅲ式～福田Ｋ２式古段階）・突帯文土器・打製石斧などが見つかった。さらには**武部遺跡**からも後・晩期の縄文土器が出土している。

3．弥生時代

昭和59年に神庭字西谷（さいだに）で銅剣358本が、また翌60年にはその出土地からわずか東へ７ｍの地点で銅矛16本と銅鐸６個が発見され、全国に衝撃をもたらした（**荒神谷遺跡**）。銅鐸と銅矛の同所埋納も例のないことであった。埋納時期は銅剣・銅矛の型式などから、ほぼ弥生時代中期後半とされている。しかし、そもそも誰が何のためにこれだけ大量の青銅器を一括埋納したのかについては、いまだに学界の定説を得るに至っていない。隠匿説、祭祀説、一時保管説等それぞれに論拠を示すものの、各々確定できる材料を得るには至っていないのが現状である[6]。ところでこの荒神谷遺跡から西に３㎞の地点にある**杉沢Ⅰ遺跡**では、標高15～36ｍの丘陵斜面上に加工段が十数箇所見つかっており、中期後半の土器類が出土している。荒神谷遺跡との関連もむろん耳目を引くところであるが、いずれにせよ一定の規模を持つ弥生時代集落そのものが町内では未発掘であり、調査の進展に期待したい。

この他の遺跡の分布状況[7]を広く見てみよう。斐伊川左岸の現出雲市域では、中期以降、**天神遺跡**や**古志本郷遺跡**といった大溝を伴う拠点集落が出現する。しかし、右岸にあたる斐川町域では、依然として丘陵の縁辺部に散見される程度である。町内で最も早い時期の遺跡は後谷遺跡である。ここでは縄文時代晩期から継続して弥生時代前期、中期末から後期と、断続的に集落が営まれている。中期中葉からこうした居住地は広がりを見せ始め、丘陵地の**神庭丘陵北遺跡**、**平野Ⅰ遺跡**、ないし丘陵縁辺部の**宮谷遺跡**、**氷室Ⅳ遺跡**等でも、集落が形成されていたようだ。また、荒神谷遺跡に近接する**西谷（さいだに）遺跡**や**西谷Ⅱ遺跡**では後期の遺跡が確認されている。一方この頃（後期後半）、斐伊川左岸では**西谷（にしだに）墳墓群**が現れる。大型の四隅突出型墳丘墓を含む大小約20基の墳墓群で、ここから出土した、吉備地方との交流を示す特殊器台や特殊壺、丹後・北陸系の土器などは、この時代の広汎な政治的繋がりを示すものとして注目される。

4．古墳時代

周辺域の重要古墳と斐川

古墳時代、斐伊川中流域は早くから有力な政治勢力が存在したようである。加茂町の**神原神社古墳**（方墳・前期）からは景初三年銘の三角縁神獣鏡が出土し、全国的に脚光を浴びた。畿内ないし瀬戸内との関連が指摘される古墳である。また、平野北部にも大きな勢力が在ったようで、出雲最古の前方後円墳とされる**大寺古墳**（大寺１号墳、前期末～中期初め・出雲市東林木町）が築造されている。（時期はややずれるがこの北東２㎞には、馬具などの秀逸な副葬品で知られる後期前半の円墳**上島（あげしま）古墳**がある。）中期に入ると、宍道湖縁辺に中小の政治的勢力が育ち始めてくる。斐川地域では丘陵北縁に所在する**軍原（いくさばら）古墳**、**神庭岩船山古墳**、**小丸子山古墳**がその証である。軍原古墳（全長50m余の前方後円墳と推定）出土の、南海産テングガイ製腕輪等の副葬品、組み合わせ式家形石棺は、この地と九州との繋がりを窺わせる。神庭岩船山古墳（推定長57m、前方後円墳）は、副葬品が散逸しているものの、舟形石棺は身の縁が印籠口式に加工された全長2.7mの見事なものである。町内最大の円墳である小丸子山古墳（直径32m、高さ5.3m）では、剣・甲・須恵器等が出土している。

群集墳と蛇行状鉄剣

中期の後半から後期の中頃にかけ、１辺（径）10m内外の古墳が10～30基群集して築造されてゆく。これらは前述の古墳のいわば下位に属する古墳群と考えられる。その１つ、**結（むすび）古墳群**（方墳14基と円墳20基）の中の**11号墳**（方墳、礫槨）からは、国内の出土数が40本に満たない蛇行状鉄剣（全長53㎝）が出土している。５世紀代の畿内、及び６世紀代の南九州に偏在していることから、九州出土のものは「中央から将来されたもの」[(8)-1] とする見解もある。呪術性を持ったものとする見方もある[(8)-2、(8)-3]が、今後の研究が待たれる。このほか三絡の**西古墳群**のうち**西１号墳**（木棺直葬・調査後消滅）からは、茎（なかご）にコの字状の切り込みを持つ全長108㎝の直刀が出土している[(9)]。直刀は出雲西部で数例を数えるものの、１ｍを超えるものは近隣では後述の上塩冶築山古墳に類例を見るのみである。

後期古墳の特徴

この地域の後期古墳を調べてみると、横穴墓が斐川町西側にあたる出西、上直江に集中しているのに対し、横穴式石室が全町域に渡って築かれていることがわかる。**平野横穴群**など、この地の横穴は、出雲西部の出雲市**上塩冶横穴墓群**と同じ奥行きの長い妻入り構造を呈しているものが大半である。しかし横穴式石室のなかには、出雲東部の石棺式石室の影響を受けたと思われる石室構造をもつものがある。また、**出西小丸１号墳**の石室入口の閉塞石には、九州地方に起源をもつと考えられている閂状の浮き彫りが施されているが、このような陽刻は宍道町から松江市にかけて６例が知られている[(10)]。このように斐川町に所在する後期古墳が、出雲西部と出雲東部の古墳のいずれの特徴をも示していることは興味深い事実である。

出雲の大型古墳

ところでこうした斐川町の古墳の被葬者たちは、斐伊川左岸の地に盤踞する広汎な勢力、すなわち**今市大念寺古墳**、**上塩冶築（かみえんや）山古墳**、**上塩冶地蔵山古墳**等の被葬者と関係があったと思われる。６世紀後半から７世紀初めに築かれたこれらの古墳のなかでも、とりわけ前二者に収められた副葬品

は、金銅製履（大念寺古墳）、歩揺付金銅製冠（築山古墳）など全国的にも屈指の優品揃いであり、その勢力の大きさを偲ぶことができる。大念寺古墳は墳長92mという県内最大の前方後円墳であるが、これに先行する大型古墳が出雲平野で発見されていない点、また大陸・朝鮮半島に起源を持つとされる「版築」状の盛土土木技術を墳丘築造に用いている点など、注目すべき特異な古墳といえよう。自然石を巧みに組み合わせた現存長12.8mの横穴式石室、長さ3.3mという日本最大の刳抜式家形石棺も特筆に値する。一方上塩冶築山古墳は、最近の再調査で幅15mの周溝を伴う円墳であることが確認された。横穴式石室の現存長は14.6mにも及び、２つの家形石棺も併せ、切石による高度な技術を目の当たりにすることができる。副葬品は冠の他にも銀環・銅鈴・鉄鏃・捻り環頭大刀・円頭大刀・多くの馬具等豪華なものである。

5．奈良時代

郡衙跡と寺院遺跡

奈良時代前半に書かれた『出雲国風土記』（733年）によれば、斐川町域に当たる地には健部郷、漆治郷、出雲郷、河内郷、神戸郷、美談郷の名が見える。また、これらが属した出雲郡は、他に宇賀郷（平田市の一部）、伊努郷（出雲市の一部）、さらには杵築郷（大社町）をも含む広大なものであった。斐伊川は「出雲大川」と呼ばれ、「流域が肥沃で五穀が豊かに実り、川魚も豊富である」と記されている。この時代の官衙跡としては、出雲郡衙の一部に比定される出西の後谷遺跡があり、調査が行われている。郡衙政庁跡は残念ながら発見に至っていないが、墨書土器や大量の炭化米、さらには大きな礎石を伴った大規模遺構が検出された。これは東西150m、南北120mに及ぶ倉庫群の可能性があり、郡衙付属の正倉跡と考えられている。後谷遺跡に隣接した２遺跡のうち、**稲城遺跡**からは出雲市の神門寺廃寺出土のものと類似する水切瓦、軒丸瓦や呪符木簡が、**小野遺跡**からは墨書土器、円面硯、鴟尾、軒丸瓦が出土している[11]。これらの出土状況から、両遺跡は寺院の可能性も高いとされる。また、仏経山の東南、標高200mの山頂に広がる**天寺平廃寺**では塔および金堂の基壇と礎石が確認され、奈良時代後期～平安時代初期にかけての関連遺物（軒丸瓦、軒平瓦、塼など）が多数発見されている[12]。

その他の遺跡

この時期の建物跡については、他にも次々と見つかっている。**武部西遺跡**では主軸を整然と南北に向けた掘立柱建物５棟が、また**三メ田遺跡**では丘陵上から３間四方の総柱建物跡が発見されている[13]。同様な立地条件では、**杉沢Ⅲ遺跡**がある。ここからは２間四方の総柱建物跡が検出され、近くのピットから内側に赤色顔料が塗られた須恵器の高杯が、杯に蓋をする状態で出土した。付近の谷から「三井」と書かれた墨書土器も出土していることから、『風土記』にも登場する御井神社の元宮の可能性も指摘されている。

6．平安～戦国時代

大倉Ⅳ遺跡や前述した小野遺跡からは、平安時代の掘立柱建物跡が発見されている。なかでも大倉Ⅳ遺跡からは、桁行７間、梁間６間の大型の建物跡が検出されており注目される[14]。また、西古墳群中で発見された土壙墓は平安末期～鎌倉期のもので、副葬されていた土師器群は県内における中世土器編年の重要資料となっている[15]。

さて、斐川の地でも律令制の崩壊と荘園制の進展は平安期以降確実に進んでいった。中でも出雲大社や鰐淵寺といった寺社勢力の浸透は顕著であり、すでに平安末期には杵築大社（出雲大社）領が斐川町西部に成立していた[16]。『北島家文書』（康元元年 1256）によれば、鳥屋郷・求院村・北島村・富郷・千家村などが杵築大社領として見える。この杵築大社国造家は南北朝期に２家に分かれるが、斐川の地で各々が領する千家、北島両村の名を取って氏の姓としている。一方、鰐淵寺も平安期に延暦寺の末寺となり、漆治郷（直江）は近江の日吉神社（延暦寺守護社）領となっている。南北朝期にはまず南朝、ついで北朝から当郷の知行を安堵され、次第に鰐淵寺の支配が確立してくる。神仏習合思想の浸透の中で二者はさらに連携を強め、「杵築と鰐淵は二にして二ならず」[17] と謳われたごとく、寺社勢力の双璧として密接な関係を築いていったのである。

信濃国桑原・武蔵国泉の両氏は承久の乱後の恩賞としてか、それぞれ建部郷（三絡）、宇屋新宮（神庭）の地頭に補せられている。その後戦国期に入ると、尼子氏の重臣米原氏が高瀬山に**高瀬城**を築き、拠点とした。経久をはじめこの地は尼子氏との因縁浅からぬ土地で、高瀬城は尼子氏の支城中、屈指の山城であった。遺構には**「大高瀬（甲の丸）」**、**「小高瀬（二の丸）」**、**「鉄砲立」**などがあり、城主、家臣の居館跡とされる平地の**御坪谷**（小局谷）近くには、今も五日市、殿ヶ市などの地名を残し、往時を偲ばせる[18]。米原綱寛はこの城に籠り、毛利勢の猛攻をよく凌ぐが、敵方の兵糧作戦に屈し、元亀２年（1571）開城を余儀なくされる[19]。一方支配権を得た毛利輝元による惣国検地（天正19年 1591）は、寺社勢力には大打撃となる。この結果、鰐淵寺の漆治郷に対する支配は終焉し、現斐川町における杵築大社領はわずかに千家・北島郷を残すだけとなるのである。

7．江戸時代

江戸初期、斐川の地は神門・出東・楯縫の３郡に分かれていたが、寛文年間（1661～1673）には「出雲郡」33か町村が分立したと見られる。また、遡って幕藩体制草創期の寛永15年（1638）、松江藩は千家・北島・富の３か村を含む2730石を杵築大社に寄進している。これら「社領３ヶ村」はやはり村内でも特別な地歩を占めていた。

土地にまつわり特筆すべきは、寛永12年（1635）の大洪水で斐伊川が流れを東に変え、宍道湖に注ぎ始めたことだった[20]。ここに沖積作用が進み、藩の「川違」（新川開削）も相俟って新田開発が急速に進展することとなる。こうして現在の湖岸線に近い形が現れる[21]のであるが、創り出された簸川平野の未熟地（反新田）を熟田化させ、租税の増収を図ろうとする松江藩の熱意は、文政３年（1830）に書かれた農政書[22]にも如実に現れている。この地の作物としては米作のみならず、出雲国の特産物の最上位を占めた木綿も名高かった。また出西を中心とした生姜、新川土手での櫨の栽培なども盛んに行われた。

8．明治以降

斐伊川とその支流新川は、農業用水を提供する貴重な役割を果たしてきたが、十年に一度は大水害をおこす荒れ川でもあった。大正12年（1923）には斐伊川水系の改修事業が始まり、その過程で新川は昭和14年（1939）廃川となった。跡地は戦時中海軍の飛行場用地にもなったが、現在は新川旧河道の東部が県営出雲空港として利用されるに至っている。

□古文献にみるこの地域

○『**出雲国大税賑給歴名帳**』（正倉院文書・天平11年〈739〉）には、当時の出雲郡漆治郷・河内郷・出雲郷などの村落構成が明示されている。本書の4遺跡がある斐川町東部は出雲郡健部郷に属していた。この郷の名については、『**出雲国風土記**』（733年）に、以下のような興味深い記述がある。宇夜都辨命が峰に天降ったので、そこを**宇夜の里**といった、とした後「しかるに後に改めて**健部**と號くる所以」は、景行天皇が「『朕が御子，倭健命の御名を忘れじ』とのりたまひて、健部を定め給ひき」と記し、神門臣古禰を健部と定めたとし、「故、健部といふ」とある。天皇の命による名代の設置と地名起源の説き起こしという、異例ずくめの記述である。本報告書所収の西Ⅰ遺跡の所在地は**武部**であり、「建部」姓を多く残す。また、所収4遺跡から目睫の距離にも**宇屋**谷という地名を見ることができる。

○『**日本書紀**』の**崇神紀**には、出雲振根たちの権力争いの場として**止屋の淵（塩冶郷）**が登場する。振根は自分が留守の間に、朝廷に神宝を献じてしまった弟飯入根を深く怨み、「頃者（このごろ）、止屋の淵に多に蓼生ひたり。願はくは共に行きて見欲ほし」と誘いかけ、清らかな淵で共に沐浴した後、殺害してしまう。時代や人物の特定は困難ではあるが、往事出雲の中枢勢力がこの界隈にいたことを窺わせる内容である。振根は入根を殺害した後、逆に朝廷から誅せられる。その結果、「出雲臣等、是の事に畏りて、大神を祭らずして間有り。」ところがその後丹波に住む小児が、出雲の御宝について神憑りのように唱えたという不思議な事件が起こり、それを機に朝廷は出雲臣に再び大神を祭らせることとなる。出雲振根は神門臣古禰に比定される存在でもあるが[23]、崇神紀のこうした記述はこの地について考えるよすがを示してくれる[24]。

○「宇夜の里」が、当時入海（宍道湖）に面していたことは前述の通りであるが、『**新撰姓氏録**』（815年）にも、「詣二出雲國宇夜江一、捕貢レ之」（出雲國**宇夜の江**に詣りて、捕へて之を貢ぐ）と記されている。「之」とは、鵠（白鳥）のことであり、垂仁天皇の皇子譽津別がこの鳥を見て初めて言葉を発し、天皇は之を悦び、鵠の行方を探させたという記述に続く場面である。「出雲大神」の祟りが暗示され、『記紀』共に紙数を割くこの件は、謎めいていて奥の深さを感じさせる[25]。なお『**日本書紀**』**垂仁紀**では上記の部分について「出雲に詣りて、捕獲へつ。」と記すのみである。

【註】

（1）『宍道町史【通史編上巻】』宍道町史編纂委員会　2001
（2）『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』斐川町教育委員会　1992
（3）林　正久「荒神谷遺跡周辺の地形環境」『古代文化研究』第4号　島根県古代文化センター　1996
（4）『荒神谷遺跡発掘調査概報（2）』島根県教育委員会　1986
（5）『上ヶ谷遺跡発掘調査報告書』斐川町教育委員会　1998
（6）岩永省三『歴史発掘7　金属器登場』講談社　1997／『出雲神庭荒神谷遺跡』　島根県教育委員会　1996
（7）『弥生時代のひかわ』斐川町教育委員会　1999
（8）－1　田中　茂「地下式横穴出土の蛇行剣について」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』日本考古学協会　1976
　－2　宍道年弘「結11号墳出土の蛇行状鉄剣」『八雲立つ風土記の丘』No.73　島根県立八雲立つ風土記の丘　1985
　－3　田中　茂「南九州出土の蛇行剣」『宮崎県史研究』第2号　宮崎県　1988
（9）斐川町教育委員会「斐川の文化財　鉄製大刀出土　西1号墳」『広報ひかわ』斐川町　1987.10.21
（10）山本　清『山陰古墳文化の研究』報光社　1971
（11）『出雲郡家関連遺跡群第9次発掘調査概報』斐川町教育委員会　2001／『後谷遺跡第5次発掘調査概報』同　1997
（12）斐川町教育委員会「斐川の文化財　天寺平廃寺」『広報ひかわ』斐川町　1987.8.21　ただ、この地は郡衙跡とされる後谷遺跡からは東南に4キロの位置であるが、『風土記』には「郡家の正南十三里一百歩（約7キロ）」とあり、食い違いを残している。
（13）『三メ田遺跡』斐川町教育委員会　1999
（14）『大倉Ⅳ遺跡　綿田原Ⅰ遺跡』斐川町教育委員会　1997
（15）川原和人・桑原真治「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『古文化談叢』第18集　九州古文化研究会　1987
（16）『日本歴史地名大系33　島根県の地名』平凡社　1995　その他平安～江戸期の土地所有に関する記述の多くは

これに負う。

(17)『出雲国　浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺　1997

(18)『日本城郭大系第14巻』新人物往来社　1980　なお、遺構の呼称については山根正明氏（松江南高校）より御教示を得た。

(19)『新修島根県史・通史編』臨川書店　1968／『斐川町史』斐川町史編纂委員会　1972

(20)『島根県歴史大年表』郷土出版社　2001／『しまね史記』讀賣新聞社　1974　なお後述の川違は鉄穴流しによる川床の上昇を抑制する狙いもあった。特に天保３年（1832）から五年間を費やした川違は流路10kmにも及んだ。

(21) 植田寿子「郷土地理教材としての築地松」『高知大学地理第４号』高知大学教育学部地理学研究室　1999　には、斐川町域をほぼ東西に二分する新田・本田の分布図・境界域が示されている。

(22)『神門・出雲・楯縫郡反新田出精仕様書（日本農業全書９）』農山漁村文化協会　1978　藩の諮問に応えた具申の書で、施肥から農家経営まで微細に亘る。

(23)－１　高嶋弘志「出雲国造の成立と展開」『古代王権と交流７　出雲世界と古代の山陰』名著出版　1995

－２　井上光貞「国造制の成立」『井上光貞著作集』第４巻　岩波書店　1985（初出は『史学雑誌』60－11　山川出版社　1951）

これらの論文は森田喜久男（古代文化センター）の教示による。

(24) 上記の著作集第３巻（1985）で井上は『出雲国大税賑給歴名帳』（p10に既出）の健部郷での氏族構成を論じ、『風土記』の遺称地でもあるこの郷を服属地帯と捉え、「ここに氏族構成と、神宝の物語とがふれあっていることはたしか」（p268）であり、キズキ勢力（後出のカムドとほぼ同義）は畿内と結んだオウ勢力に征討され、祭祀権の収奪が行われたとする。

大谷晃二「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター　1999　第７章第６節　大谷は出雲の東西で飾大刀の系統が明確に異なることから論を起こし、物部氏と蘇我氏の対立、ひいては物部氏の滅亡がこの古墳の主（「カムド」勢力）の衰亡の原因であると論じる。つまり「オウ」「カムド」両勢力とも畿内勢力と緊密な関係を持った中での盛衰と捉えている点、井上と立場を異にしている。

(25) 菊池照夫「出雲国造神賀詞奏上儀礼の意義」『古代王権と交流７　出雲世界と古代の山陰』名著出版　1995では、この白鳥献上譚は先に記した神宝献上譚と同じく、「天皇への霊威付与」という意味を持つとする。従来の「服属関係としての出雲対畿内」という見方への問題提起があり、興味深い。

参考文献

『島根県大百科事典上・下』山陰中央新報社　1982

坂本太郎他校注『日本古典文学大系　日本書紀』岩波書店　1965

秋本吉郎校注『日本古典文学大系　風土記』岩波書店　1958

加藤義成『修訂　出雲風土記参究』今井書店　1992

西宮一民校注『新潮日本古典集成　古事記』新潮社　1979

佐伯有清『校訂　新撰姓氏録の研究』吉川弘文館　1962

『古代出雲文化展』　島根県教育委員会　1997

『斐川町文化財所在地名一覧表』斐川町教育委員会　2001

『後谷Ｖ遺跡』斐川町教育委員会　1996

『荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報』島根県教育委員会　1985

『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会　1987

前島己基編著　『古代出雲を歩く』山陰中央新報社　1997

山本　清編『風土記の考古学③　出雲風土記の巻』同成社　1995

第３章　西Ⅰ遺跡の調査

第１節　調査の経過

西Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡の周辺は山陰自動車道・斐川インターチェンジ予定地となっており、調査対象地には西Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部も含まれていた。しかし、確認調査の結果、西Ⅱ・Ⅲ遺跡では顕著な遺構・遺物は確認されなかったため、インターチェンジ予定地では西Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡が本調査の対象となった。

西Ⅰ遺跡は中国山地から派生する低丘陵の北側緩斜面に位置している。遺跡は谷川を挟んで東西に分かれるため、谷の西側をＡ区・Ｂ区とし、東側をＣ区・Ｄ区として調査を実施した。確認調査は４月25日～５月27日まで実施し、表土下で遺物包含層が確認された範囲について本調査を実施した。確認調査は川原和人、奥村昌子、横木尚文、松崎恵美子が担当した。

Ａ区は立木伐採を実施した後、５月28日から本調査を開始し、10月24日に空撮を実施し、10月25日に現地調査を終了した。途中、10月14日には斐川町民を対象とした現地説明会を実施し77人の参加を得た。Ａ区の調査面積は1,550㎡、Ｂ区は200㎡、Ｃ区は110㎡、Ｄ区は120㎡である。

Ａ区の本調査は岩橋孝典、福場康芳、植田寿子、露梨靖子が担当し、Ｂ・Ｃ・Ｄ区は大庭俊次、赤木努、植田寿子、糸賀伸文、伊藤悟郎が担当した。また、調査３係職員が随時応援にあたった。

第２節　Ａ区の概要

Ａ区は標高48～59ｍの北東に開けた斜面に位置するが、中央に南西から北東に下る埋没谷が入っており、周辺と比較すると傾斜の緩い緩斜面となっている。調査前の段階から地表面の各所に平坦面や小規模な土饅頭が確認され、集石も見られたことから段状遺構や石室を持つ古墳の存在が想定されていた。

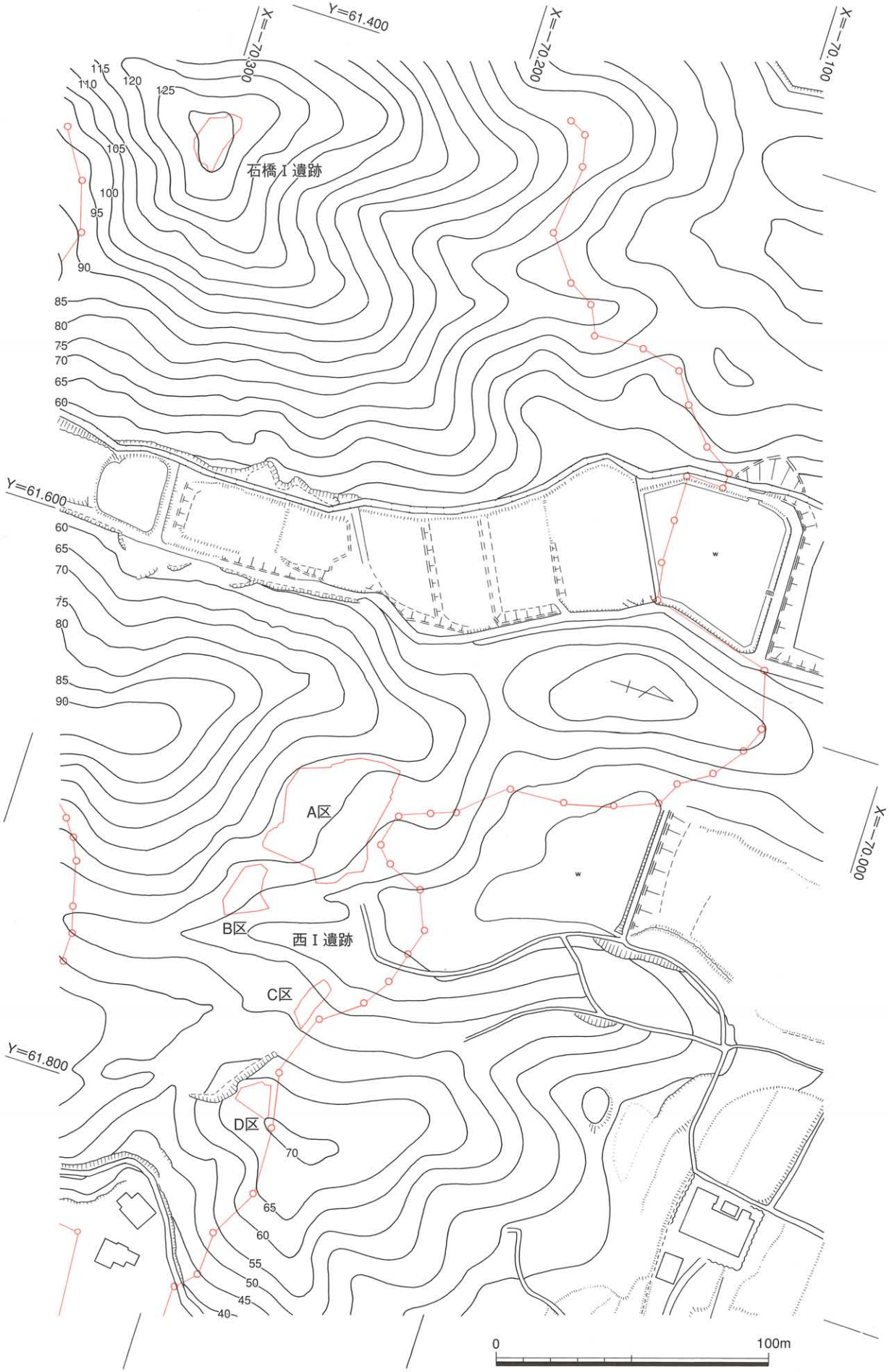
調査区の設定ではコンターラインに直交する大セクションベルトを２本設定し、最も西側の区画をＡ－１区、中央区画をＡ－２区、東側区画をＡ－３区とし、さらに各区を標高により上段・中段・下段・下段斜面の４段階に区分して大まかな区分けとした（第７図）。

基本的な土層は上から表土・暗黄褐色土層・地山となり、堆積厚は50～70㎝であった。

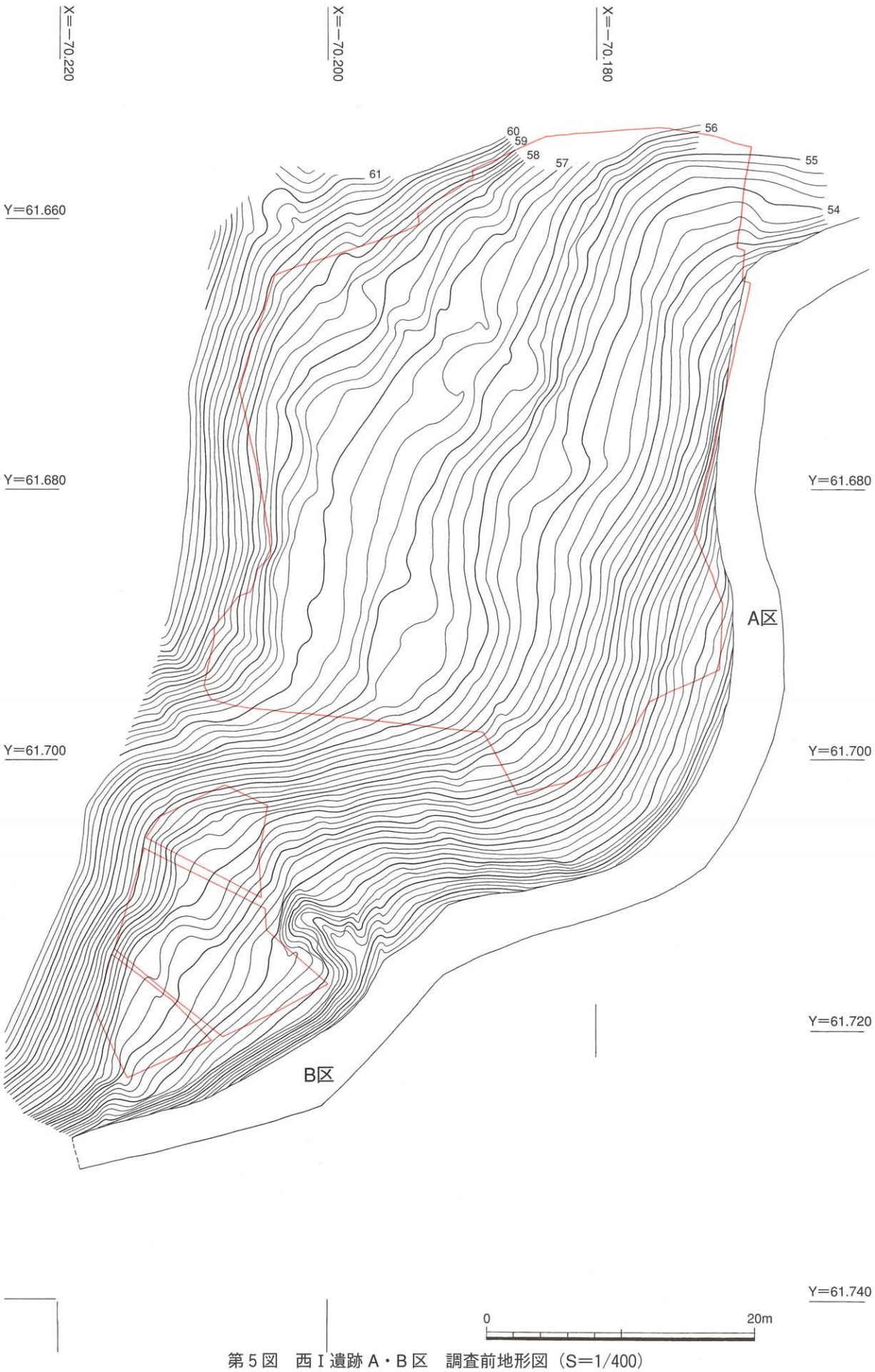
調査前から確認されていた土饅頭状のマウンドは、調査を進める過程で、土層の検討などから谷の傾斜変換点に堆積した土砂であることが判明した。そのため、当遺跡の性格は集落遺跡である可能性が強まり、竪穴建物・段状遺構・掘立柱建物の検出に努めた。

結果的に調査区内では２段にわたって段状遺構が確認されたが、調査対象地の北側にも平坦面が見られることから、実際は３段以上にわたる段状遺構が存在するものと考えられる。これらの段状平坦面に掘立柱建物等を連ねた６世紀末～７世紀初頭の集落跡が主な検出遺構であるが、遺構に伴わない８世紀後半～11世紀の遺物も一定量存在することから、奈良～平安時代においてもなんらかの人間活動があったものと考えられる。

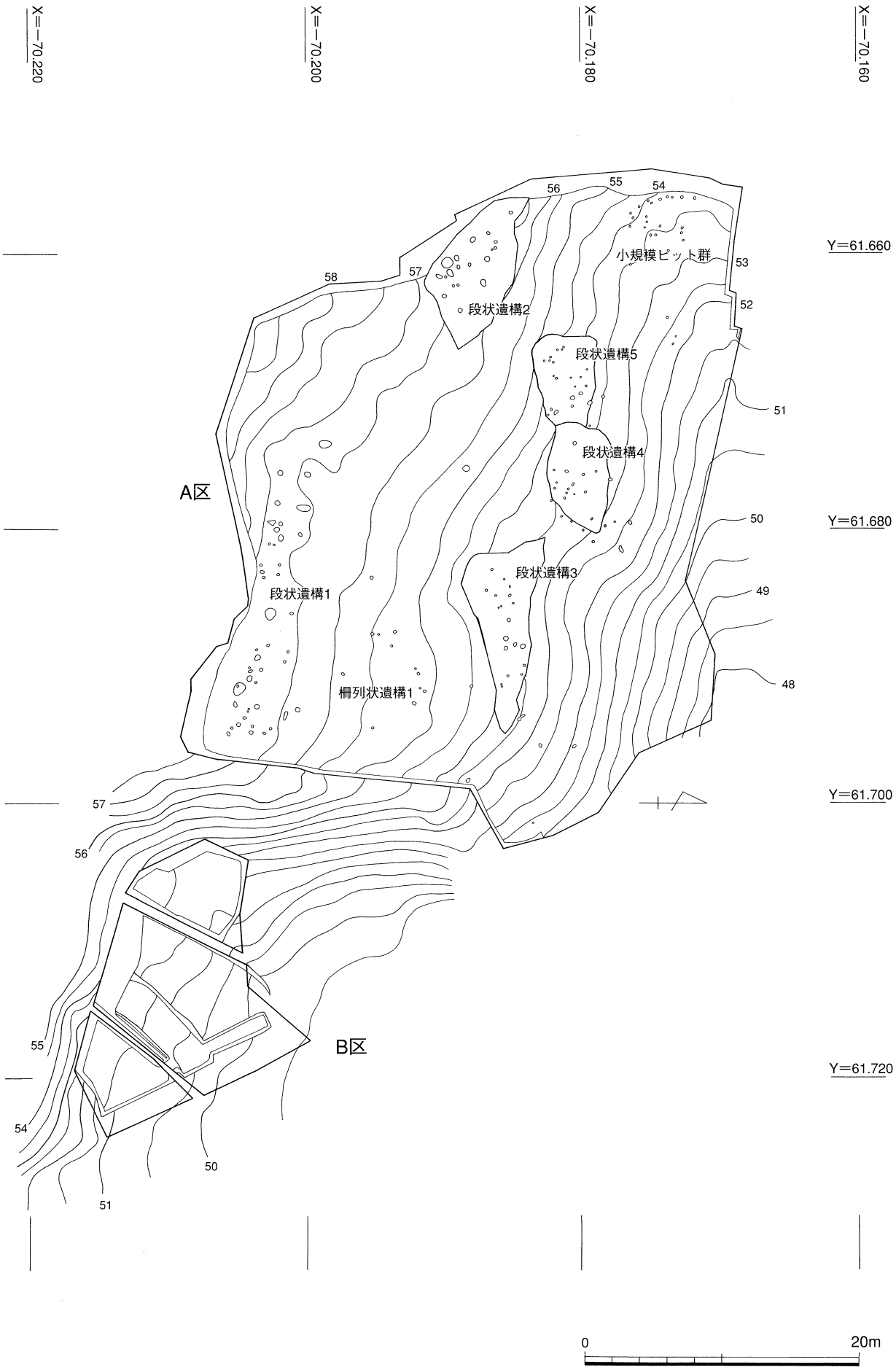
調査区より南側は急斜面となっており、頂上部などにもトレンチを設定したが遺構・遺物は確認できなかった。また、北側も上記の平坦面より北では急斜面となり遺構は確認できないことから、集落としては3000～4000㎡ほどの範囲に収まるものと考えられる。



第４図　西Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡周辺図（S=1/2,000）



第５図　西Ⅰ遺跡Ａ・Ｂ区　調査前地形図（S=1/400）



第６図　西Ｉ遺跡Ａ・Ｂ区　調査後地形図（S=1/400）

第３表　西Ⅰ遺跡　段状遺構１ピット計測表

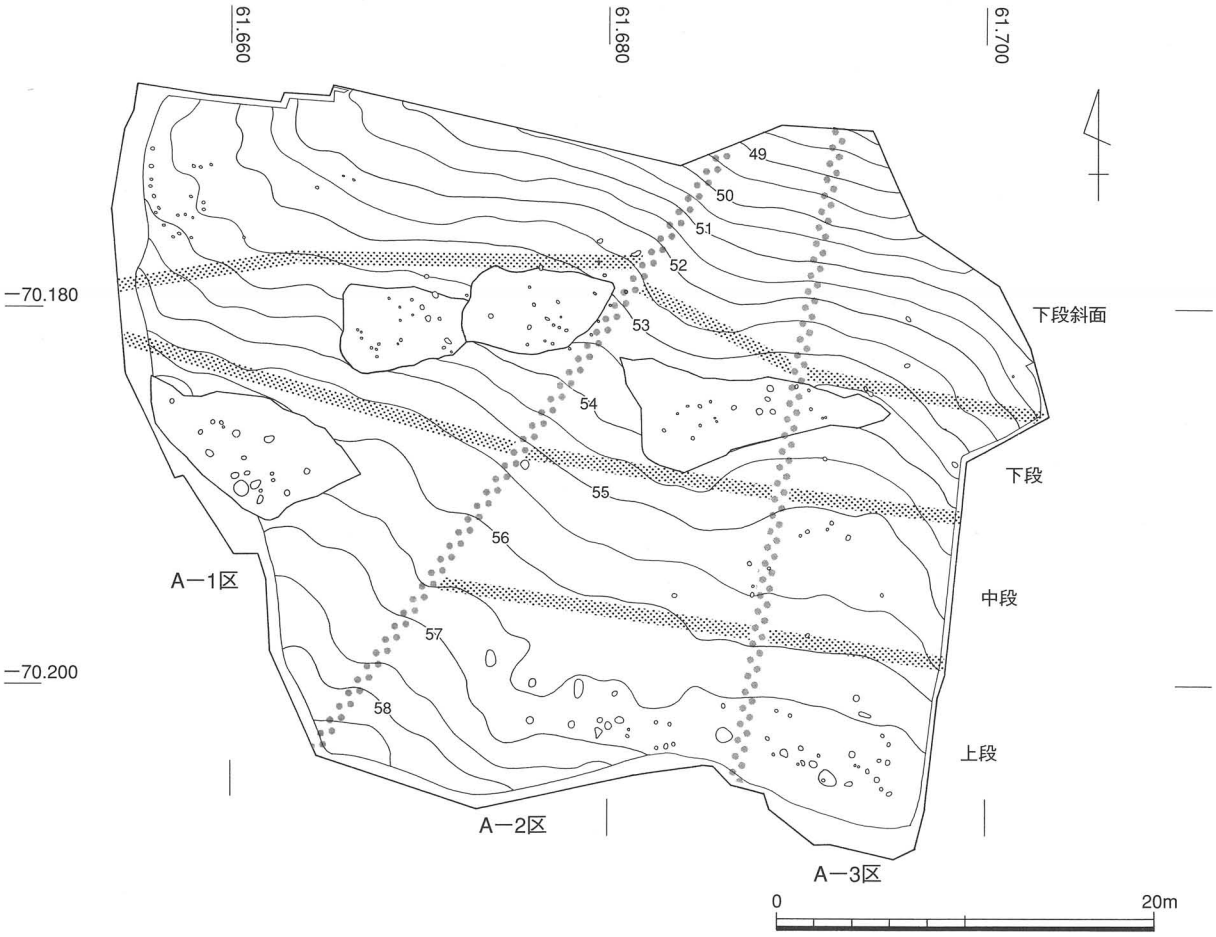
ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P１	P18	0.78	0.72	0.34	56.62	P24	P23	0.19	0.19	0.13	56.71
P２	P８	0.49	0.41	0.33	56.6	P25	P39	0.3	0.22	0.32	56.44
P３	P２	0.48	0.41	0.25	56.55	P26	P25	0.26	0.26	0.34	56.29
P４	P４	0.27	0.25	0.23	56.54	P27	P26	0.25	0.2	0.34	56.27
P５	P９	0.46	0.39	0.28	56.57	P28	P41	0.29	0.23		
P６	P１	0.37	0.35	0.27	56.59	P29	P42	0.37	0.23		
P７	P３	0.33	0.31	0.31	56.58	P30	P43	0.35	0.24		
P８	P５	0.29	0.25	0.23	56.58	P31	P44	0.24	0.18		
P９	P６	0.17	0.14	0.16	56.51	P32	P46	0.29	0.23		
P10	P７	0.26	0.26	0.26	56.46	P33	P45	0.22	0.16		
P11	P15	0.36	0.19	0.1	56.63	P34	P27	0.21	0.16	0.26	56.31
P12	P16	0.18	0.15	0.08	56.75	P35	P28	0.28	0.2	0.18	56.42
P13	P17	0.2	0.17	0.08	56.76	P36	P37	0.29	0.19	0.15	56.54
P14	P10	0.27	0.24	0.18	56.76	P37	P38	0.19	0.13	0.14	56.53
P15	P11	0.48	0.41	0.46	56.46	P38	P29	0.47	0.36	0.15	56.48
P16	P12	0.3	0.25	0.16	56.7	P39	P33	0.33	0.33	0.22	56.42
P17	P21	0.39	0.2	0.12	56.79	P40	P31	0.6	0.43	0.31	56.57
P18	P22	0.19	0.17	0.17	56.74	P41(建物2･P1)	P40	0.58	0.46	0.14	56.32
P19	P13	0.31	0.28	0.21	56.2	P42(建物2･P2)	P35	0.5	0.5	0.3	56.19
P20	P14	0.55	0.4	0.23	56.55	P43(建物2･P3)	P30	0.41	0.32	0.21	56.32
P21	P19	0.33	0.16	0.24	56.09	P44(建物2･P4)	P36	0.43	0.43	0.28	56.12
P22	P20	0.28	0.19	0.11	56.09	P45(建物2･P5)	P34	0.45	0.41	0.35	56.4
P23	P24	0.21	0.17	0.13	56.76	P46(建物2･P6)	P32	0.49	0.45	0.25	56.39

第４表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　掘立柱建物１計測表

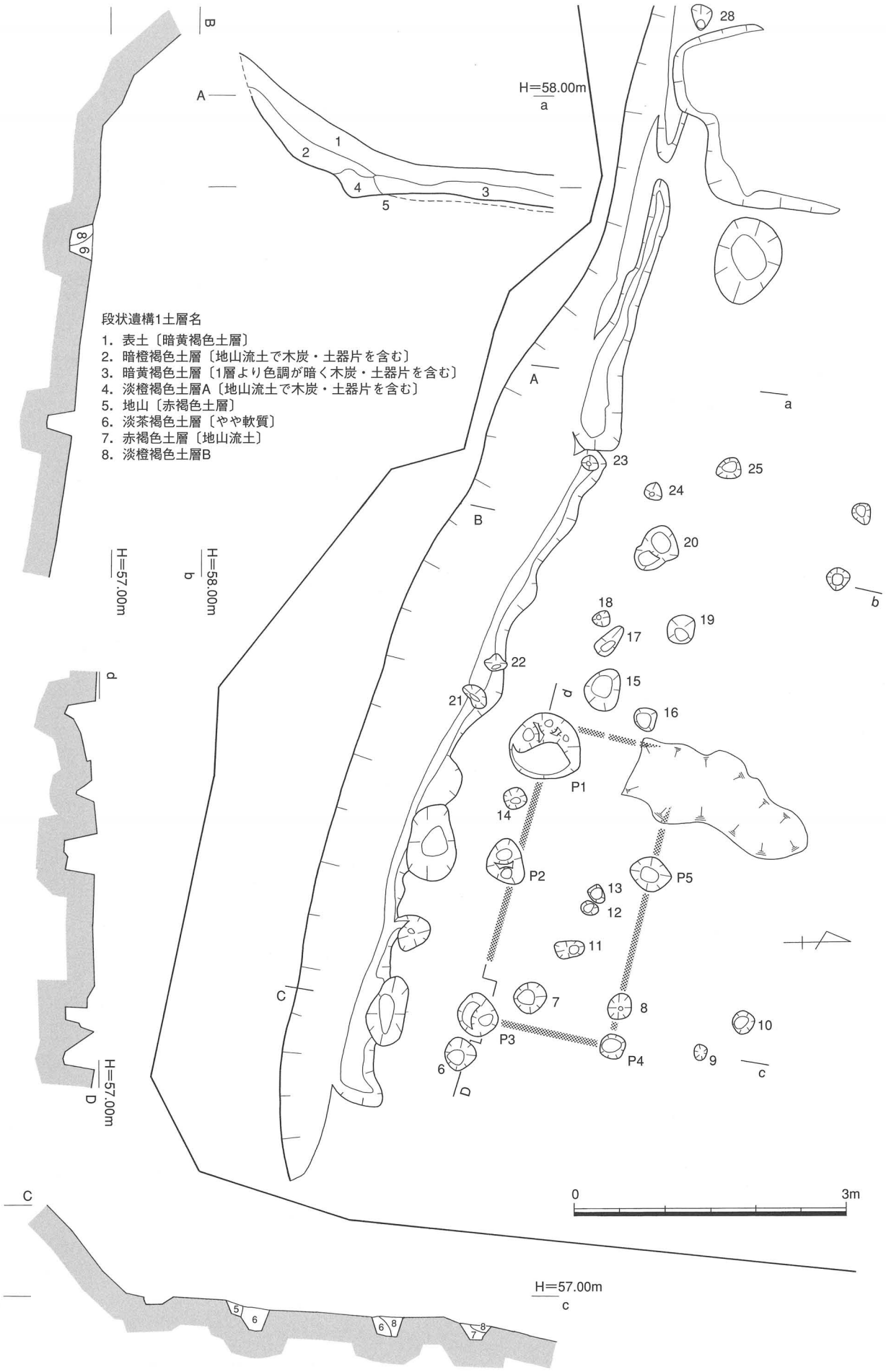
規模(m)	桁行２間×梁間１間（3.17×1.4）　面積4.44㎡				
柱間距離	Ｐ１－Ｐ２	Ｐ２－Ｐ３	Ｐ３－Ｐ４	Ｐ４－Ｐ５	Ｐ２－Ｐ５
(m)	1.55	1.62	1.4	1.9	1.62

第５表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　掘立柱建物２計測表

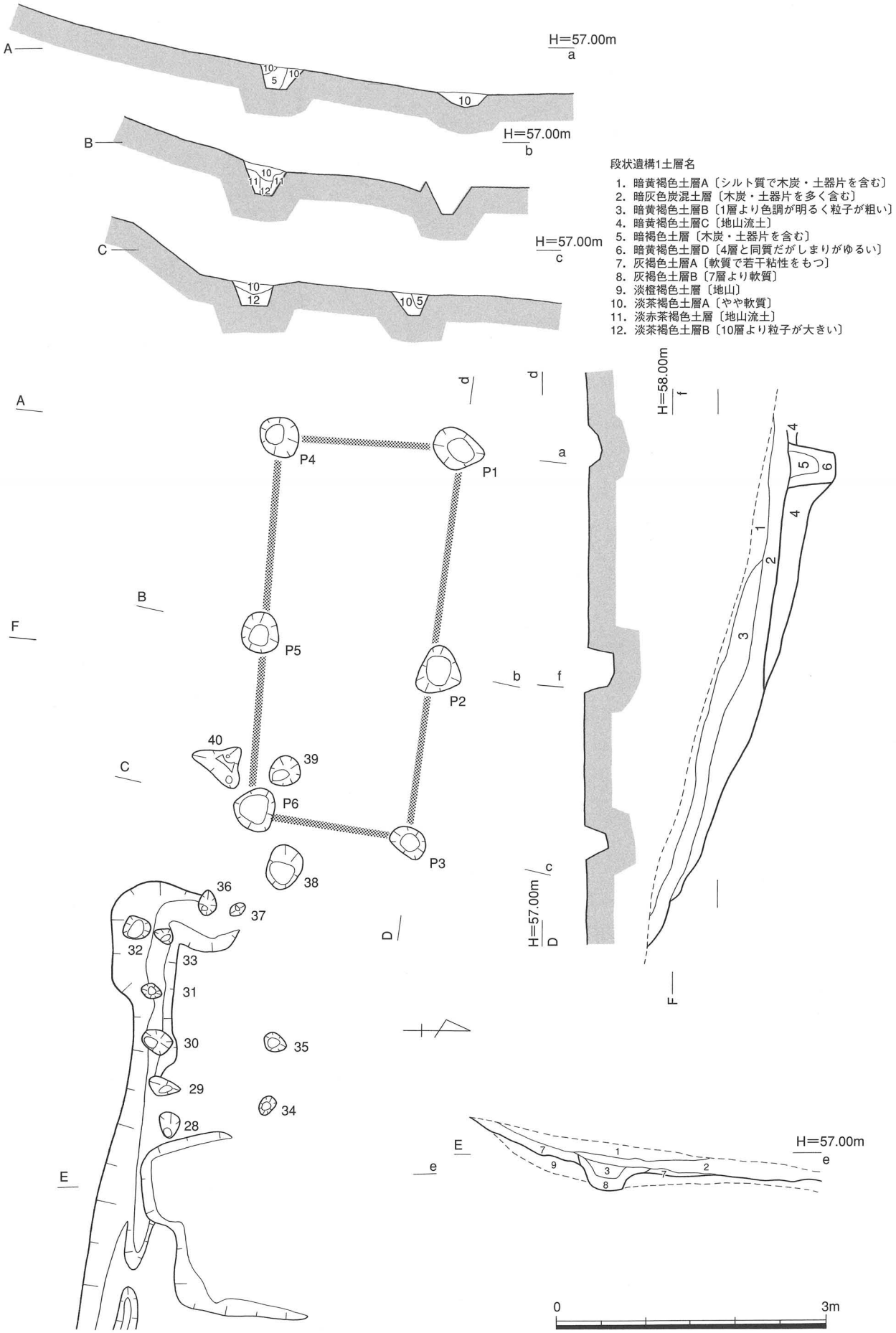
規模(m)	桁行２間×梁間１間（4.34×2.1）　面積9.114㎡						
柱間距離	Ｐ１－Ｐ２	Ｐ２－Ｐ３	Ｐ４－Ｐ５	Ｐ５－Ｐ６	Ｐ１－Ｐ４	Ｐ２－Ｐ５	Ｐ３－Ｐ６
(m)	2.4	1.9	2.2	1.92	2.1	2	1.8



第７図　西Ⅰ遺跡Ａ区　区割図（S=1/400）



第８図　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　段状遺構１東側・掘立柱建物１実測図（S=1/60）



第９図　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１西側・掘立柱建物２実測図（S=1/60）

段状遺構１

段状遺構１の確認床面は標高56.50～56.90mである。段の掘削は地形に影響されているため、遺構の軸線はN－71°－W、規模は調査区の東端から西北西に向かって22mの長さを持つ。背後には排水溝が巡っているが、掘立柱建物２までは排水溝がおよんでいない。幅については、段状遺構の床面から斜面に移り変わる明確な傾斜変換点を求めることが困難なため、明示し難いが約４m程度と考えられる。

段状遺構１は排水溝の形状から３ブロック程度の空間に分かれるが、東端の掘立柱建物１付近では背後を全長5.4mの排水溝が掘削されている。また、その西側に連接して長さ7.6mの排水溝があるが、その前面には明確な建物痕跡は確認できなかった。

掘立柱建物１

段状遺構１内の東端に立地する桁行２間×梁間１間の小規模な掘立柱建物跡である。建物の軸線はN－77°－Wであり、段状遺構のカットラインと平行になっている。柱穴土層断面の観察からも柱痕は確認できないため、建物廃絶時に柱も抜かれているものと考えられる。遺構確認面での柱穴掘形は不整円形であり、地山の岩盤を掘削して掘り込んでいる。

掘立柱建物１周辺では遺物の出土量が少なく（第18表）、廃絶時に片付けが行われた可能性が高い。須恵器杯蓋型式は出雲４期である[1]。

掘立柱建物２

段状遺構１の西端に立地する桁行２間×梁間１間の小規模な掘立柱建物跡である。建物の軸線はN－83°－Wである。建物の背後には地山のカットが及んでおらず、排水溝も付帯していない。遺構確認面での柱穴掘形は不整円形・略円形であり、堆積土中に柱穴を掘り込み、岩盤までは達していない。柱穴確認面では柱痕は確認できなかったが、Ｐ５では土層断面で柱痕跡が確認された。その他の柱穴では柱痕が確認できなかった。

掘立柱建物２周辺では比較的遺物量が多く（第17表）、三輪玉や金属製品なども残されていたことから、建物廃絶時には道具類は放置された可能性が考えられる。また、移動式竈・土師器甕など煮沸具も多く出土していることから、掘立柱建物２付近で炊飯行為が行われたと考えられる。

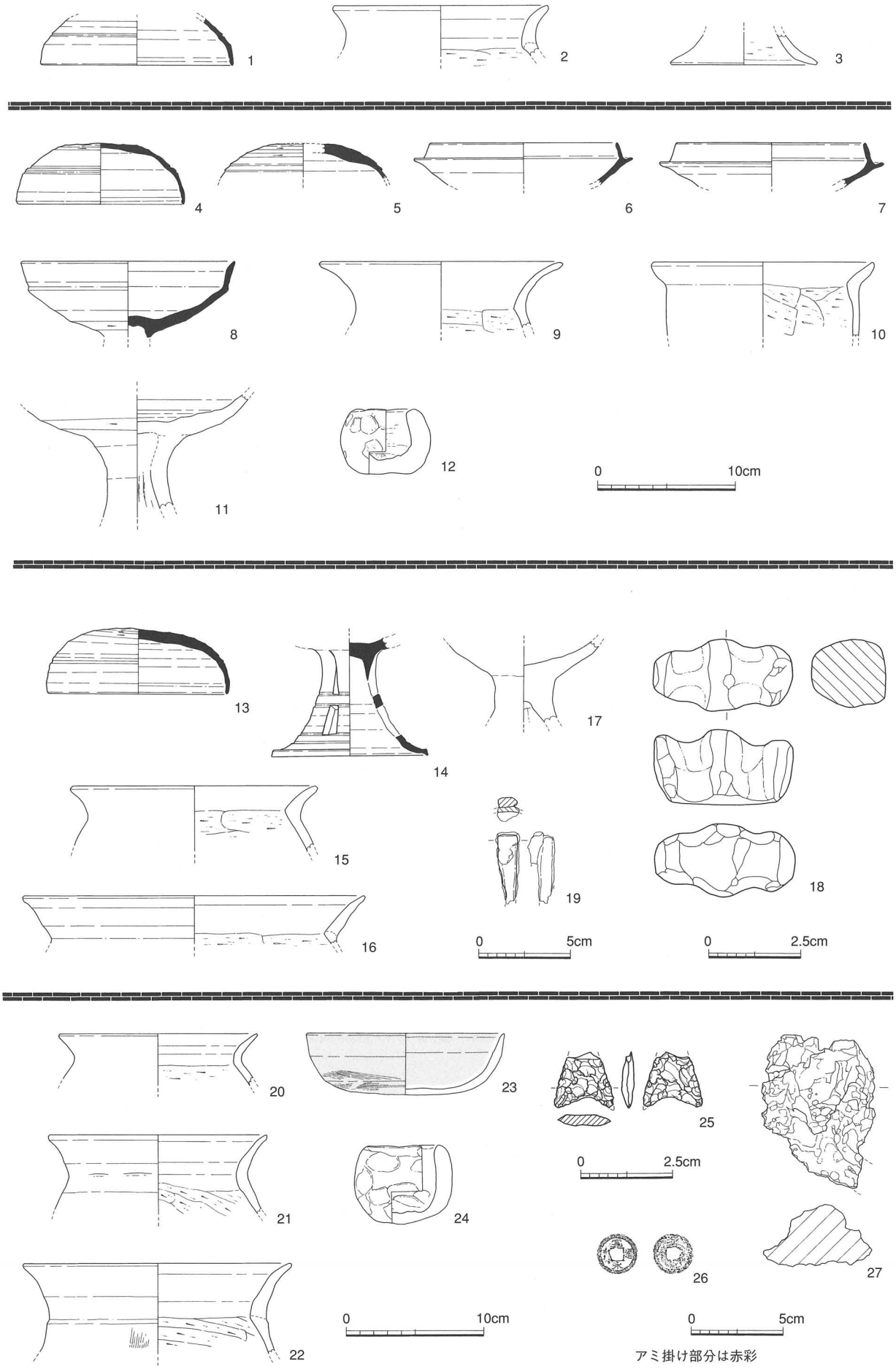
段状遺構１（掘立柱建物１・２）の遺物

須恵器は杯蓋・杯身・高杯・小型壺・提瓶・大甕などが出土しており、いずれも出雲４・５期に比定されるものである。土師器も移動式竈・甑・甕などの煮沸具以外に、高杯・椀など供膳形態の土器が出土している。

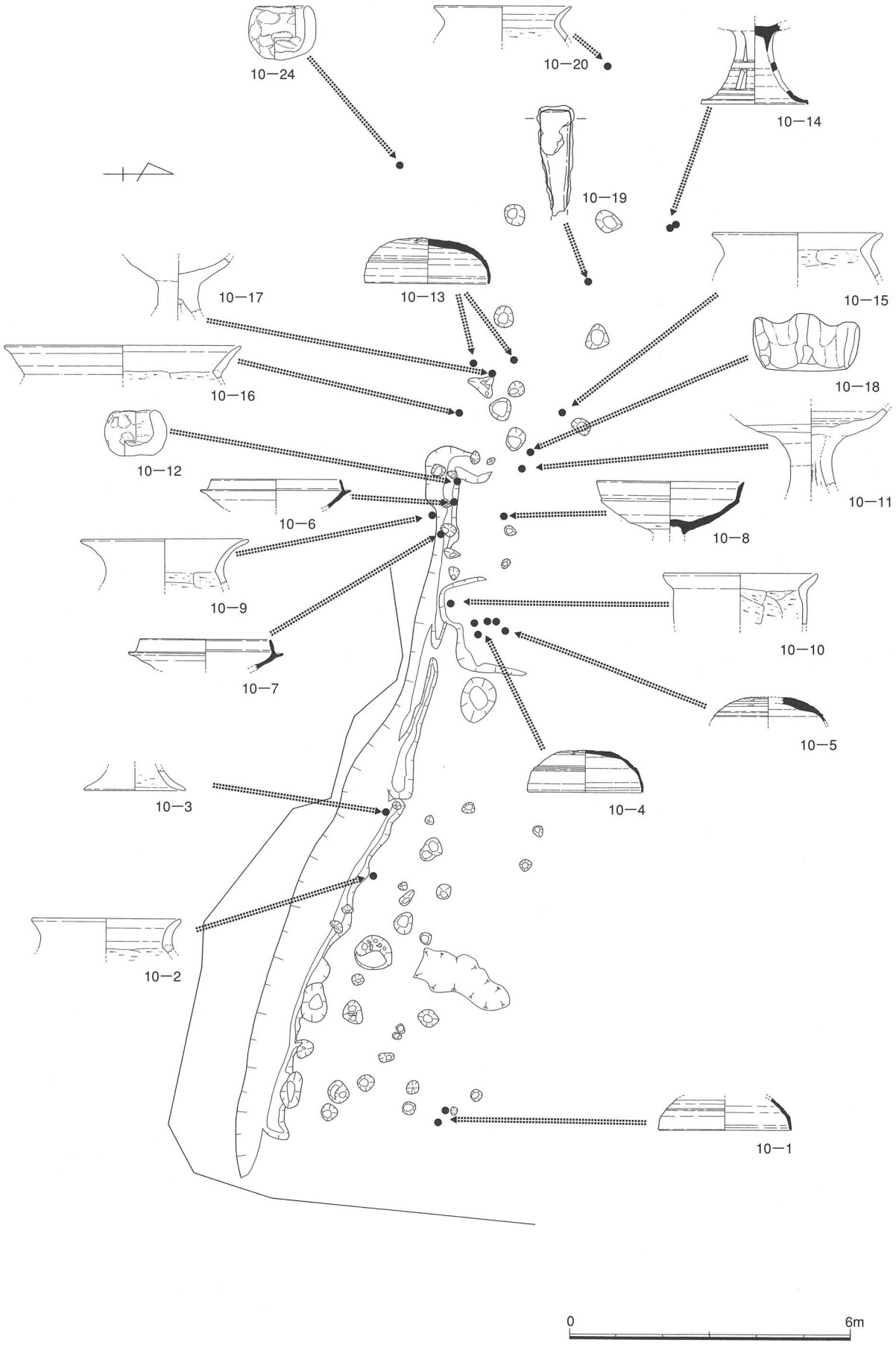
また、手捏（づく）ね土器や赤彩の施された土師器の高杯・椀・甕なども確認されており、祭祀的な一面も認められる。

掘立柱建物２東から発見された水晶製三輪玉は、東出雲町島田池１区２号横穴墓[2]、玉作遺跡である玉湯町平床Ⅱ遺跡[3]、同町堂床遺跡[4]、松江市福富Ⅰ遺跡[5]など県内でも５遺跡11例目となるもので、一般的な集落遺跡からの出土は県内では初例といえる。当初から単品で保有されていたものか不明であるが、玉類の所有層を検討する上でも貴重な資料といえよう。

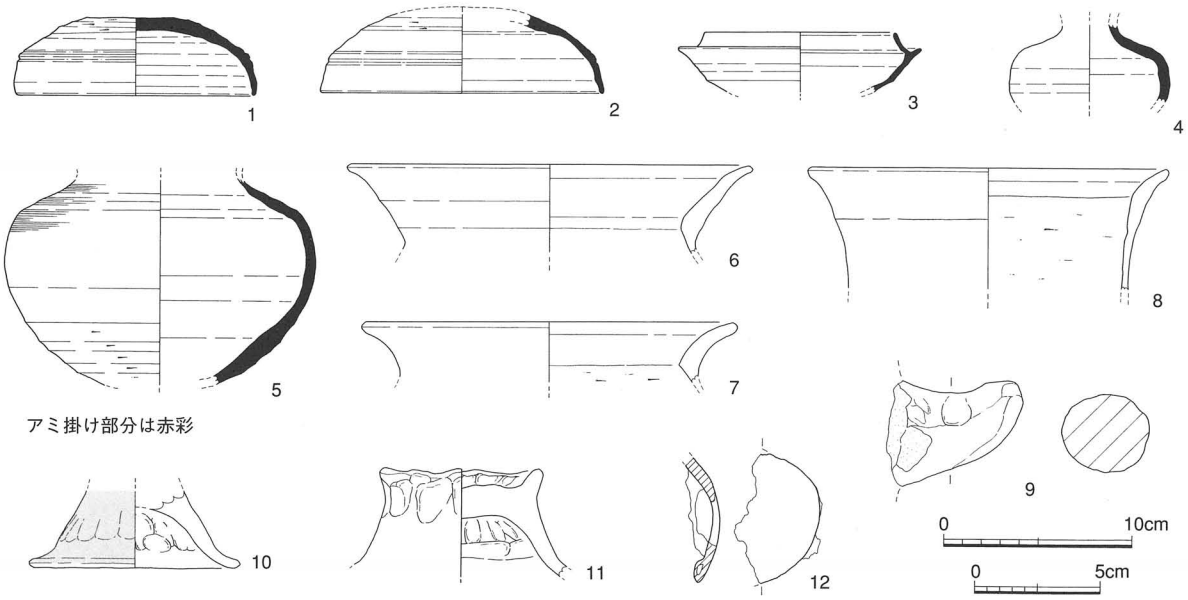
段状遺構１西端からは鍛冶操業に起因すると考えられる椀形滓が１点確認されているが、鍛冶炉と考えられる被熱土坑などは周辺で確認されておらず、他に鉄滓や炉壁なども未発見のため、段状遺構１で鍛冶操業が行われた可能性はにわかに首肯できない。



第10図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１出土遺物実測図（S＝土器1/4・金属製品1/3・石製品2/3）



第11図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１遺物出土状況図（S=1/120・土器1/6・石製品 鉄製品1/2）



第12図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１下方包含層出土遺物実測図（S＝土器1/4・鉄製品1/3）

第６表　西Ⅰ遺跡Ａ－３区　段状遺構１掘立柱建物１付近出土遺物観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
10図－１	須恵器 杯蓋Ａ４	残高 3.4	13.7		密（１㎜以下の長石等を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ	内・断面：淡灰色 外面：黒灰色～淡灰色	1/5	出雲４期 TK209
10図－２	土師器 単純口縁甕	残高 3.7	15.4		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡灰褐色 外・断面：淡褐色	口縁部1/6	
10図－３	土師器 高杯	残高 2.2		10.4	やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや不良	全体的に磨滅が激しく調整不明 脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ？	内・断面：淡黄褐色 外面：淡赤褐色	脚端部1/5	

第７表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１中央部出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
10図－４	須恵器 杯蓋Ａ４	**4.5**	11.8		普通（２㎜以下の長石等を含む）	良好	天井部：丁寧な回転ヘラケズリ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 体部：回転ヨコナデ	内・断面：淡灰色 外面：明灰色	2/5	出雲４期 TK209 器壁が厚い
10図－５	須恵器 杯蓋Ａ４	残高 2.5			密（１㎜以下の長石等を含む）	良好	天井部：浅くて雑な回転ヘラケズリ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 体部：回転ヨコナデ	内面：明灰色 外面：暗灰色 断面：淡灰色	天井部1/4	出雲４期 TK209
10図－６	須恵器 杯身Ａ４	残高 3.1	13.4	15.8	密（0.5㎜以下の長石等を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 外面：別個体の溶着あり	内面：淡灰色 外面：淡褐灰色 断面：灰白色	口縁部1/5	出雲４期 TK209
10図－７	須恵器 杯身Ａ４	残高 3.3	13.5	15.8	密（１㎜以下の長石等を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ	全面：淡青灰色	口縁部1/6	出雲４期 TK209
10図－８	須恵器 高杯Ａ４	残高 5.5	15.3		普通（1.5㎜以下の石英・長石・黒色粒を含む）	不良	杯部下位：回転ヘラケズリ 体部：回転ヨコナデ	全面：灰白色	杯底部	
10図－９	土師器 単純口縁甕	残高 4.9	17.0		やや密（１㎜以下の石英・長石・金雲母を含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡茶褐色 外・断面：淡赤褐色	口縁部1/6	
10図－10	土師器 単純口縁甕	残高 5.4	15.8		粗（３㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡赤褐色	口縁部1/5	
10図－11	土師器 須恵器模倣 高杯	残高 8.9			普通（1.5㎜以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む）	良好	体部：回転ヘラケズリ 脚部：回転ヨコナデ 体部内面：回転ヨコナデ	内・外面：明褐色 断面：淡褐色	脚端・口縁部は欠損	
10図－12	土師器 手捏ね土器	**5.7**	復元 2.9	3.6	やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を含む）	やや良好	外面・口縁部付近：指頭圧痕と指頭によるナデ 内面：ユビナデ	内面：暗褐色 外面：暗褐色～橙褐色 断面：茶褐色	2/3	

第８表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１掘立柱建物２付近出土遺物観察表

（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
10図－13	須恵器 杯蓋Ａ４	**4.8**	**12.8**		密（0.5㎜以下の石英等を含む）	良好	天井部：回転ヘラケズリ 内面天井部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 体部：回転ヨコナデ	内・断面：明灰色 外面：淡灰色～淡青灰色	3/4	出雲４期 TK209
10図－14	須恵器 高杯Ｂ４	残高 8.6		11.2	緻密（0.5㎜以下の長石を含む）	良好	体部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 脚部：回転ヨコナデ	内・断面：暗褐灰色 外面：黒灰色	脚部1/2	出雲５期 TK217
10図－15	土師器 単純口縁甕	残高 4.8	17.5		粗（３㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡茶褐色 外面：淡赤褐色	口縁部1/6	
10図－16	土師器 単純口縁甕	残高 3.6	24.4		やや粗（２㎜以下の石英・長石・金雲母を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡褐色	口縁部1/6	
10図－17	土師器 高杯	残高 6.0			普通（1.5㎜以下の石英・長石・赤色粒等を多く含む）	やや良好	体部内面：磨滅のため調整不明 杯部・脚部：ヨコナデ 脚部底面：ヘラ状工具による粗いヨコ方向のケズリ	内面：暗褐色 外面：暗橙褐色 断面：黒褐色	杯基部	

第９表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１掘立柱建物２付近出土石製品観察表

（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	種　別	寸法（cm）			石　　材	重　量	特　　徴	色　調	残存度	備　考
		全長	最大巾	高さ						
10図－18	三輪玉	3.76	**1.955**	**1.995**	水晶	20.50ｇ		半透明	ほぼ完形	

第10表　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　段状遺構１掘立柱建物２付近出土鉄製品観察表

挿図番号	種　別	寸法（cm）			残存度	備　考
		全長	最大巾	高さ		
10図－19	不明鉄製品	残長 3.3	0.9			

第11表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
10図－20	土師器 単純口縁甕	残高 3.8	14.1		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ肩部 内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡橙色 外面：淡灰褐色 断面：淡褐色	口縁部1/4	
10図－21	土師器 単純口縁甕	残高 5.8	15.7		やや粗（２㎜以下の石英・長石等をやや多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部：やや強いヨコナデ 胴部：ナデ？ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：暗橙褐色 外面：淡橙褐色 断面：黒褐色～茶褐色	口縁部1/2	
10図－22	土師器 単純口縁甕	残高 6.6	**19.3**		やや粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部外面：やや強いヨコナデ 胴部：６条/cmのタテハケ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡茶褐色 外面：淡橙褐色	口縁部4/5	
10図－23	土師器 赤彩椀	**4.5**	14.2	7.8	やや粗（２㎜以下の石英・長石・金雲母等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 体部：６条/cmのハケ調整 内面：ナデ？	内・外面：淡茶褐色 断面：暗褐灰色	1/3	
10図－24	土師器 手捏ね土器	**5.15**	5		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を含む）	やや良好	全面：ユビナデ	全面：淡橙褐色	完形	

第12表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土石器観察表

挿図番号	種　別	寸法（cm）			石　　材	重　量	残存度	備　考
		全長	最大巾	厚さ				
10図－25	凹基無茎 三角形鏃	1.55	**1.62**	0.315	黒曜石	0.67ｇ	先端は欠損	

第13表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土銭貨観察表

挿図番号	種　別	寸法（cm）			残存度	備　考
		銭径	内径	孔		
10図－26	寛永通宝	**2.15**	**1.75**	**0.62**	完形	新寛永

第14表　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１西側出土鉄滓観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			特　　徴	残存度	備　考
		幅	厚さ				
10図－27	椀形滓	6.2×8.3	4.3		メタル度なし		

第15表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構１下方包含層出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
12図－１	須恵器 杯蓋Ａ４	**4.2**	**12.5**		密（１㎜以下の長石を含む）	良好	天井部：回転ヘラケズリ 内面天井部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 体部：回転ヨコナデ	内・断面：淡青灰色 外面：暗褐灰色	95%	出雲４期 TK209
12図－２	須恵器 杯蓋Ａ３ａ	推定 **4.6**	14.9		密（0.5㎜以下の長石・石英を多く含む）	良好	天井部：回転ヘラケズリ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 体部：回転ヨコナデ	全面：淡灰色	1/6	出雲３期 TK43
12図－３	須恵器 杯身Ａ５	残高 3.2	10.0		緻密（0.5㎜以下の長石をわずかに含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底面：回転ヘラケズリ	内・断面：淡灰色 外面：淡褐灰色	口縁部1/6	出雲４期 TK209
12図－４	須恵器 小型壺	残高 4.2			密（0.5㎜以下の長石をわずかに含む）	良好	体部：回転ヨコナデ	内・断面：淡褐灰色 外面：暗褐灰色	胴部1/6	
12図－５	須恵器 短頸壺？	残高 11.0			やや粗（４㎜以下の長石・石英を多く含む）	良好緻密	外面上部：８条/cmの回転カキメ 外面中部：回転ヨコナデ 外面下部：回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	内面：暗黄灰色 外面：暗灰色～白褐色 断面：暗紫褐色	胴部3/4	
12図－６	土師器 単純口縁甕	残高 4.7	21.0		やや粗（２㎜以下の石英・長石・金雲母・黒色粒を多く含む）	やや不良	口縁部：ヨコナデ 肩部：磨滅のため調整不明	内面：茶褐色 外面：暗橙褐色 断面：淡茶褐色	口縁部1/5	
12図－７	土師器 単純口縁甕	残高 3.2	19.3		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡赤褐色	口縁部1/3	
12図－８	土師器 甑	残高 6.4	18.7		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部・体部：ヨコナデ 胴部内面：ヘラケズリ後、ナデ調整	全面：にぶい橙褐色	口縁部1/5	
12図－９	土師器 甑				やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	全面：ナデ調整	内・外面：淡橙褐色 断面：淡黄褐色	把手のみ	
12図－10	土師器 赤彩高杯	残高 4.1		10.5	普通（1.5㎜以下の石英・長石等を含む）	やや良好	脚部：ユビナデ 底部：ヨコナデ 脚部内面：ユビオサエ	内面：茶褐色 外面：暗橙褐色 断面：淡褐灰色	脚部1/5	外面赤彩
12図－11	土師器 台付土器	残高 5.7	8.2		やや粗（３㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く含む）	やや良好	全面：ユビナデ、ユビオサエにより調整	内面：淡橙褐色 外面：橙褐色 断面：淡黄褐色	1/2	

第16表　西Ⅰ遺跡Ａ－２・３区　中段包含層出土鉄製品観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			残存度	備　考
		長	巾	厚		
12図－12	不明鉄製品	現長 5.2	3.5	推定 0.3	1/2？	

第17表　西Ⅰ遺跡 A－２区　段状遺構１（掘立柱建物２付近）出土遺物構成表

種別	器　種	現　状　と　数　量					
土師器	高杯	完形	軸部	杯部	脚部	口縁端部	脚端部
			1	1	1		2
	赤彩高杯	完形	軸部	杯部	脚部	口縁端部	脚端部
							1
	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	胴部
			1				1
	赤彩椀	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
				2	2		
	赤彩甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	頸部1/8以上		
					1		
	甕	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/2以上	頸部1/8以上	頸部1/9以下
		2	19	21		16	42
	移動式竈	完形	1/2以上	基底部	口縁部・焚口部		
				2			
	手捏ね土器	完形	1/2以上	口縁部1/8以上			
		1	1				
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
		1	5	2	2	1	
	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部		
			6	3	1		
	高杯	完形	軸部	杯部	脚部	口縁端部	脚端部
				1	1		2
	小型壺	完形	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
			1				
	提瓶	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下		
					1		
	大甕	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下		
					2		
玉類	三輪玉	1					
鉄滓	椀形滓	1					
鉄製品	不明鉄製品	1					

第18表　西Ⅰ遺跡 A－３区　段状遺構１（掘立柱建物１付近）出土遺物構成表

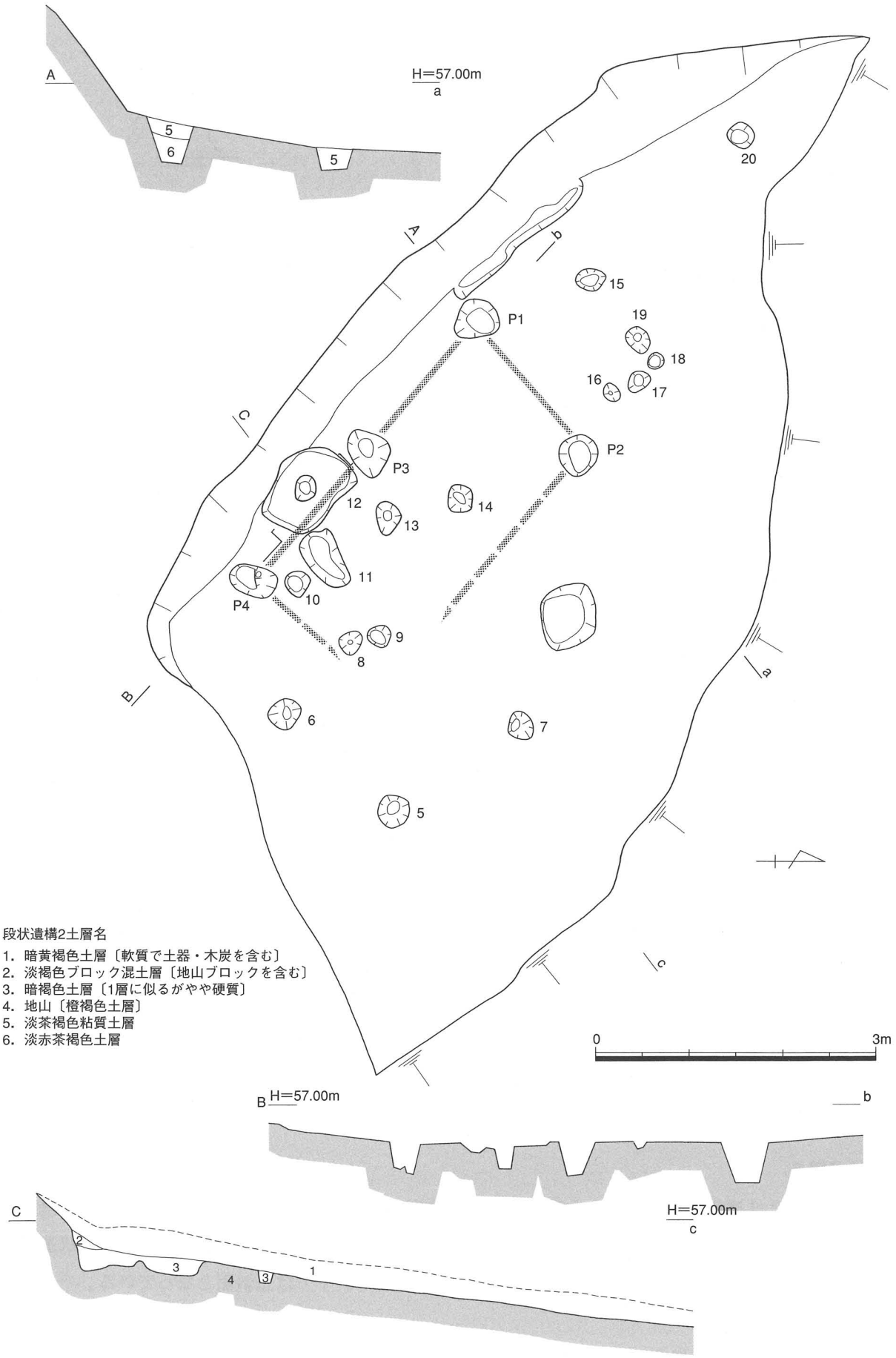
種別	器　種	現　状　と　数　量					
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
			1				
	大甕	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下		
					1		
土師器	高杯	完形	軸部	杯部	脚部	口縁端部	脚端部
							1
	甕	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/2以上	頸部1/8以上	頸部1/9以下
		1	3	1		1	1
	椀	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
			2				
	赤彩椀	完形	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
					1		
	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	胴部
						1	

第19表　西Ⅰ遺跡 A－１区　段状遺構２ピット計測表

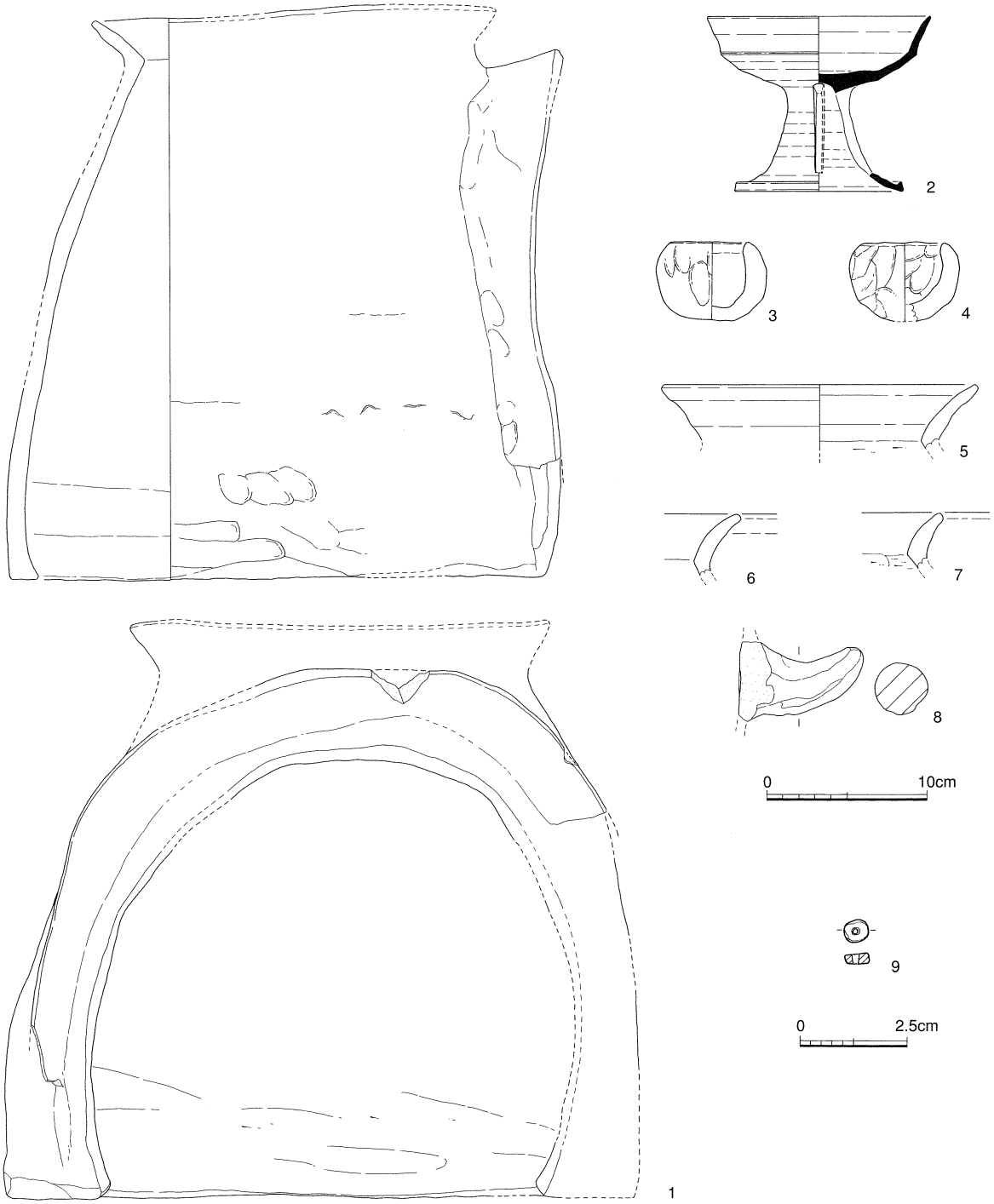
ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P１	P９	0.49	0.47	0.41	56.24	P11	P４	0.67	0.4	0.14	56.41
P２	P10	0.47	0.42	0.22	56.07	P12	P20	0.97	0.7	0.22	56.29
P３	P５	0.56	0.41	0.3	56.29	P13	P６	0.35	0.25	0.11	56.46
P４	P１	0.49	0.31	0.31	56.32	P14	P８	0.29	0.26	0.15	56.34
P５	P７	0.36	0.35	0.12	56.29	P15	P15	0.32	0.26	0.15	56.41
P６	P２	0.34	0.29	0.08	56.42	P16	P11	0.22	0.17	0.15	56.2
P７	P19	0.32	0.27	0.08	56.18	P17	P12	0.25	0.21	0.14	56.18
P８	P３	0.28	0.24	0.14	56.36	P18	P16	0.19	0.18	0.05	56.3
P９	P18	0.25	0.23	0.13	56.33	P19	P13	0.31	0.22	0.2	56.19
P10	P17	0.28	0.28	0.17	56.38	P20	P14	0.3	0.28	0.12	56.47

第20表　西Ⅰ遺跡 A－１区　段状遺構２掘立柱建物３計測表

規模(m)	桁行２間×梁間１間（3.61×1.77）面積6.39㎡				
柱間距離	P１－P３	P３－P４	P１－P２		
(m)	1.83	1.78	1.77		



第13図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２・掘立柱建物３実測図（S＝1/60）



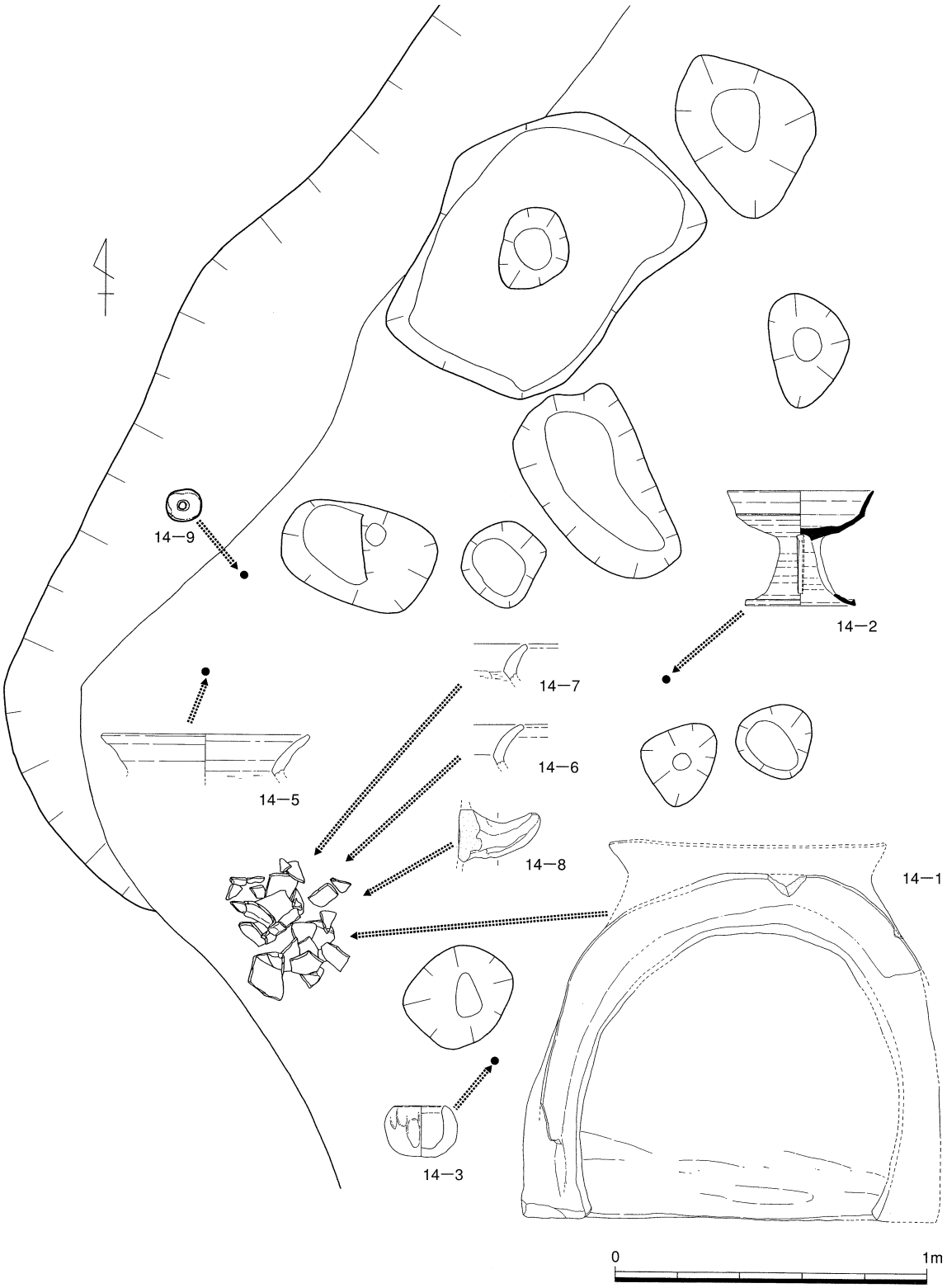
第14図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２出土遺物実測図（S＝土器1/4・石製品2/3）

段状遺構２

段状遺構２は標高57.8m付近から掘削され、標高56.6m付近に床面レベルを持つもので、全長10.1m、幅5.9mの規模を持つ。軸線は自然地形に規制されN－51°－Wとなっている。段状遺構の平面形は略二等辺三角形を呈し、北西側は狭くなっており、下方は急斜面となっている。

掘立柱建物３

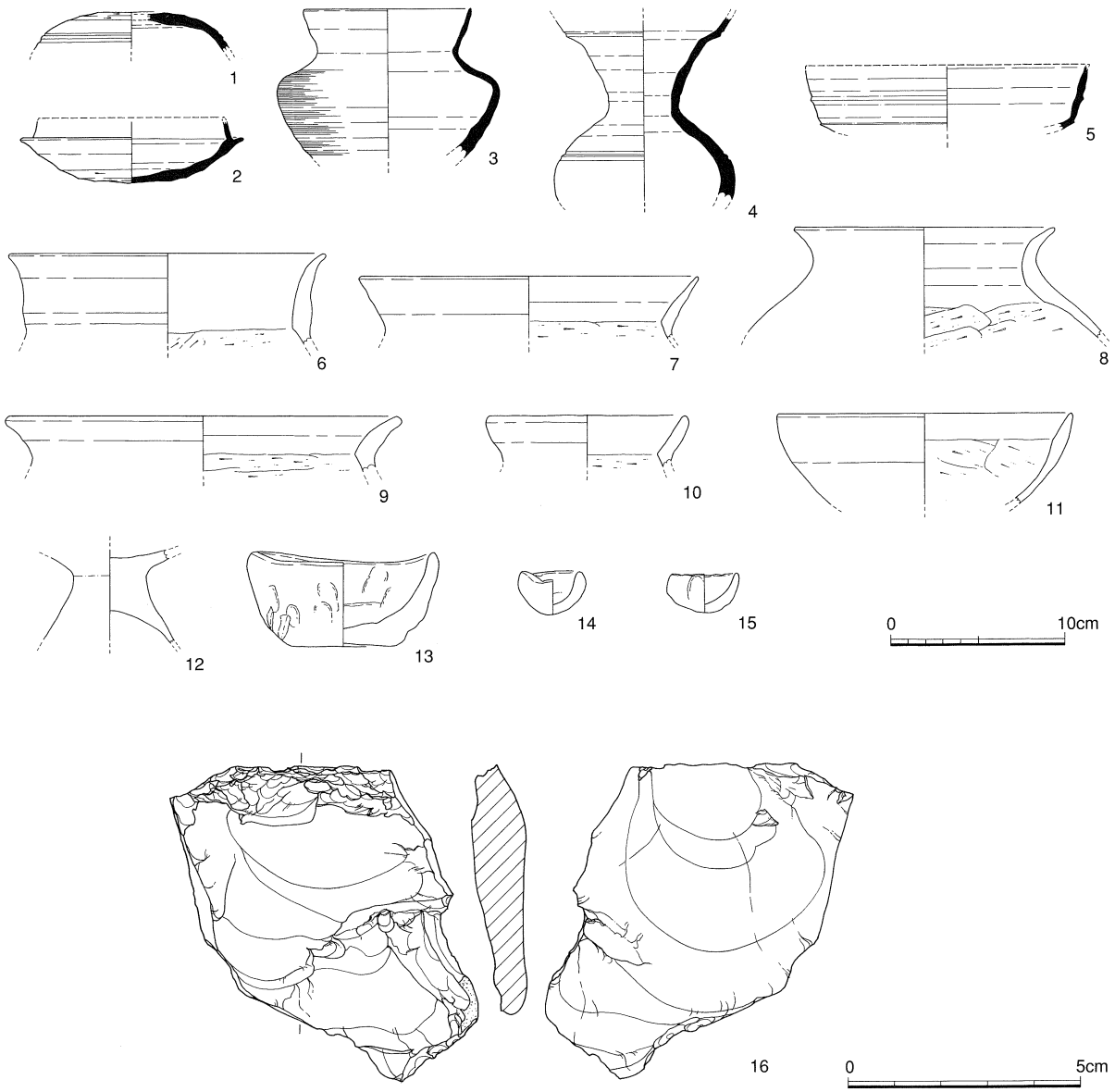
段状遺構２内の中央壁際に立地する桁行２間×梁間１間の掘立柱建物跡である。建物の軸線はN－50°－Wであり、段状遺構のカットラインとほぼ平行になっている。柱穴土層断面の観察からも



第15図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２遺物出土状況図（S=1/20・土器1/6・石製品1/1）

柱痕は確認できないため、建物廃絶時に柱も抜かれているものと考えられる。遺構確認面での柱穴掘形は不整円形、略円形であり、地山の岩盤を掘削して掘り込んでいる。壁際には排水溝が巡っているが掘立柱建物３の背面では浅く、痕跡的な溝となっている。

掘立柱建物３周辺では建物の外側南東付近に遺物が集中しており、原位置を保つ移動式竈（第14図－１）の周辺に土器類が偏在していた。



第16図　西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２周辺出土遺物実測図（S＝土器1/4・石製品2/3）

第21表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２出土遺物観察表　（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　土	焼　成	調　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
14図－１	土師器 移動式竈	**36.1**	**25.5**	28.4	やや粗（３㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 外面：磨滅のため不明 内面上半：磨滅のため調整不明 内面下半：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡橙褐色	3/5	
14図－２	須恵器 低脚無蓋高杯Ａ４	**10.9**	13.6	10.2	密（１㎜以下の長石・石英を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ	内面：淡灰色 外面：濃灰色 断面：淡灰色～暗紫褐色	1/3	出雲４期 TK209
14図－３	土師器 手捏ね土器	**4.8**	**4.4**		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	外面：ユビナデ	内・外面：淡褐色 断面：白褐色	2/3	
14図－４	土師器 手捏ね土器	復元 4.9	復元 4.8		普通（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	普通	外面:全体的にユビナデ	内面：暗灰色 外・断面：淡黄褐色	1/4	
14図－５	土師器 単純口縁甕	残高 4.1	19.2		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡橙褐色 外・断面：淡灰褐色	口縁部1/8	
14図－６	土師器 単純口縁甕	残高 3.9			やや粗（３㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡黄褐色	口縁部1/8	
14図－７	土師器 単純口縁甕	残高 3.5			やや粗（２㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡黄褐色 外面：淡橙褐色	口縁部1/8	
14図－８	土師器 甑				粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	外面：ユビナデ 内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡橙褐色	把手のみ	

第22表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２出土石器観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			石材	重量	色調	残存度	備　考
		最大巾	孔径	最大厚					
14図－９	臼玉	0.06	0.015	0.025	滑石？	0.13ｇ	淡褐灰色	完形	

第23表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構２及び周辺出土遺物構成表

種別	器　種	現　状　と　数　量					
土師器	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	
			1			2	
	甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
				2	3		
	赤彩甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
				2			
	甕〔周辺上〕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上	頸部1/9以下
				5	14	9	19
	甕〔周辺下〕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上	頸部1/9以下
				6	22	4	30
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
				1			1
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
							1
	移動式竈	完形	1/2以上	基底部			
			1	2			
	手捏ね土器	完形	1/2以上	1/2以下			
		2	2	5			
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
			1				
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
		1	1	1			
	小型壺	完形	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
			1				
玉類	臼玉	1					
石器	スクレイパー	1					

第24表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　上・中段包含層出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　土	焼　成	調　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
16図－１	須恵器 杯蓋Ａ４	残高 2.4			密（１㎜以下の長石・石英を含む）	良好	天井部：回転ヘラケズリ 体部：回転ヨコナデ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：暗灰色 外面：濃灰色 断面：淡灰色	天井部1/4	出雲４期 TK209
16図－２	須恵器 杯身Ａ４	残高 3.6	10.5		密（0.5㎜以下の長石・黒色粒を含む）	良好	底面：回転ヘラケズリ。中心も削る 体部：回転ヨコナデ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：濃灰色 断面：淡灰色	1/6	出雲４期 TK209
16図－３	須恵器 短頸直口壺	残高 8.6	9.4		やや密（２㎜以下の石英・長石を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 外面：10条/cmの回転カキメ	内面：淡褐灰色 外面：暗褐灰色 断面：暗灰色	上半部1/4	
16図－４	須恵器 甕Ａ７	残高 10.5			密（２㎜以下の石英・長石を含む）	普通	体部：回転ヨコナデ	内面：淡褐灰色 外面：淡灰色 断面：淡茶灰色	2/5	出雲５期 TK217
16図－５	須恵器 長脚無蓋高杯？	残高 4.8	推定 16.1		密（１㎜以下の長石・石英を含む）	良好堅緻	体部・口縁部：回転ヨコナデ	内面：暗青灰色 外面：黒灰色 断面：暗紫褐色	口縁部1/8	
16図－６	土師器 単純口縁甕	残高 5.2	17.8		普通（２㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヘラケズリ	内面：暗茶褐色 外面：暗灰褐色 断面：黒茶褐色	口縁部1/6	
16図－７	土師器 単純口縁甕	残高 3.6	19.1		粗（2.5㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：暗褐色 外・断面：灰褐色	口縁部1/8	
16図－８	土師器 単純口縁甕	残高 6.4	14.7		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 肩部：磨滅のため調整不明 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡褐色 外面：淡灰褐色 断面：淡茶褐色	口縁部1/5	
16図－９	土師器 単純口縁甕	残高 3.2	22.0		粗(2.5㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む)	良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡黄褐色 外・断面：淡赤褐色	口縁部1/8	
16図－10	土師器 単純口縁甕	残高 3.0	11.1		やや粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	良好	口縁部：ユビナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：淡橙褐色 断面：淡黄褐色	口縁部1/5	
16図－11	土師器 鉢	残高 5.2	16.7		やや粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ後、ナデ？	内・外面：淡茶褐色 断面：黒褐色	1/4	
16図－12	土師器 高杯	残高 5.4			粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒を多量に含む）	普通	杯部内面：磨滅のため不明 脚部：ユビナデ 脚部内面：磨滅のため不明	全面：淡褐色	脚基部	
16図－13	土師器 手捏ね土器	**5.4**	10.2	5.8	やや粗（２㎜以下の石英・長石等を含む）	やや良好	全体的にユビナデ	内・断面：淡灰褐色 外面：淡橙褐色	1/3	
16図－14	土師器 手捏ね土器	**2.5**	**3.4**		普通（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	やや良好	全体的にユビナデ	内面：淡褐色 外面：淡橙褐色	ほぼ完形	
16図－15	土師器 手捏ね土器	**2.2**	**3.8**		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	普通	全体的にユビナデ	全面：淡橙褐色	1/2	

第25表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　上・中段包含層出土石器観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			石　材	重　量	色　調	残存度	備　考
		長	巾	厚					
16図－16	剥片	6.8	6.6	0.18	チャート？	48.75ｇ	暗灰色	完形	

段状遺構２の遺物

段状遺構２の東南部にほぼ原位置で土圧により破損していた移動式竈のほか、遺構外ではあるが段状遺構２の東南側にはこれ以外にも２個体の移動式竈の存在が確認され、この場で煮沸行為がなされたことが想定できる（第39図）。

甕、甑など煮沸具は一定量見られるが、細片化していた。また、段状遺構２の遺構内に限れば須恵器の杯身・杯蓋が存在しないことからも、建物の廃絶・移転時に片付けられたことも考えられる。臼玉は移動式竈の破片に付着した状態で取り上げており、室内での泥落とし作業の際に１個体を確認したものである。

また、段状遺構２とその周辺では、Ａ－１区内でも特に手捏ね土器が６個体と集中して出土することが特徴として挙げられる。

これらの遺物から段状遺構２の廃絶時期は出雲５期を下らないものと考えられる。

段状遺構３

段状遺構３は新・古２段階の時期が確認され、造り替えが行われている。

段状遺構３古段階

段状遺構３古段階の平面形は細長い三角形状を呈しており、西側は床面幅3.3mの規模を持つが、東端は狭小となっている。段状遺構の全長は9.35m、床面での全長は9.2mであり、壁際には排水溝の痕跡は見られない。段状遺構内にピットは11個確認されたが、規則的な配列は見られず掘立柱建物の復元は困難である。簡易な構造の建築物が存在した可能性がある。

段状遺構３古段階の遺物

古段階の遺構面には遺物が少量しか残存しておらず、段状遺構３新段階への造り替えの際に、移動・撤去されたものと考えられる。段状遺構３古段階に伴う遺物として特異なものとして、鎌が出土している。

段状遺構３新段階

段状遺構３新段階の遺構は古段階の遺構を埋めたのち、その西側コーナー部に一部重複する形で西側に位置をずらして設けられている。壁際には長さ4.27m、幅1.36m、深さ0.65mの若干湾曲する排水溝を設けている。他の段状遺構と比較して排水溝がやや大きく造られていることが特徴といえる。床面全長は４m、床面幅は4.15mである。遺構内には６個のピットを確認したが規則的な配列は見られずやはり掘立柱建物の復元は困難である。

新段階の遺構床面からは細片の遺物しか出土していないが、排水溝内からは遺存状態の良好な土器が出土している。

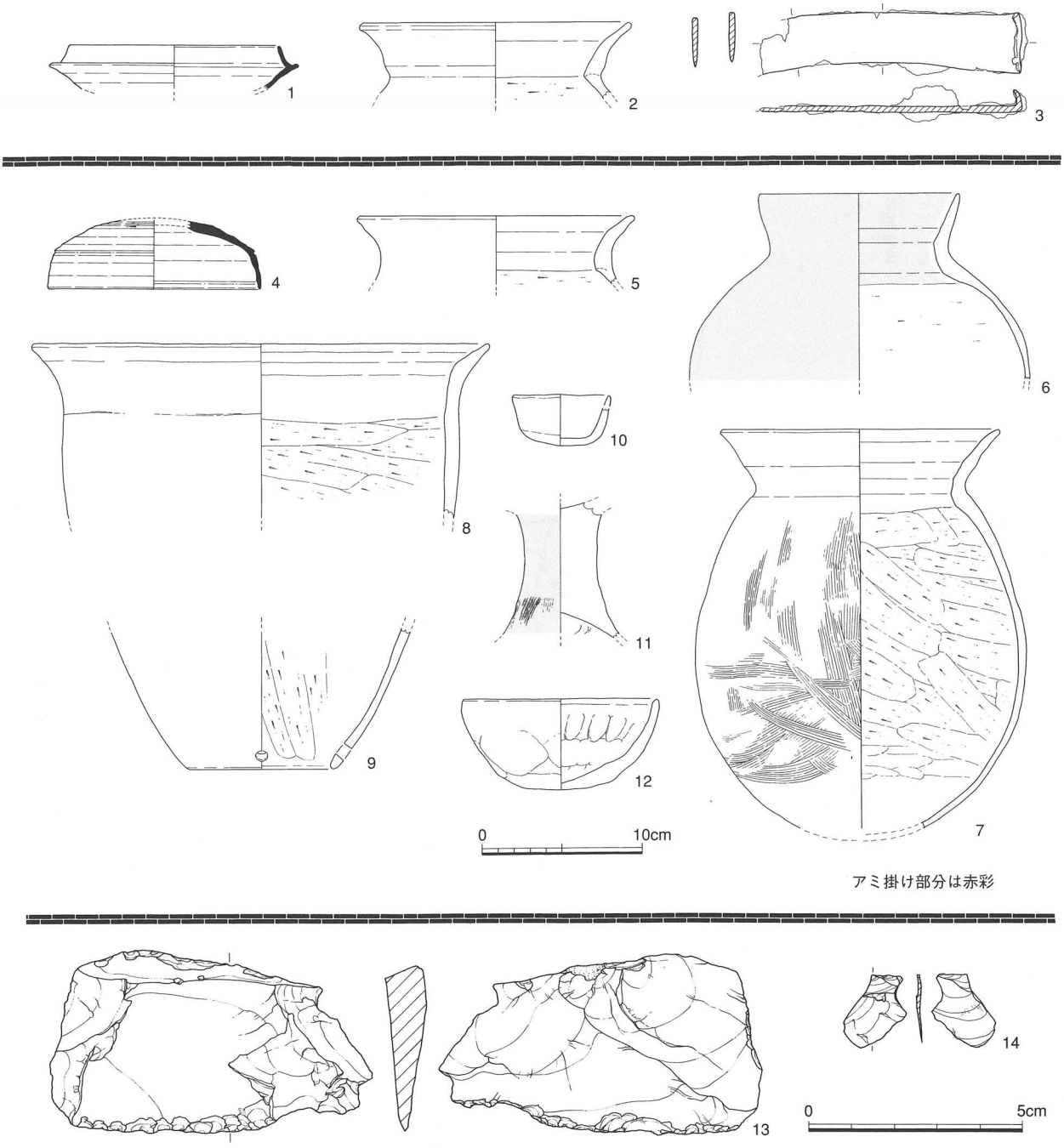
段状遺構３新段階の遺物

段状遺構３新段階の遺構面からは上述のとおり、遺存状態の良い遺物が出土している。土師器は甕・甑など煮沸具があるほか、椀・赤彩高杯・手捏ね土器など供膳形態のものも存在する。しかし、須恵器は杯蓋が１個体のみ存在しており、須恵器の占める比率は7.7%ほどである（第32表）。遺物の出土状況が排水溝に偏在していることから、このセット関係が当初のものかどうか疑わしいが、やや特異な状況といえる。

第26表　西Ｉ遺跡Ａ－２・３区　段状遺構３ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P１	P16	0.18	0.18			P10	P７	0.42	0.42	0.22	53.3
P２	P15	0.2	0.15			P11	P８	0.27	0.19	0.15	53.44
P３	P14	0.14	0.1			P12	P10	0.3	0.26	0.13	53.73
P４	P１	0.27	0.19	0.12	53.55	P13	P11	0.2	0.18	0.22	53.55
P５	P２	0.3	0.2	0.22	53.31	P14	P12	0.31	0.22	0.2	53.44
P６	P３	0.27	0.25	0.12	53.4	P15	P９	0.2	0.19	0.05	53.44
P７	P４	0.42	0.4	0.12	53.49	P16	P17	0.28	0.24	0.22	53.66
P８	P５	0.49	0.46	0.11	53.48	P17	P13	0.18	0.15	0.22	53.47
P９	P６	0.31	0.31	0.16	53.42	P18	P18	0.13	0.12		

第17図　西Ⅰ遺跡A－2・3区　段状遺構3実測図（S=1/60）



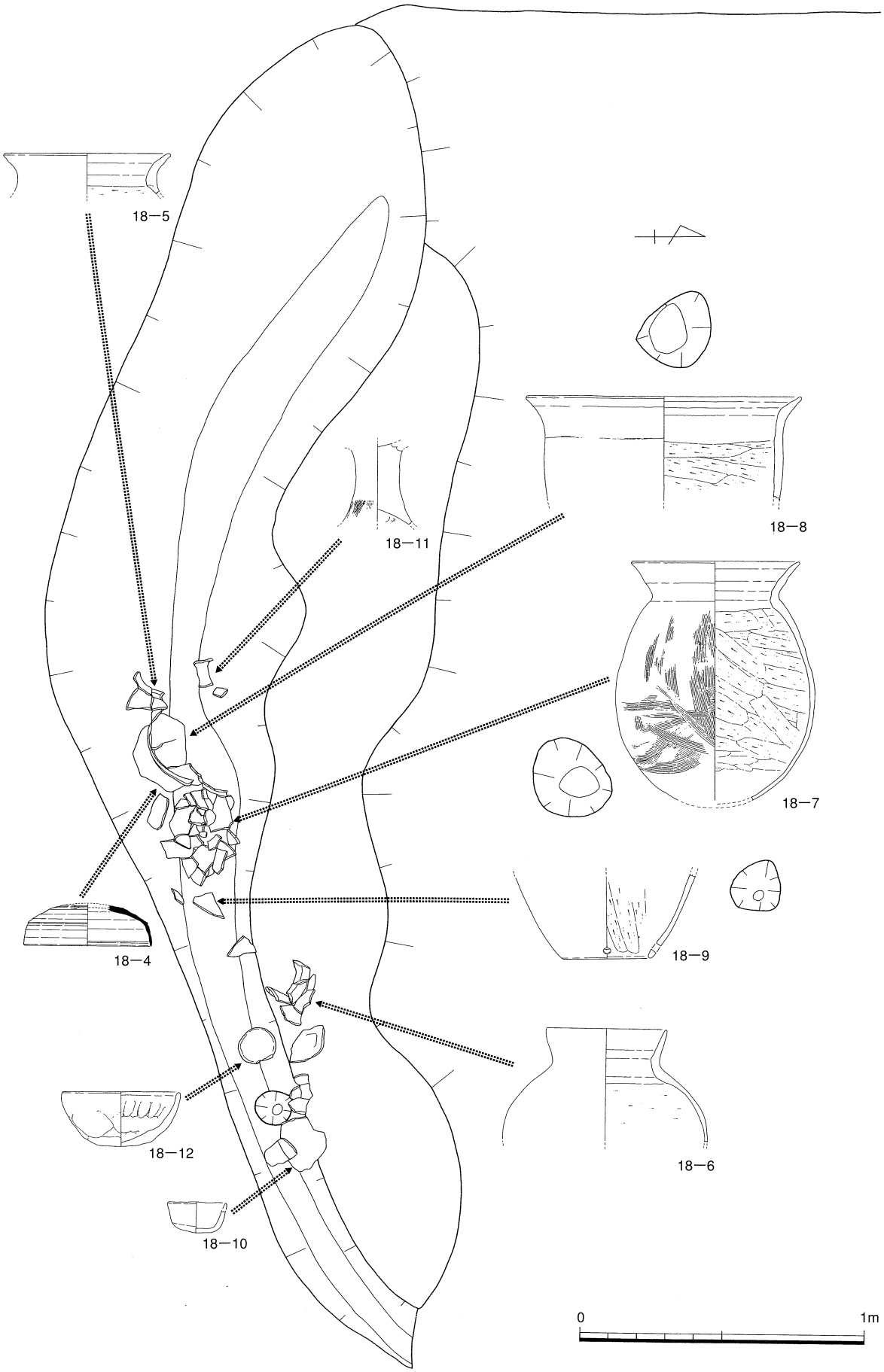
第18図　西Ⅰ遺跡 A－２・３区　段状遺構３出土遺物実測図（S＝土器1/4・石製品2/3・鉄製品1/3）

第27表　西Ⅰ遺跡 A－２・３区　段状遺構３古段階出土遺物観察表　（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　土	焼　成	調　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
18図－１	須恵器 杯身Ａ５	残高 2.8	12.9		やや密（１㎜以下の長石・石英を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ	外面：淡紫灰色 内・断面：淡灰色	口縁部1/8	出雲４期 TK209
18図－２	土師器 単純口縁甕	残高 4.8	16.4		やや粗（２㎜以下の長石・石英を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡褐色	口縁部1/6	

第28表　西Ⅰ遺跡 A－２・３区　段状遺構３古段階出土鉄製品観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			残存度	備　考
		長	刃部長	刃巾		
18図－３	鎌	現存 11.7	現存 11.6	2.3	2/3	



第19図　西Ⅰ遺跡A－2・3区　段状遺構3遺物出土状況図（S＝1/20・土器1/6）

第29表　西Ⅰ遺跡 A―２・３区　段状遺構３新段階出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　土	焼　成	調　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
18図－４	須恵器 杯蓋Ａ３ａ	4.4	13.1		密（0.5㎜以下の長石を含む）	良好緻密	天井部：回転ヘラケズリ 体部：回転ヨコナデ	内面：暗青灰色 外面：濃灰色 断面：暗紫褐色	1/5	出雲３期 TK43
18図－５	土師器 単純口縁甕	残高 4.3	16.9		やや粗（３㎜以下の石英・長石を多く含む）	やや不良	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：暗橙褐色 断面：黒褐色	口縁部1/3	
18図－６	土師器 赤彩甕	残高 11.6	12.2		普通（２㎜以下の長石・石英・金雲母を含む）	やや不良	口縁部：ヨコナデ 胴部：磨滅のため不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ？	全面：淡橙褐色	上半部1/3	外面及び口縁内面赤彩
18図－７	土師器 単純口縁甕	推定 **25.7**	**17.1**		普通（２㎜以下の石英・長石を多く含む）	やや良好	胴部内面上～中位：斜め方向のヘラケズリ 胴部外面：６条/cmのハケ調整 中位～下位：ヨコハケが中心 上半部：タテハケが中心 底部外面：ナデ 胴部底面：ユビナデ	全面：淡褐色	3/4	
18図－８	土師器 甑	残高 11.0	28.0		やや粗（３㎜以下の石英・長石・赤色粒等を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 体部：タテハケを施した後、ナデ消し 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：橙褐色 断面：黄橙褐色	上半部1/2	
18図－９	土師器 甑	残高 8.8			やや粗（３㎜以下の石英・長石・黒色粒等をやや多く含む）	やや良好	外面：調整不明 内面：部分的にタテ方向のヘラケズリ 底部：ヨコナデ	内面：淡茶褐色 外面：灰褐色 断面：淡黄褐色	底部1/4	
18図－10	土師器 手捏ね土器	復元 3.2	5.8		やや密（1.5㎜以下の長石・石英を含む）	普通	全面的にユビナデ	内面：橙褐色 外面：淡橙褐色 断面：淡灰褐色	1/3	
18図－11	土師器 高杯(赤彩)	残高 8.5			やや粗（３㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く含む）	普通	脚部上半部：ナデ 下半部：８条/cmのタテハケ	内面：暗橙褐色 外面：暗赤褐色 断面：暗茶褐色	脚基部	外面赤彩
18図－12	土師器 椀	**5.7**	**12.0**		粗（３㎜以下の石英・長石・金雲母等を多く含む）	普通	外面：全体的にユビナデ 内面：顕著なユビナデ	全面：淡茶褐色	完形	

第30表　西Ⅰ遺跡 A―２・３区　段状遺構３出土石器観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			石　材	重　量	備　考
		長	巾	厚			
18図－13	スクレイパー	**4.3**	**7.52**	**1.0**	安山岩	27.59ｇ	
18図－14	剥片	**1.7**	**1.5**	**0.15**	黒曜石	0.29ｇ	

第31表　西Ⅰ遺跡 A―２・３区　段状遺構３古段階出土遺物構成表

種別	器　種	現　状　と　数　量					
土師器	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	
			1				
	甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上	頸部1/9以下
				1		2	4
	鉢	完形	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
					1		
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
				1			
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
				1			
須恵器	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部		
			4	2			
	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
			2	2	1	1	
	横瓶	破片					
		1					
	瑳	完形	1/2以上	口縁部1/8以上			
				1			

第32表　西Ⅰ遺跡 A―２・３区　段状遺構３新段階出土遺物構成表

種別	器　種	現　状　と　数　量					
土師器	椀	完形	口縁部1/2以上				
		1	1				
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
				1			
	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	
			1	2			
	手捏ね土器	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上			
				1			
	赤彩甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
				1			
	甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
			1	2	2		
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
			1				

段状遺構４

段状遺構４の平面形は谷側の辺の長い台形状を呈しており、西側の床面幅は4.05mの規模を持つが、東端は狭小となり細く収まっている。軸線は自然地形に従って、ほぼ座標の北に向いている。段状遺構の床面全長は7.3mである。段状遺構内にピットは11個確認されたが、いずれも小規模なもので規則的な配列は見られず、掘立柱建物の復元は困難である。また、段状遺構に隣接して６個のピットも検出しているが、その性格は判然としない。これらのピットの存在から簡易な構造の建築物が存在した可能性を考えたい。排水溝は壁際南西部には存在するが、東側では痕跡が確認できなかった。また、段状遺構４は掘削の際に、壁側1/2の範囲を床面より深く、標高53.2m付近まで掘り下げた後、改めて整地土を入れて標高53.5m付近に床面を整形している様子が確認できた。

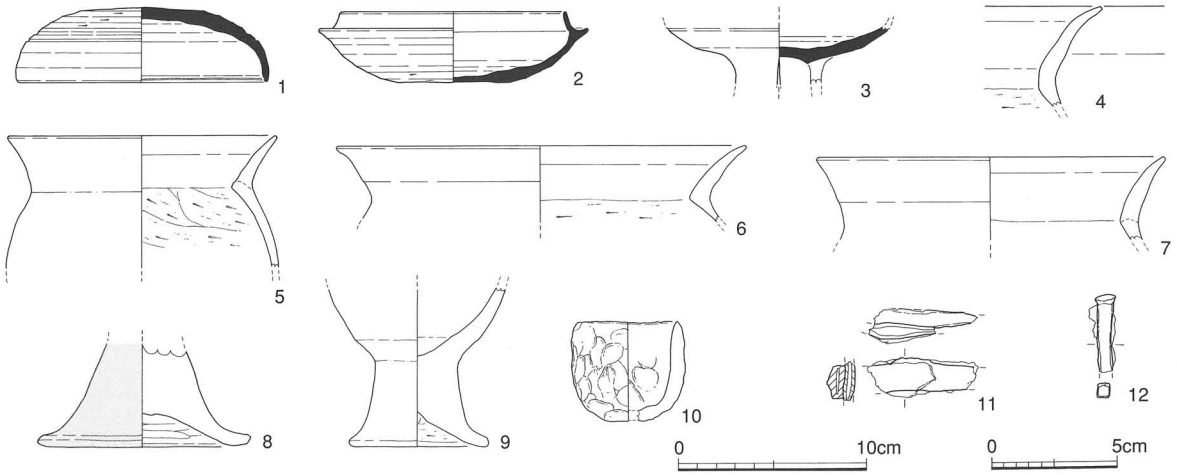
段状遺構５との先後関係は土層では確認できていないが、土器型式では段状遺構４が新しい。また、段状遺構５は上方に存在する段状遺構２に起源を持つと思われる暗褐色土が床面に堆積しているが、段状遺構４ではその影響を受けない暗黄褐色土が堆積している。このため、段状遺構５の廃絶後、段状遺構４に家屋移転しているものと考えられる。

段状遺構４の遺物

この遺構内では甕・甑・移動式竈などの煮沸具や須恵器の高杯・杯、土師器の高杯・手捏ね土器など一定量の遺物が確認されたが、いずれも床面よりやや浮いた破片の状態での出土であり、上方からの転落品が含まれている可能性が高い。

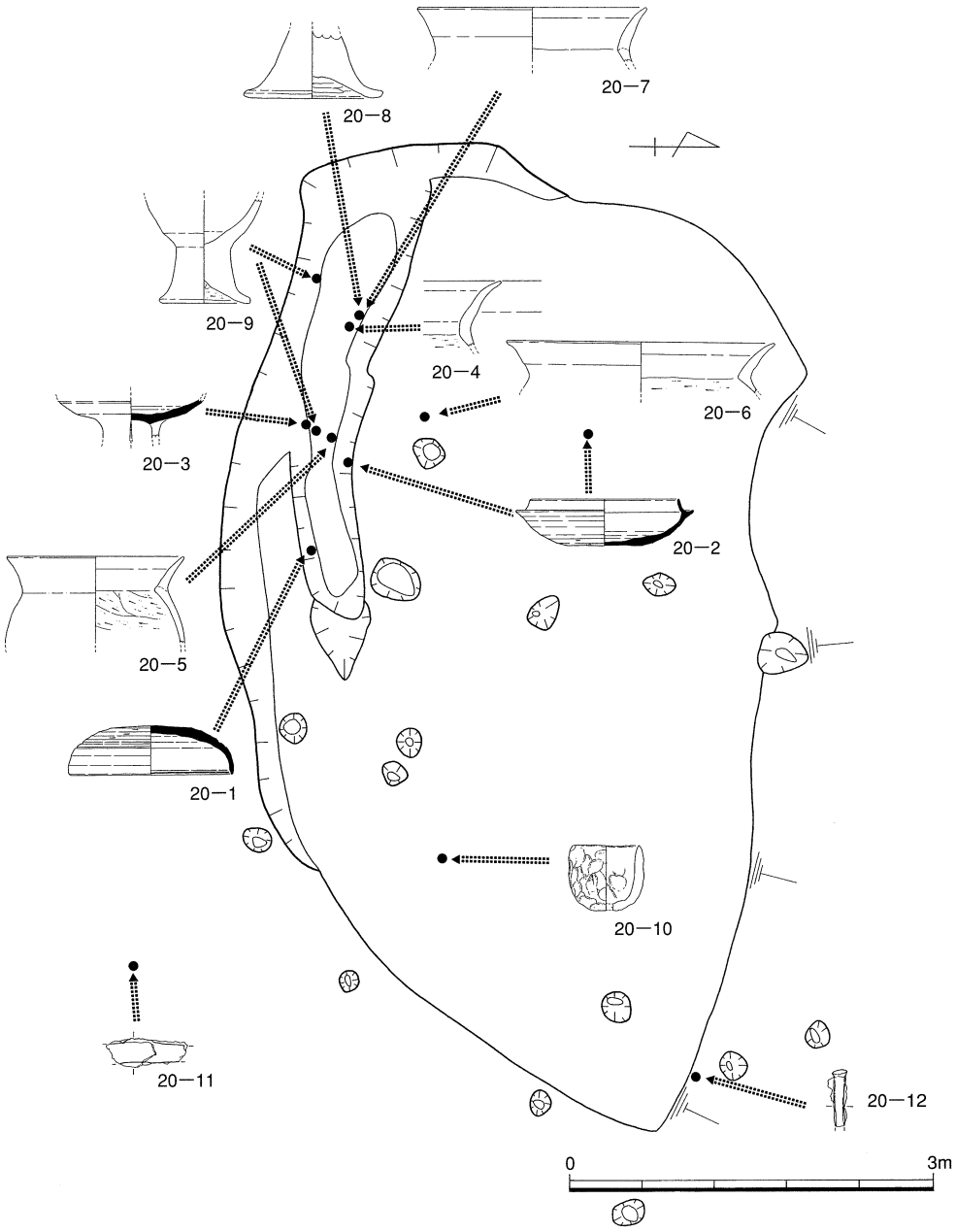
第33表　西Ｉ遺跡Ａ－１区　段状遺構４ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
Ｐ１	P40	0.25	0.22	0.13	54.34	Ｐ９	P37	0.28	0.25	0.3	53.2
Ｐ２	P42	0.23	0.2			P10	P36	0.41	0.24	0.3	52.95
Ｐ３	P41	0.22	0.22	0.15	54.13	P11	P13	0.24	0.21	0.25	53.39
Ｐ４	P30	0.25	0.24	0.21	52.99	P12	Ｐ１	0.19	0.17	0.15	54.26
Ｐ５	P43	0.42	0.32	0.13	53.05	P13	P34	0.21	0.16		
Ｐ６	P39	0.3	0.23	0.31	53.98	P14	P33	0.29	0.19	0.4	52.47
Ｐ７	P44	0.29	0.18	0.54	52.57	P15	P31	0.25	0.24	0.34	52.55
Ｐ８	Ｐ２	0.4	0.32	0.14	52.98	P16	P32	0.22	0.2	0.26	52.47



第20図　西Ｉ遺跡Ａ－１区　段状遺構４出土遺物実測図（S＝土器1/4・鉄製品1/3）

第21図　西Ⅰ遺跡A－1区　段状遺構4実測図（S＝1/60）



第22図　西Ⅰ遺跡A－1区　段状遺構4遺物出土状況図（S＝1/60・土器1/6・鉄製品1/4）

第34表　西Ⅰ遺跡A－1区　段状遺構4出土遺物構成表

種別	器種	現状と数量					
土師器	椀	完形	口縁部1/2以上				
	赤彩椀	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
				1			
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
				1			
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
		1					
	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	
			1				
	手捏ね土器	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上			
			1				
	移動式竈	完形	1/2以上	基底部	口縁部・焚口部		
					1		
	赤彩甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上	頸部1/9以下
							1
	甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上	頸部1/9以下
				5	2		4
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
		1		2	1		
	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部		
			1				
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
			1				

第35表　西Ⅰ遺跡 A－1区　段状遺構4出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　土	焼　成	調　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
20図－1	須恵器 杯蓋A4	**4.0**	**13.2**		やや粗（2㎜以下の石英・長石等をやや多く含む）	普通	天井部：ヘラ起こしの後、ナデ 体部：浅い回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ	内・断面：淡青灰色 外面：淡灰色	3/4	出雲4期 TK209
20図－2	須恵器 杯身A3	**3.8**	11.9		やや密（1㎜以下の石英・長石を含む）	良好	口縁部・体部：回転ヨコナデ 底部：比較的丁寧な回転ヘラケズリ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡青灰色	1/3	出雲3期 TK43
20図－3	須恵器 低脚無蓋高杯A4	残高 3.1			密（1㎜以下の長石等をわずかに含む）	やや不良	体部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 脚部内面：丁寧なナデ	全面：灰白色	杯基部	出雲4期 TK209
20図－4	土師器 単純口縁甕	残高 5.4			普通（2㎜以下の長石・石英を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：橙褐色 断面：暗灰褐色	口縁部1/8	
20図－5	土師器 単純口縁甕	残高 7.0	14.1		粗（2㎜以下の石英・長石を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部：磨滅のため不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：明褐色 外・断面：淡橙褐色	口縁部1/5	
20図－6	土師器 単純口縁甕	残高 4.1	21.5		やや粗（2㎜以下の石英・長石を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡橙褐色 外面：淡黄褐色	口縁部1/3	
20図－7	土師器 単純口縁甕	残高 4.4	18.2		やや粗（2㎜以下の石英・長石・黒色粒を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヘラケズリ	内・断面：淡褐色 外面：淡橙褐色	口縁部1/8	
20図－8	土師器 赤彩高杯	残高 5.5		**10.5**	密（1㎜以下の長石・赤色粒をわずかに含む）	普通	脚部外面：ユビナデのうえ赤彩を施す 底部：粗いユビナデ	内面：淡褐色 外面：淡橙褐色 断面：淡灰色	脚部5/6	外面赤彩
20図－9	土師器 高杯	残高 8.4		6.8	やや粗（3㎜以下の石英・長石を多く含む）	やや良好	体部：ナデ 脚部：ヨコナデ 脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡褐色 外面：淡褐色～淡橙褐色 断面：淡灰褐色	杯部は1/3のみ	
20図－10	土師器 手捏ね土器	残高 5.3	4.6		やや密（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	良好	外面：ユビナデ 縁部内面：ヨコナデ	内・外面：淡灰褐色 断面：褐灰色	1/2	

第36表　西Ⅰ遺跡 A－1　段状遺構4出土鉄製品観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			残存度	備　考
		現長	巾	最大厚		
20図－11	不明鉄製品	4.45			1/2以下	
20図－12	釘	3.1		**0.6**	1/2以下	

段状遺構5

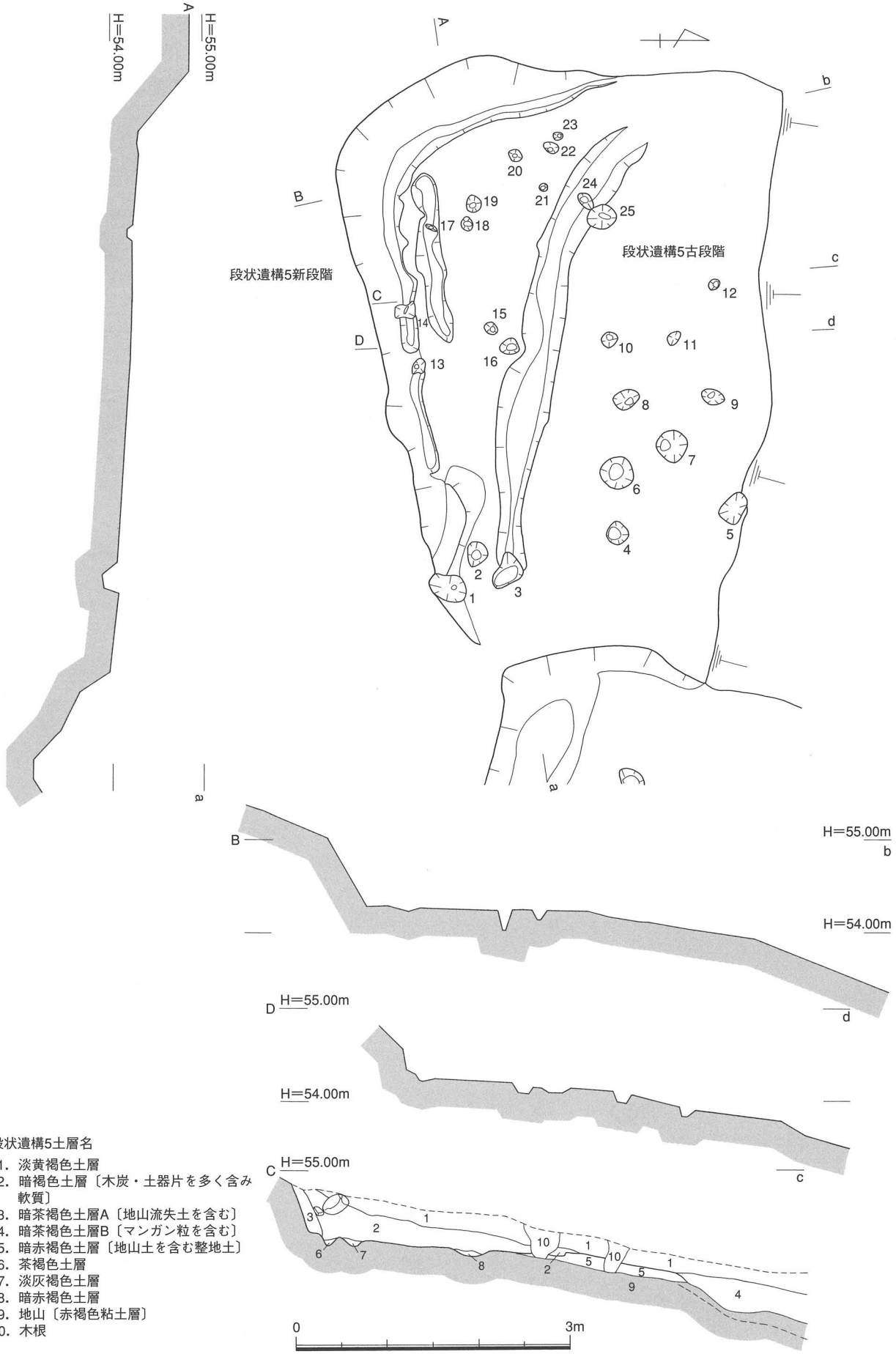
段状遺構5は古・新2時期の遺構が重複している。新段階の平面形は隅丸長方形であり、床面全長4.37m、床面幅4.0mの規模を持つ。

この段状遺構は最高所で標高55.0m付近から掘削され、床面の標高は54.25m付近に設定されている。段の軸線は自然地形よりは南西側にくい込んで設定されており、N－78°－Wとなっている。そのため、段状遺構の南西角付近の上場は床面からの標高差が0.75mとなっているが、東端の掘削上場は床面とほぼ同レベルまで低下している。また、隣接する段状遺構4の床面とは0.75mの段差がある。段状遺構5古段階の遺構として、床面中央にN－75°－Eの軸線を持つ、長さ5.05m、最大幅0.55m、深さ0.1mの排水溝と考えられる溝状遺構がある。

新段階の段の壁際には幅0.15～0.25m・深さ0.13mの排水溝が掘削されているが、その内側にも幅0.3m、深さ0.1mの溝状遺構が存在する。拡張行為が3次にわたったものか、遺構内の間仕切り

第37表　西Ⅰ遺跡 A－1区　段状遺構5ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P1	P3	0.42	0.27	0.26	54.06	P14	P21	0.22	0.14	0.11	54.17
P2	P4	0.28	0.24	0.22	53.96	P15	P16	0.18	0.12	0.12	54.06
P3	P5	0.39	0.25	0.18	53.91	P16	P12	0.23	0.18	0.1	54.1
P4	P14	0.26	0.23	0.43	53.56	P17	P22	0.14	0.05	0.12	54.09
P5	P24	0.34	0.24			P18	P18	0.16	0.13	0.07	54.15
P6	P6	0.38	0.35	0.15	53.9	P19	P19	0.2	0.18	0.08	54.17
P7	P7	0.36	0.36	0.23	53.77	P20	P25	0.15	0.13	23	54
P8	P9	0.3	0.22	0.15	53.92	P21	P26	0.11	0.09	0.09	54.14
P9	P15	0.27	0.17	0.06	53.6	P22	P27	0.18	0.08	0.11	54.1
P10	P17	0.19	0.17	0.15	53.95	P23	P28	0.13	0.08	0.07	54.17
P11	P10	0.17	0.13	0.09	53.85	P24	P23	0.23	0.12	0.12	53.99
P12	P29	0.13	0.07	0.16	53.7	P25	P11	0.33	0.27	0.1	54.06
P13	P20	0.15	0.13	0.09	54.17						



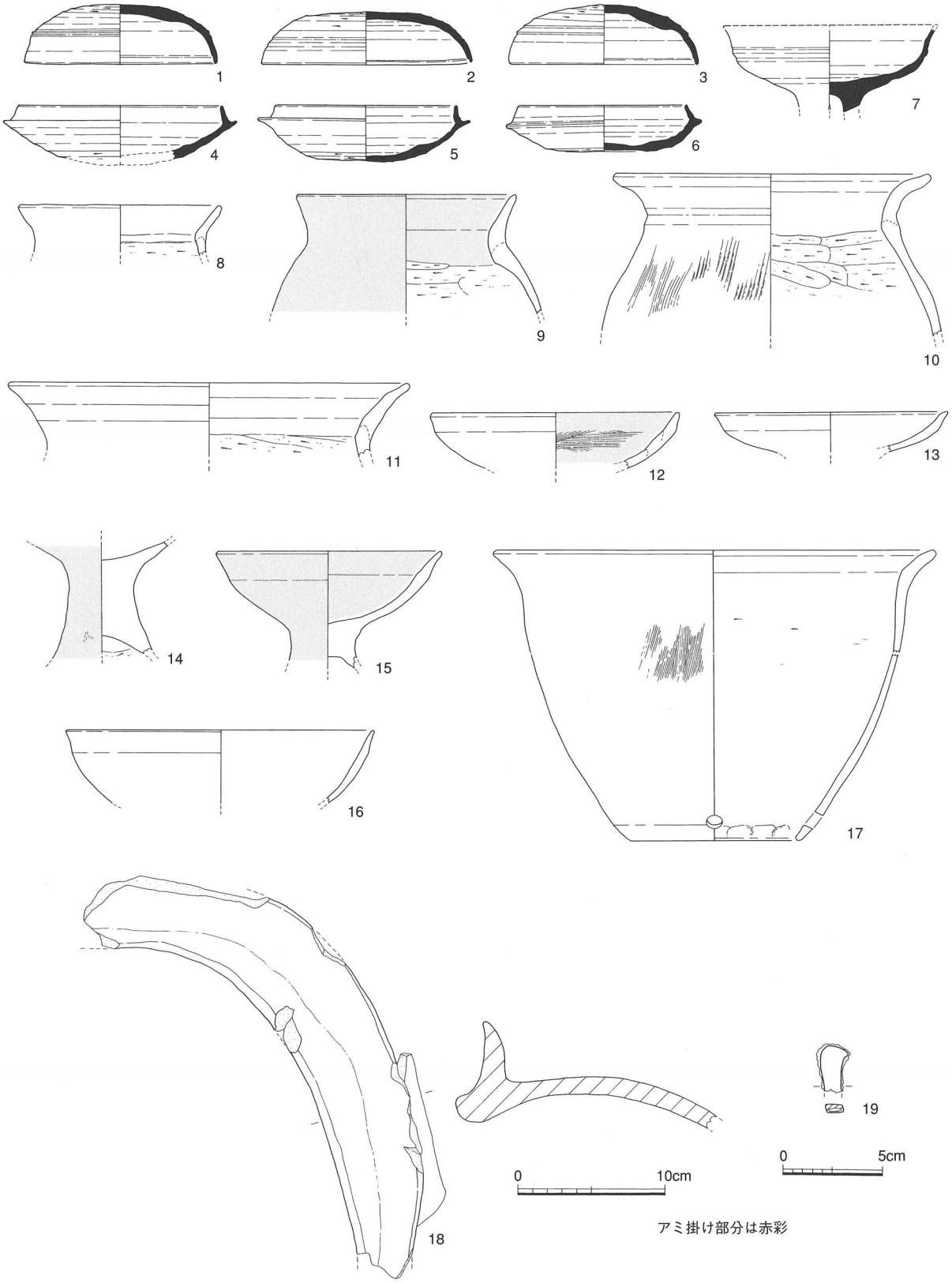
段状遺構5土層名

1. 淡黄褐色土層
2. 暗褐色土層〔木炭・土器片を多く含み軟質〕
3. 暗茶褐色土層A〔地山流失土を含む〕
4. 暗茶褐色土層B〔マンガン粒を含む〕
5. 暗赤褐色土層〔地山土を含む整地土〕
6. 茶褐色土層
7. 淡灰褐色土層
8. 暗赤褐色土層
9. 地山〔赤褐色粘土層〕
10. 木根

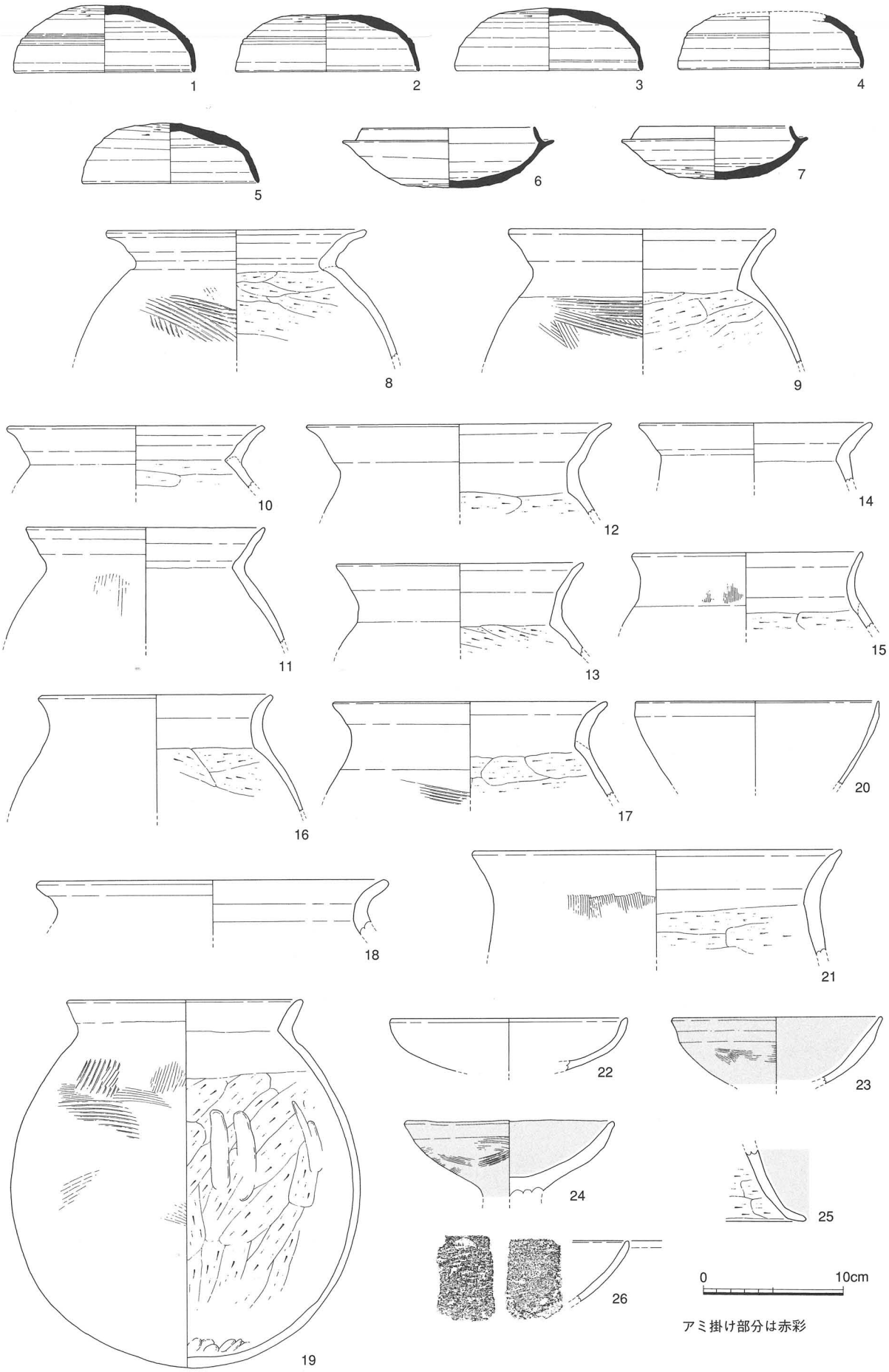
第23図　西Ⅰ遺跡A－1区　段状遺構5実測図（S=1/60）

痕か現状では判断しがたい。

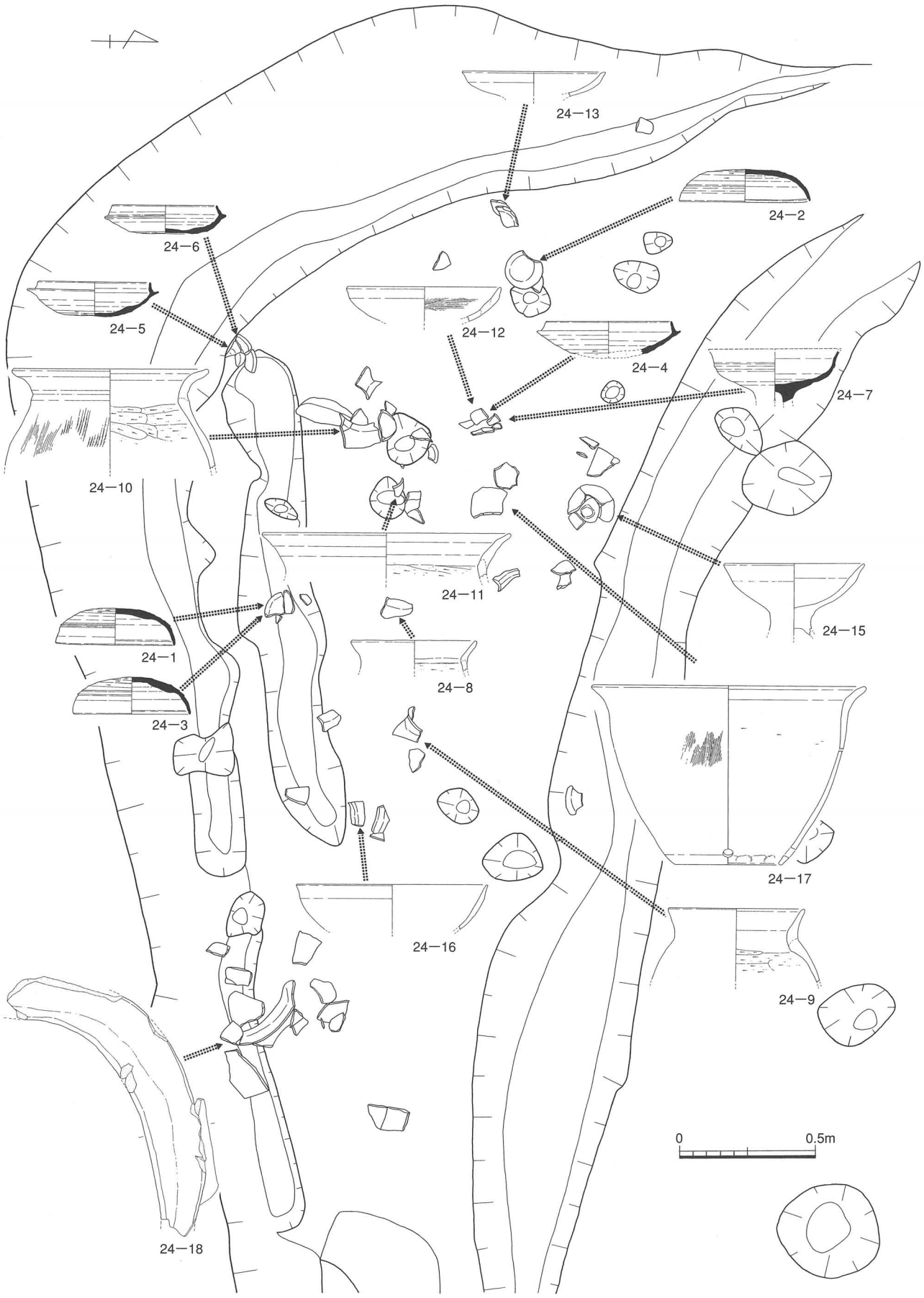
段状遺構内では25個のピットが確認されているが、規則的な配列は見られず、いずれも小規模なものである。ここでも掘立柱建物の復元は困難であり、簡易な構造の建築物が存在したことを考えたい。



第24図　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５床面出土遺物実測図（S＝土器1/4・鉄製品1/3）



第25図　西Ⅰ遺跡 A－１区　段状遺構５覆土出土遺物実測図（S＝1/4）



第26図　西Ⅰ遺跡Ａ−１区　段状遺構５遺物出土状況図（S=1/20・土器1/6）

段状遺構５の遺物

段状遺構５床面では多くの遺物が残存していたが、古・新段階の床面は同一レベルで確認しており、床面出土遺物は新段階廃絶時のものと考えられる。床面を覆う覆土は段状遺構３からの影響を受け、暗褐色土で黒味の強い土層が堆積している。ここでは、土師器の鉢・高杯や須恵器の杯身・杯蓋などの供膳具のほか、土師器の甕・甑など煮沸具が出土している。移動式竈も出土しているが基底部がなく口縁部、焚口部など個体の上半部のみ出土していることから、上方からの転落と考えられる。その他の遺物も破片が多いことから、この床面出土遺物のセットが段状遺構５で本来使用された土器様式とは考えにくい。床面出土遺物に時期差は見い出しがたく、混入品を抽出することも困難なため、時期比定には支障が無いものと考えられる。須恵器杯蓋は出雲大谷編年３期のものが２個体、４期のものが２個体である。

一方、覆土からも多量の土器が出土しているが、須恵器杯蓋は出雲３期のものが１個体に対して出雲４期のものが９個体と出雲４期の個体が大半を占めるため、段状遺構５が埋没した時期は出雲４期と考えられる。

また、この段状遺構の床面直上からは釘状の鉄製品も出土しており、鉄器を保有していたことがうかがわれる。

また、赤彩高杯が多く出土しており、床面・覆土合わせて口縁部片でカウントすれば10個体が出土していることが特筆される。

覆土中の遺物ではあるが、縄文時代晩期の粗製浅鉢の口縁が出土している。縄文時代の土器類はこの１点のみであるが、石鏃やスクレイパー、黒曜石剥片など縄文時代に属すると考えられる遺物が出土している。狩猟具が多いことから、西Ｉ遺跡付近は縄文時代には狩猟エリアとなっていた可能性が考えられる。

第38表　西Ｉ遺跡Ａ－１区　段状遺構５出土遺物構成表

種別	器　種	現　状　と　数　量					
土師器	椀	完形	口縁部1/2以上				
	赤彩椀	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
				2			
	赤彩高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
			4	1		10	7
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
			1	2		4	
	鉢	完形	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下		
				9	9		
	甑	完形	口縁部	底部	把手〔一対〕	把手〔片方〕	
			2			3	
	赤彩甕	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/8以上	頸部1/9以下
			1	1			
	甕	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	頸部1/2以上	頸部1/8以上	頸部1/9以下
		6	31	49	1	20	40
	移動式竈	完形	1/2以上	基底部	口縁部・焚口部		
					1		
	手捏ね土器	完形	口縁部1/2以上	口縁部1/8以上			
				1			
須恵器	杯蓋	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	天井部	稜部	
		5	4	2	1	2	
	杯身	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下	底部		
		5	4	4	1		
	高杯	完形	杯部	脚部	軸部	口縁部	脚端部
		1					
	甕	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下		
				2			
	大甕	完形	1/2以上	1/8以上	1/9以下		
					1		
縄文土器	晩期浅鉢	1/2以上	口縁部1/8以上	口縁部1/9以下			
			1				
鉄釘		1					

第39表　西Ⅰ遺跡 A－1区　段状遺構5床面出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

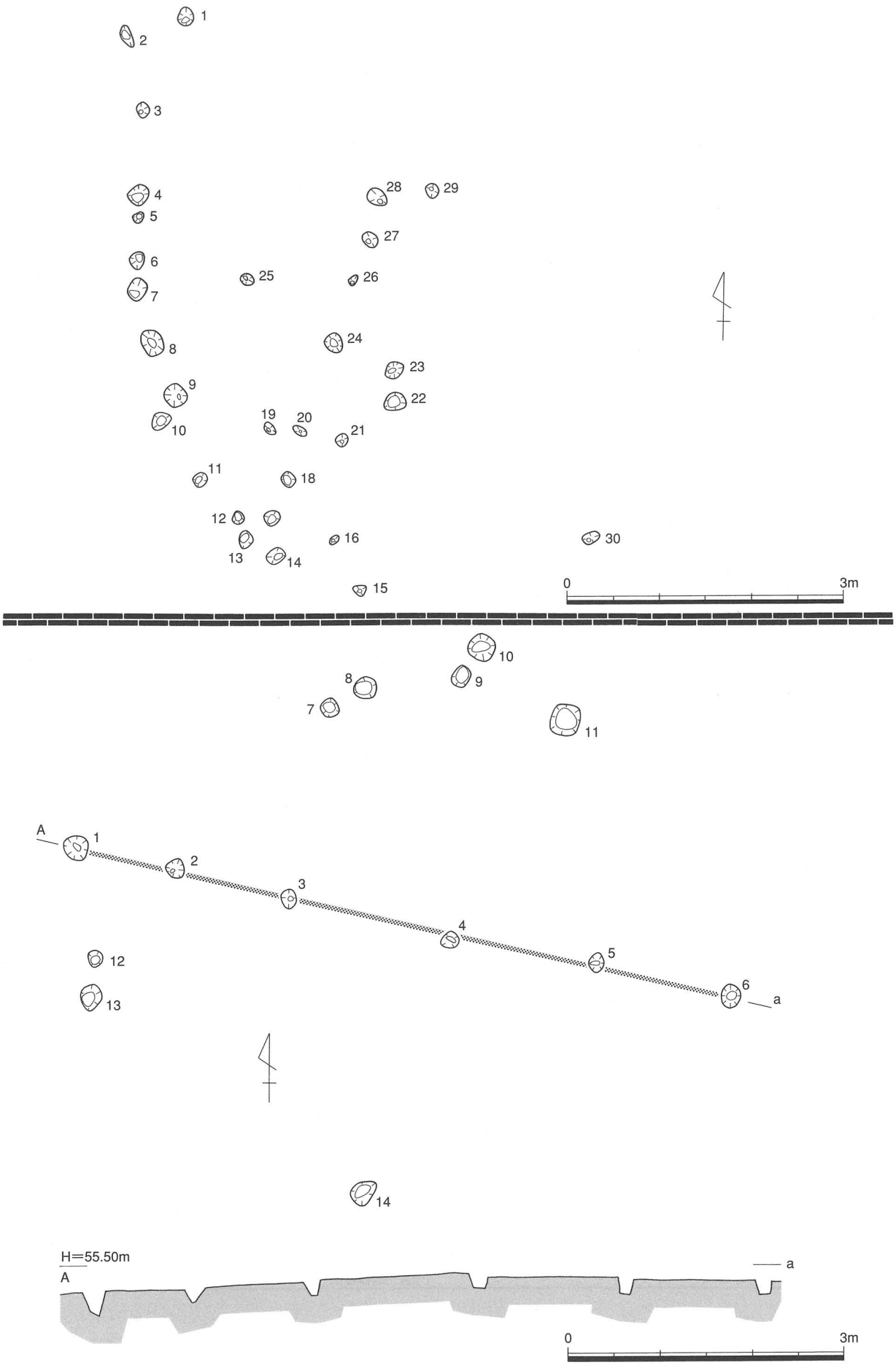
挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
24図－1	須恵器 杯蓋Ａ4	**4.0**	**12.8**		普通（1.5㎜以下の石英・長石をやや多く含む）	良好	天井部：浅く単位の小さい回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ	内・外面：淡青灰色 断面：淡灰色	3/4	出雲4期 TK209
24図－2	須恵器 杯蓋Ａ3ａ	**3.6**	**14.0**		密（1㎜以下の長石を含む）	良好	天井部：比較的丁寧な回転ヘラケズリ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 口縁部：回転ヨコナデ	全面：淡青灰色	90%	出雲3期 TK43
24図－3	須恵器 杯蓋Ａ3ａ	**4.1**	**12.6**		密（1㎜以下の長石を含む）	良好	天井部：比較的丁寧な回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：淡灰褐色 外面：濃灰色 断面：白褐灰色	4/5	出雲3期 TK43
24図－4	須恵器 杯身Ａ4	残高 3.6	13.6		緻密（0.5㎜以下の長石・黒色粒をわずかに含む）	良好緻密	口縁部：回転ヨコナデ 底面：回転ヘラケズリ 底面内部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：明灰色	2/5	出雲4期 TK209
24図－5	須恵器 杯身Ａ4	**3.8**	**12.1**		密（1㎜以下の長石・石英等を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 底部：中心まで回転ヘラケズリ 底面内部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡灰色	4/5	出雲4期 TK209
24図－6	須恵器 杯身Ａ4	**3.1**	**11.3**		密（1㎜以下の長石を含む）	良好緻密	口縁部：回転ヨコナデ 底部：浅くて雑な回転ヘラケズリ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：茶褐色 断面：暗紫褐色	3/4	出雲4期 TK209
24図－7	須恵器 低脚無蓋高杯Ａ4	残高 5.6	推定 14.2		密（1㎜以下の長石・石英を含む）	不良	全体的に磨滅しており調整不明	全面：淡灰色	脚端部は欠損	出雲4期 TK209
24図－8	土師器 単純口縁甕	残高 3.4	13.1		普通（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：淡茶褐色 断面：淡橙褐色	口縁部1/5	
24図－9	土師器 単純口縁甕 赤彩	残高 8.1	14.5		やや粗（3㎜以下の石英・長石・赤色粒等を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：橙褐色	上半部1/3	外面及び口縁内面赤彩
24図－10	土師器 単純口縁甕	残高 11.0	20.9		やや粗（3㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 外面：5条/cmのタテハケ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡黄褐色 外面：橙褐色 断面：灰褐色	口縁部1/3	
24図－11	土師器 単純口縁甕	残高 5.0	26.6		やや粗（2㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡橙褐色～淡灰褐色 断面：灰黄褐色	口縁部1/3	
24図－12	土師器 赤彩高杯	残高 3.8	16.6		普通（1㎜以下の石英・長石・金雲母を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 内面：7～8条/cmのヨコハケ 外面：磨滅のため調整不明	内・外面：濃橙褐色 断面：赤桃褐色	杯部1/3	杯部内面赤彩
24図－13	土師器 高杯	残高 2.8	15.5		粗（2㎜以下の石英・長石を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 内外面：磨滅のため調整不明	内・断面：橙褐色 外面：暗黄褐色	口縁部1/4	
24図－14	土師器 赤彩高杯	残高 7.5			普通（2㎜以下の長石・石英等を含む）	普通	杯部内面：磨滅のため調整不明 杯部下半：ヨコ方向のヘラケズリ 脚部外面：タテハケ後、ナデ消し 脚部内面：ナデ	内面：淡茶褐色～淡黄褐色 外面：橙褐色 断面：淡茶褐色	脚基部	脚部外面赤彩
24図－15	土師器 赤彩高杯	残高 7.9	**15.0**		普通（1㎜以下の石英、長石・赤色粒を含む）	普通	内外面：磨滅のため調整不明 脚部内面：ヘラ状工具により粗雑な調整	内・断面：淡褐色 外面：淡橙褐色	杯部5/6	脚部内面以外赤彩
24図－16	土師器 高杯	残高 4.9	20.5		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く含む）	普通	内外面：磨滅のため調整不明	内面：明茶褐色 外面：橙褐色 断面：暗黄褐色	口縁部1/5	
24図－17	土師器 甑	推定 19.5	29.2	11.2	普通（2㎜以下の石英・長石・金雲母を含む）	普通	口縁部・底部：ヨコナデ 外面上半部：6条/cmのタテハケ 内面上半部：ヨコ方向のヘラケズリ後、ナデ消し 内面下半：最終調整は丁寧なナデ 内面下端：ユビナデ	内面：淡茶褐色 外・断面：黄褐色	1/3	
24図－18	移動式竈	36	25.9		普通（3㎜以下の石英・長石・黒色粒等を含む）	普通	外面：ユビナデ 内面：ヘラケズリ	内面：濃橙褐色 外面：橙褐色 断面：淡灰色	1/4程度	

第40表　西Ⅰ遺跡 A－1区　段状遺構5床面出土鉄製品観察表

挿図番号	器　種	寸法（cm）			備　考
		現長	厚さ	最大巾	
24図－19	釘	2.3	0.4	0.9	

第41表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　段状遺構５覆土出土遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
25図－１	須恵器 杯蓋Ａ４	**4.8**	**12.8**		密（１㎜以下の長石・石英等を含む）	やや不良	天井部：浅く単位の小さい回転ヘラケズリ 口縁部・体部：回転ヨコナデ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：暗灰褐色 外・断面：暗褐灰色	1/2	出雲４期 TK209
25図－２	須恵器 杯蓋Ａ４	**4.1**	**13.1**		密（0.5㎜以下の長石をわずかに含む）	やや不良	天井部：比較的丁寧な回転ヘラケズリ 口縁部・体部：回転ヨコナデ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：淡褐灰色 外面：淡灰色 断面：淡茶褐色	2/3	出雲４期 TK209
25図－３	須恵器 杯蓋Ａ６	**4.5**	13.3		普通（1.5㎜以下の長石等をやや多く含む）		天井部：ヘラ起こしのまま 口縁部・体部：回転ヨコナデ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：明灰色	2/5	出雲４期 TK209
25図－４	須恵器 杯蓋Ａ４	4.2	13.1		密（１㎜以下の長石・石英を含む）	良好	口縁部・体部：回転ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ	内・断面：淡灰色 外面：暗灰色	口縁部1/3	出雲４期 TK209
25図－５	須恵器 杯蓋Ａ３ｃ	**4.4**	**12.5**		密（１㎜以下の石英・長石を含む）	普通	天井部：回転ヘラケズリ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 体部：回転ヨコナデ	全面：白灰色	90％	出雲４期 TK209
25図－６	須恵器 杯身Ａ５	**4.3**	**12.3**		密（0.5㎜以下の石英・長石を含む）	不良軟質	口縁部・体部：回転ヨコナデ 体部：回転ヘラケズリ 底面：ヘラ切り後にナデ 底面内部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡褐灰色	4/5	出雲４期 TK209
25図－７	須恵器 杯身Ａ７	**3.9**	**10.9**		密（1.5㎜以下の長石・石英を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 底部：回転ヘラケズリ 底面内部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡灰色	3/5	出雲３期 TK43
25図－８	土師器 単純口縁甕	残高 9.6	**18.4**		やや粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒をやや多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 肩部：強いヨコナデ 胴部外面：３条/cmの斜行ハケ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡褐色	上半部1/2	
25図－９	土師器 単純口縁甕	残高 9.7	**18.9**		やや粗（３㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：４条/cmのヨコハケ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：白褐色 外面：淡黄褐色 断面：淡灰褐色	上半部1/2	
25図－10	土師器 単純口縁甕	残高 4.6	18.0		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ後、ナデ	内面：明褐色 外面：淡褐色 断面：淡茶褐色	口縁部1/4	
25図－11	土師器 単純口縁甕	残高 8.4	16.9		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部：４～５条/cmのタテハケだが磨滅のため詳細不明 胴部内面：磨滅のため調整不明	全面：橙褐色	上半部1/3	
25図－12	土師器 単純口縁甕	残高 6.6	21.6		やや粗（３㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁内部：強いヨコナデ 胴部外面：磨滅のため調整不明 口縁部：ヨコナデ 胴部内面：磨滅のため判然としないがヨコ方向のヘラケズリか？	内面：淡黄褐色 外面：濃橙褐色 断面：黄褐色	口縁部1/4	
25図－13	土師器 単純口縁甕	残高 6.8	**17.4**		粗（３㎜以下の石英・長石等を多量に含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡橙褐色 外・断面：淡黄褐色	上半部1/2	
25図－14	土師器 単純口縁甕	残高 4.3	16.4		普通（1.5㎜以下の石英・長石・黒色粒を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヘラケズリ後、ナデ？	全面：淡褐色	口縁部1/5	
25図－15	土師器 単純口縁甕	推定 5.6	16.3		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石・金雲母等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ外面の一部にはヨコナデ前の９条/cmのタテハケが残る 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡桃褐色	口縁部1/5	
25図－16	土師器 単純口縁甕	残高 8.5	16.4		普通（３㎜以下の石英・長石・黒色粒を含む）	やや不良	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ 胴部：磨滅のため調整不明	全面：淡褐色	口縁部1/4	
25図－17	土師器 単純口縁甕	残高 6.9	**19.4**		やや粗（４㎜以下の石英・長石・赤色粒等を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 肩部：４条/cmのヨコハケ 胴部内面：胴部内面はヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡橙褐色 外面：淡褐色 断面：淡黄褐色	上半部2/3	
25図－18	土師器 単純口縁甕	残高 4.0	24.6		やや粗（2.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ	内・断面：淡橙褐色 外面：淡灰褐色	口縁部1/4	
25図－19	土師器 単純口縁甕	残高 26.3	**16.6**		普通（２㎜以下の石英・長石・黒色粒等を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヘラケズリ後、ナデ 胴部：５条/cmのハケ調整 胴部内面：斜上方向のヘラケズリ上げ底部近くはユビオサエ痕	全面：淡褐色	2/3	
25図－20	土師器 深鉢	残高 6.0	17.3		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ユビナデ 内外面：磨滅のため調整不明	全面：淡橙褐色	口縁部1/8	
25図－21	土師器 甑	残高 7.6	26.2		普通（１㎜以下の石英・長石・金雲母等を含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 胴部：７条/cmのタテハケ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：茶褐色 断面：暗灰褐色	口縁部1/4	
25図－22	土師器 高杯	残高 3.8	16.8		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	外面：磨滅のため調整不明 内面：ヨコナデ	全面：淡橙褐色	口縁部1/4	
25図－23	土師器 赤彩高杯	残高 4.8	14.8		やや粗（２㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く含む）	普通	口縁部：ユビナデ 内面：磨滅のため調整不明 外面：８条/cmのヨコハケ	全面：橙褐色	杯部1/5	内外面 赤彩
25図－24	土師器 赤彩高杯	残高 5.1	**14.8**		やや粗（３㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコハケ 体部：８条/cmのピッチの小さいヨコハケ後、ナデ 内面：磨滅のため調整不明	内・外面：濃橙褐色 断面：茶褐色	杯部4/5	内外面 赤彩
25図－25	土師器 赤彩高杯	残高 5.1			やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好	脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ 外面：赤彩が厚く調整不明	脚部：赤彩 全面：淡褐色	脚部1/5	外面赤彩
25図－26	縄文晩期 粗製浅鉢	残高 4.4			やや粗（２㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 外面：ヨコ方向のヘラケズリ 内面：条痕調整後、ナデ	全面：暗茶褐色	口縁部1/8	



第27図　西Ⅰ遺跡A－1区　下段小規模ピット群・A－2・3区　中段柵列1実測図（S=1/60）

第42表　西Ⅰ遺跡 A－1区　小規模ピット群ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P1	P15	0.19	0.16	0.11	53.57	P16	P19	0.13	0.07	0.19	53.56
P2	P28	0.26	0.1	0.1	53.8	P17	P4	0.16	0.15	0.13	53.72
P3	P14	0.15	0.14	0.21	53.63	P18	P21	0.18	0.13	0.07	53.71
P4	P13	0.23	0.2	0.13	53.73	P19	P22	0.15	0.1	0.07	53.64
P5	P27	0.14	0.1	0.06	53.79	P20	P23	0.18	0.1	0.09	53.57
P6	P12	0.2	0.17	0.14	53.73	P21	P24	0.16	0.14	0.14	53.45
P7	P11	0.23	0.18	0.13	53.75	P22	P7	0.26	0.18	0.15	53.33
P8	P10	0.3	0.22	0.17	53.71	P23	P8	0.23	0.18	0.09	53.32
P9	P6	0.24	0.24	0.17	53.72	P24	P9	0.21	0.18	0.09	53.4
P10	P5	0.23	0.16	0.07	53.85	P25	P25	0.15	0.13	0.07	53.53
P11	P3	0.17	0.12	0.06	53.87	P26	P26	0.13	0.07	0.09	53.31
P12	P20	0.15	0.13	0.04	53.85	P27	P16	0.19	0.14	0.07	53.32
P13	P2	0.21	0.16	0.07	53.84	P28	P17	0.23	0.19	0.2	53.18
P14	P1	0.21	0.15	0.11	53.79	P29	P29	0.17	0.14	0.24	53.01
P15	P18	0.15	0.13	0.08	53.74	P30	P30	0.14	0.13	0.08	53.32

第43表　西Ⅰ遺跡 A－3区　柵列1付近ピット計測表

ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	ピット名	旧番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底面標高(m)
P1	P3	0.26	0.26	0.26	54.95	P8	P7	0.25	0.24	0.2	54.94
P2	P4	0.22	0.22	0.15	55.08	P9	P8	0.23	0.18	0.16	54.94
P3	P5	0.22	0.19	0.17	55.15	P10	P9	0.3	0.3	0.11	54.95
P4	P13	0.23	0.2	0.15	55.11	P11	P10	0.33	0.31	0.29	54.89
P5	P14	0.21	0.18	0.17	55.16	P12	P2	0.2	0.14	0.27	55.15
P6	P11	0.25	0.2	0.15	55.16	P13	P1	0.29	0.23	0.37	55.14
P7	P6	0.22	0.21	0.31	54.85	P14	P12	0.32	0.22	0.26	55.53

第44表　西Ⅰ遺跡 A－3区　柵列1計測表

規模(m)	柱間5間（全長7.3m）				
柱間距離(m)	P1－P2	P2－P3	P3－P4	P4－P5	P5－P6
	1.05	1.29	1.78	1.58	1.5

A－1区下段・小規模ピット群

調査区の北西隅で確認したもので、直径0.2cm、深さ0.07～0.2cm程度の小ピットが群集するのもである。平面的に見るとP2～P15に至る15個前後のピット群は緩やかな弧状のラインを取りながら不規則に並んでおり、その下方斜面に15個前後のピットが不規則に存在している。P2～P15間の距離は6.05mである。このピット群は南西部の確認面標高が53.95mであり、東部確認面標高が53.24mと、比高差が0.7mあり、床面がフラットではない。これらの条件から通常の掘立柱建物などは想定しがたく、簡易なテント状の構造を持つ建物の可能性が考えられる。

柵列1

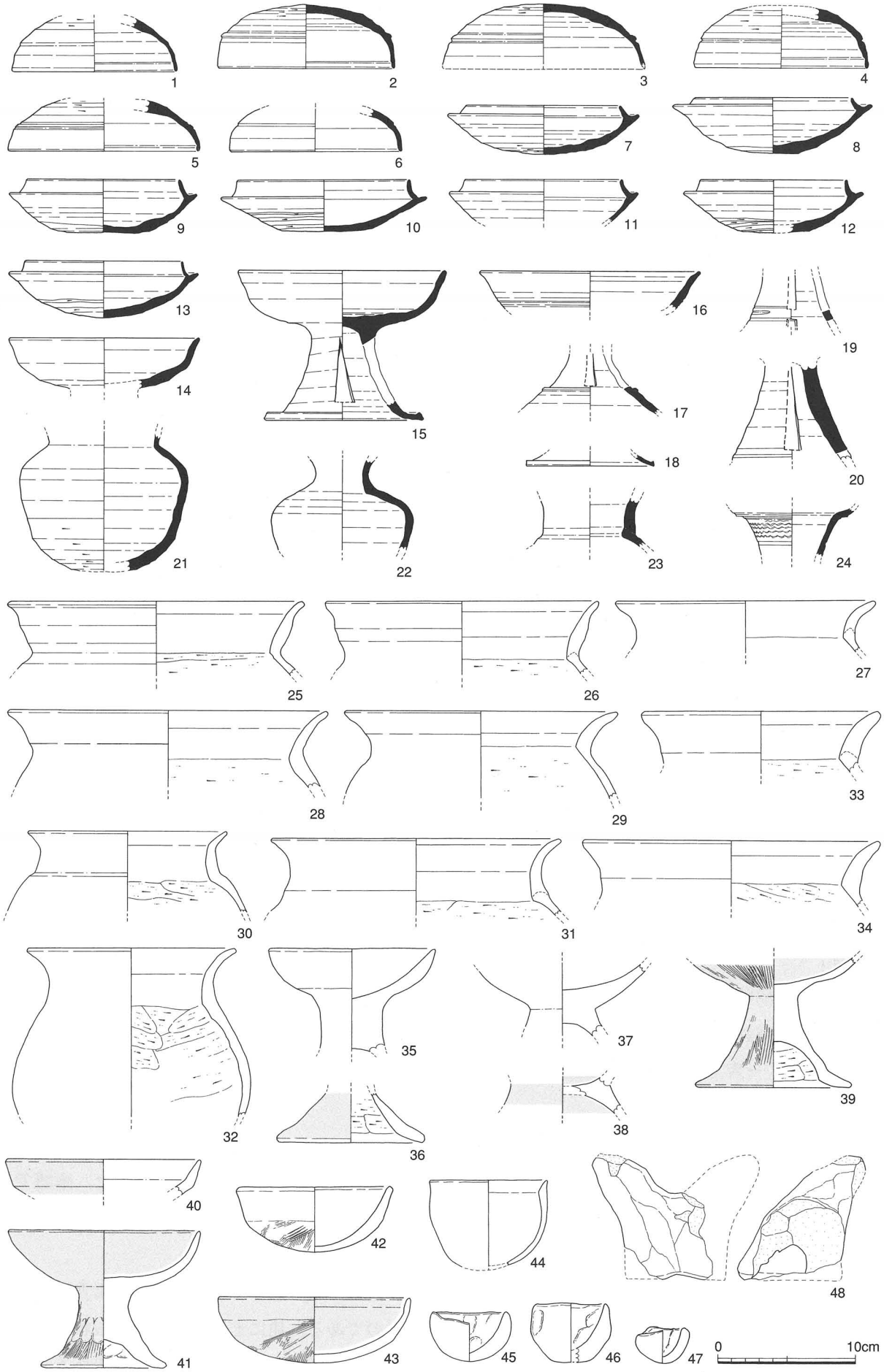
柵列1は段状遺構1・掘立柱建物1と段状遺構3の中間の標高55.2m付近に位置する柵列状遺構である。軸線は等高線とほぼ並行するN－78°－Wであるが、これは段状遺構1・掘立柱建物1の軸線N－77°－Wに値が近く、掘立柱建物1に付随する施設の可能性がある。柵列のP1～P6間の全長は7.3mである。

A－1・2・3区下段・下段斜面出土遺物

A区下段・下段斜面には多くの遺物が転落しており、最も遺物量の多い地域であった。確認できたものとして、須恵器杯身40個体、杯蓋39個体を数えたほか、土師器甕（口縁部残存個体でカウント）は172個体にのぼった。

第28図－48は土製支脚と考えられる土製品であるが、胴部が短い個体で、7世紀代に出雲地域平野部で盛行する胴部が長いタイプとは形状を異にするものである。他に土製支脚と考えられる個体が存在しないことから、土製支脚の初源と移動式竈とのセット関係などを探る上で重要である。

第30図－4・5は羽口端部と湾形滓である。4は鍛錬鍛冶炉に付属する羽口で、炉内の燃焼部に

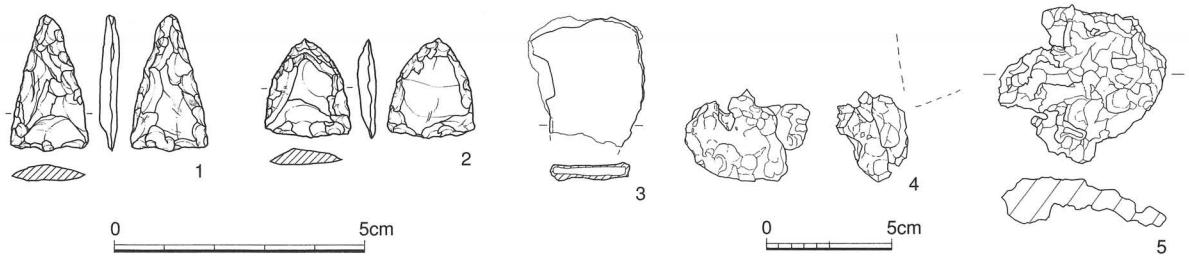


第28図　西Ⅰ遺跡 A－１区　下段・下段斜面包含層出土遺物実測図（S＝1/4）

アミ掛け部分は赤彩

0　10cm

第29図　西Ⅰ遺跡 A－２・３区　下段・下段斜面包含層出土遺物実測図（S＝1/4）

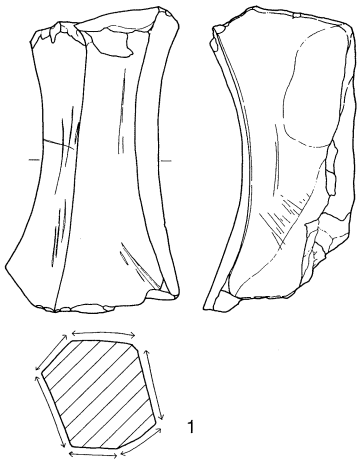


第30図　西Ⅰ遺跡 A－１・２・３区　下段・下段斜面包含層出土遺物実測図（S＝石製品2/3・鉄滓1/3）

接する下端部に付着した滓である。５は鍛錬鍛冶操業によって炉底に形成された椀形滓である。鍛冶炉遺構については調査区内では確認できなかった。

この包含層中においても大谷４・５期の遺物で占められており、集落本体も大谷５期のうちに廃絶したことがうかがわれる。

第31図－１は凝灰岩製の砥石である。よく使い込まれており、鎌・刀子などの研磨に用いられたものと考えられる。段状遺構３もしくは４から転落したものと考えられる。



第31図　西Ⅰ遺跡Ａ－２区　下段包含層出土遺物実測図（S＝1/3）

第45－１表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区下段・下段斜面出土遺物観察表１（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器種	寸法（cm）			胎土	焼成	調整	色調	残存度	備考
		器高	口径	底径						
28図－１	須恵器 杯蓋Ａ３ａ	残高 3.9	11.7		密（0.5mm以下の石英・長石等を含む）	良好	天井部外面：回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 口縁端部内面：浅い段を施す	内・外面：濃灰色 断面：暗灰色	口縁部1/6	出雲３期 TK43
28図－２	須恵器 杯蓋Ａ３ａ	**4.7**	**12.6**		密（１mm以下の石英・長石を含む）	良好	天井部外面：浅い回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡青灰色	1/2	出雲３期 TK43
28図－３	須恵器 杯蓋Ａ４	推定 4.8	推定 14.4		密（１mm以下の石英・長石を含む）	やや良好	天井部外面：浅い回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡青灰色	1/2	出雲４期 TK209
28図－４	須恵器 杯蓋Ａ３ａ	推定 4.6	12.4		密（0.5mm以下の長石をわずかに含む）	良好	天井部外面：回転ヘラケズリは浅いが広い範囲を削る 口縁部：回転ヨコナデ 天井部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・断面：濃灰色 外面：黒灰色	1/3	出雲３期 TK43
28図－５	須恵器 杯蓋Ａ４	残高 3.7	13.6		密（0.5mm以下の長石をわずかに含む）	良好	天井部外面：回転ヘラケズリ後、軽いヨコナデ 口縁部：回転ヨコナデ	内・外面：淡灰色 断面：濃灰色	口縁部1/3	出雲４期 TK209
28図－６	須恵器 杯蓋Ａ６	残高 3.1	12.2		密（１mm以下の石英・長石等を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ	内面：淡青灰色 外面：黒灰色 断面：淡灰色	口縁部1/5	出雲４期 TK209
28図－７	須恵器 杯身Ａ３	3.6	11.1	13.4	密（１mm以下の石英・長石を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 外面底部：比較的丁寧な回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：明灰色 断面：淡灰色	1/4	出雲３期 TK43
28図－８	須恵器 杯身Ａ６	**4.1**	**11.2**		密（１mm以下の長石を含む）	良好	外面底部：回転ヘラ切り後、ナデ 口縁部：回転ヨコナデ 底部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・断面：淡灰色 外面：淡青灰色	90%	出雲４期 TK209
28図－９	須恵器 杯身Ａ５	**3.9**	**10.9**		密（１mm以下の石英・長石を含む）	良好	外面中央部：ヘラ切り後、ナデ 胴部外面：浅く雑な回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：暗青灰色 断面：淡青灰色	1/2	出雲４期 TK209
28図－10	須恵器 杯身Ａ５	**3.8**	12.4		密（１mm以下の石英・長石を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 底部外面：浅くて雑な回転ヘラケズリ。削り残し部分が多い 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	全面：淡青灰色	1/3	出雲４期 TK209
28図－11	須恵器 杯身	残高 3.1	11.2		密（１mm以下の石英・長石を含む）	普通	口縁部：回転ヨコナデ	内・断面：淡青灰色 外面：淡褐灰色	口縁部1/5	
28図－12	須恵器 杯身Ａ５	3.9	10.5		密（１mm以下の石英・長石をわずかに含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底部外面：浅くて粗雑な回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・断面：淡青灰色 外面：暗青灰色	1/3	出雲４期 TK209
28図－13	須恵器 杯身Ａ５	**4.2**	**11.3**		密（1.5mm以下の長石等を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 底部：浅くナデるようなヘラケズリ	内面：濃灰色 外面：淡褐灰色 断面：淡紫褐色	1/2	出雲４期 TK209
28図－14	須恵器 低脚無蓋高杯	残高 3.8	13.8		密（１mm以下の石英・長石を含む）	良好	杯部：回転ヨコナデ 底部：回転ヘラケズリ後、脚部接合の際にヨコナデ	内面：暗灰色 外面：黒灰色 断面：淡青灰色	口縁部1/4	
28図－15	須恵器 低脚無蓋高杯Ａ４	**10.9**	**14.8**	11.2	密（１mm以下の長石等を含む）	良好	杯部下半：回転ヘラケズリ後、ヨコナデ 脚端部：内傾して凹面をもつ	内・断面：淡灰色 外面：暗灰色	80%	出雲４期 TK209
28図－16	須恵器 低脚無蓋高杯Ａ４	残高 12.8	15.7		密（0.5mm以下の石英・長石等を含む）	やや不良	口縁部：回転ヨコナデ	内・断面：淡褐灰色 外面：褐灰色	口縁部1/8	出雲４期 TK209
28図－17	須恵器 高杯Ｄ２	残高 4.4			普通（1.0mm以下の石英・長石等を含む）	普通	脚部内外面：回転ヨコナデ	全面：淡黄灰色	脚部1/5	出雲３期 TK43
28図－18	須恵器 高杯	残高 0.8		9.2	密（0.5mm以下の長石を含む）	良好	脚部内外面：回転ヨコナデ	内面：暗青灰色 外面：褐灰色 断面：淡白灰色	脚端部1/5	
28図－19	須恵器 長脚無蓋高杯Ｂ３	残高 3.8			密（１mm以下の石英・長石等を含む）	良好堅緻	脚部内外面：回転ヨコナデ	内面：淡青灰色 外面：暗灰褐色 断面：暗紫褐色	脚部1/5	出雲５期 TK217

第45－２表　西Ⅰ遺跡Ａ－１区　下段・下段斜面出土遺物観察表２（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器種	寸法（cm）			胎土	焼成	調整	色調	残存度	備考
		器高	口径	底径						
28図－20	須恵器 低脚無蓋高杯Ａ３	残高 6.9			密（１㎜以下の石英・長石を含む）	良好	脚部内面：回転ヨコナデ 脚部外面：回転ヨコナデ	内・断面：淡青灰色 外面：濃灰色	脚部1/3	出雲３期 TK43
28図－21	須恵器 直口壺	残高 10.1			普通（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	やや不良	内面：回転ヨコナデ 胴部外面：回転ヨコナデ 底部：回転ヘラケズリ	全面：淡褐灰色	胴部1/3	出雲３期 TK43
28図－22	須恵器 小型壺	残高 6.6	19.5		密（１㎜以下の長石をわずかに含む）	やや良好	外面：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	内・断面：淡青灰色 外面：濃灰色	上半部1/2	
28図－23	須恵器 長頸壺	残高 3.6			密（0.5㎜以下の長石等を含む）	良好	頸部内面：回転ヨコナデ 頸部外面：回転ヨコナデ	内・外面：暗灰色 断面：淡褐灰色	頸基部1/3	出雲４期 TK209
28図－24	須恵器 甕Ａ５	残高 3.5			緻密（0.5㎜以下の長石等を含む）	良好	頸部内面：回転ヨコナデ 頸部外面：振幅の小さい６条の波状文	全面：明灰色	頸部1/2	
28図－25	土師器 単純口縁甕	残高 5.3			普通（1.5㎜以下の石英・長石・金雲母を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：暗橙褐色 断面：暗褐色	口縁部1/4	
28図－26	土師器 単純口縁甕	残高 5.5	20.9		普通（1.5㎜以下の石英・長石・金雲母を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：淡茶褐色 断面：暗黄褐色	口縁部1/5	
28図－27	土師器 単純口縁甕	残高 3.8	18.5		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：磨滅。ヨコ方向のヘラケズリか？	全面：淡褐色	口縁部1/6	
28図－28	土師器 単純口縁甕	残高 5.5	22.9		粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：淡褐色 断面：淡黄褐色	口縁部1/5	
28図－29	土師器 単純口縁甕	残高 6.3	19.5		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 胴部：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡橙褐色 外面：淡灰褐色	上半部1/5	
28図－30	土師器 単純口縁甕	残高 5.8	14.1		やや密（２㎜以下の石英・長石・雲母等を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部外面：ナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：淡茶褐色 断面：暗褐色	口縁部1/3	
28図－31	土師器 単純口縁甕	残高 5.6	20.6		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石・雲母等を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：暗灰褐色 外面：淡赤褐色 断面：暗褐色	口縁部1/4	
28図－32	土師器 単純口縁甕	残高 12.3	14.8		やや粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡茶褐色 外面：濃橙褐色 断面：暗黄褐色	上半部1/5	
28図－33	土師器 単純口縁甕	残高 4.5	16.8		やや粗（2.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡褐色 外面：淡橙褐色	口縁部1/6	
28図－34	土師器 単純口縁甕	残高 4.8	21.2		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：淡橙褐色 断面：淡黄褐色	口縁部1/6	
28図－35	土師器 高杯 or 蓋	残高 7.5	11.9		やや粗（２㎜以下の石英・長石をやや多く含む）	普通	外面：磨滅のため調整不明 杯部内面：平滑に仕上げられる 脚部は中実	内面：淡黄褐色 外・断面：淡橙褐色	杯部1/3	
28図－36	土師器 赤彩高杯	残高 3.6		10.3	やや粗（２㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く含む）	やや良好	脚部外面：ユビナデ 脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ 脚端部：ヨコナデ	内面：淡褐色 外面：淡橙褐色 断面：淡褐灰色	脚部1/3	脚部外面赤彩
28図－37	土師器 高杯	残高 5.3			粗（３㎜以下の石英・長石等を多量に含む）	やや良好	内面：丁寧なナデにより平滑にする 外面：ユビナデ 脚部内面：ユビナデ	内面：淡灰褐色 外面：褐灰色 断面：淡褐灰色	杯基部	
28図－38	土師器 台付土器	残高 2.6			やや粗（1.5㎜以下の石英・長石を多く含む）	やや良好	全面：ナデ調整	内・外面：淡橙褐色 断面：暗灰褐色	脚底部1/3	全面赤彩
28図－39	土師器 赤彩高杯	残高 9.5		**11.0**	やや粗（２㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	やや良好	杯部内面：平滑に仕上げている 脚部外面：５条/cmのタテハケ 脚端部：タテハケ後、ヨコナデ 脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：橙褐色	2/3	脚部内面以外は赤彩
28図－40	土師器 赤彩椀	残高 2.6	13.8		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石・赤色粒を含む）	普通	口縁部：磨滅のため調整は判然としないがヨコナデか？	内・外面：濃橙褐色 断面：暗黄褐色	口縁部1/6	外面赤彩
28図－41	土師器 赤彩高杯	**10.0**	13.6	**8.5**	やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を含む）	やや良好	杯部：磨滅のため調整不明 脚部外面：５条/cmのタテハケ後、部分的にユビオサエ 脚部内面：ユビオサエ	内面：淡茶褐色 外面：橙褐色 断面：灰褐色	2/3	脚部内面以外は赤彩
28図－42	土師器 椀	**4.8**	10.3		粗（３㎜以下の石英・長石などを多量に含む）	やや良好	底部：７条/cmのハケ調整 内面：ナデ？磨滅のため不明	全面：橙褐色	1/5	
28図－43	土師器 赤彩椀	**4.8**	13.7		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 外面：７条/cmのピッチの小さいハケ調整 内面：ハケ調整後、ナデ？	全面：淡褐色	1/4	全面赤彩
28図－44	土師器 鉢	推定 6.5	**8.4**		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	外面：磨滅のため調整不明 内面：強いユビナデ調整	全面：白褐色	4/5	器壁は薄い
28図－45	土師器 手捏ね土器	**3.6**	**5.3**		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	全面：ユビナデ	全面：淡茶褐色	3/4	
28図－46	土師器 手捏ね土器	**4.3**	4.8		普通（２㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	全面：ユビナデ	内面：茶褐色 外面：黒褐色 断面：暗茶褐色	1/5	
28図－47	土師器 手捏ね土器	**2.4**	**3.0**		やや粗（２㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	全面：ユビナデ	内・外面：淡橙褐色	完形	
28図－48	土師器 土製支脚	**9.1**		推定 7.1～6.8	やや粗（２㎜以下の石英・長石を多く含む）	良好	全面：ナデ調整 底部は上底となる 体部には穿孔や突起はない	全面：淡褐色	1/2	

第46－1表　西Ⅰ遺跡A－2・3区　下段・下段斜面出土遺物観察表1（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器種	寸法（cm）			胎土	焼成	調整	色調	残存度	備考
		器高	口径	底径						
29図－1	須恵器 杯蓋A3a	残高 3.4	13.6		密（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	良好緻密	体部：回転ヨコナデ	内・外面：暗青灰色 断面：暗紫褐色	口縁部1/6	出雲3期 TK43
29図－2	須恵器 杯蓋A4	**4.1**	**13.3**		密（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	良好	天井部：ヘラ切り後、ナデ 天井部外縁：浅い回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：淡青灰色 外・断面：暗青灰色	4/5	出雲4期 TK209
29図－3	須恵器 杯蓋A4	**3.4**	**13.5**		普通（2㎜以下の石英・長石を含む）	良好	天井部：やや複雑な回転ヘラケズリ天井部中央はケズリ残す 口縁部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：淡褐灰色 外面：濃青灰色 断面：淡青灰色	2/3	出雲4期 TK209
29図－4	須恵器 杯蓋A6	残高 3.5	13.0		やや粗（1㎜以下の石英・長石をやや多く含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ	内・断面：淡灰色 外面：濃灰色	口縁部1/5	出雲4期 TK209
29図－5	須恵器 杯蓋A5	残高 3.6	13.8		密（1㎜以下の石英・長石を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 天井部：回転ヘラケズリ	内面：淡青灰色 外面：暗灰色 断面：淡灰色	口縁部1/8	出雲4期 TK209
29図－6	須恵器 杯蓋A5	残高 3.3	12.5		緻密（0.5㎜以下の長石等をわずかに含む）	良好緻密	体部：回転ヨコナデ 外面：自然釉が付着	内面：淡青灰色 外面：黒灰色 断面：暗紫褐色	口縁部1/6	出雲4期 TK209
29図－7	須恵器 杯蓋A3a	**4.9**	**13.7**		やや粗（2㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	天井部：回転ヘラケズリ 口縁部：回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・断面：淡褐灰色 外面：淡褐色	1/2	出雲3期 TK43
29図－8	須恵器 杯身A3	**3.8**	**11.4**		普通（1.5㎜以下の長石・石英をやや多く含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 底部：単位が大きく丁寧なヘラケズリ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：濃青灰色 断面：暗紫褐色	95%	出雲3期 TK43
29図－9	須恵器 杯身A3	**4.4**	10.8		やや密（1.5㎜以下の長石・石英をやや多く含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 底部外面：比較的丁寧な回転ヘラケズリ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：暗灰色 断面：褐白灰色	1/3	出雲3期 TK43
29図－10	須恵器 杯身	残高 3.7	11.7		密（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ	内面：淡紫灰色 外・断面：淡青灰色	1/6	
29図－11	須恵器 杯身A5	残高 3.3	11.4		普通（1.5㎜以下の長石・石英等をやや多く含む）	良好	体部：回転ヨコナデ	全面：明灰色	1/5	
29図－12	須恵器 杯身	推定 3.5	10.9		密（0.5㎜以下の長石・石英を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ後、比較的丁寧なナデ 底面内部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内面：淡褐灰色 外・断面：淡青灰色	1/4	
29図－13	須恵器杯身 A5	3.6	11.0		密（0.5㎜以下の長石等を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 底部外面：浅くて雑な回転ヘラケズリ	内・外面：淡青灰色 断面：淡灰色	1/6	出雲4期 TK209
29図－14	須恵器 低脚無蓋高杯A3	残高 2.8			密（1㎜以下の長石・石英を含む）	やや不良	口縁部：回転ヨコナデ 杯部下位：回転ヘラケズリ 脚部の接合付近：回転ヨコナデ 杯部内面底部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 透孔は縦長三角形で3方向に開口	全面：灰白色	杯底部のみ	出雲3期 TK43
29図－15	須恵器 低脚無蓋高杯A4	残高 4.0			密（1㎜以下の長石・石英等を含む）	やや不良	杯部内面底部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 脚部内外面：回転ヨコナデ 透孔：縦長三角形2方向開口	全面：淡灰色	軸部のみ	出雲4期 TK209
29図－16	須恵器 甕A7	残高 2.8	13.5		密（0.5㎜以下の黒色粒・長石をわずかに含む）	不良	口縁部：回転ヨコナデ	内・外面：淡褐灰色 断面：淡茶褐色	口縁部1/5	出雲5期 TK217
29図－17	須恵器 甕	残高 2.1	13.9		緻密（0.5㎜以下の長石等を含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 口縁端部は上方に肥厚	全面：暗褐灰色	口縁部1/5	
29図－18	土師器 単純口縁甕	残高 8.4	21.0		普通（2㎜以下の石英・長石・赤色粒を含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 肩部外面：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：濃橙褐色 外面：淡赤褐色 断面：暗黄褐色	上半部1/2	
29図－19	土師器 単純口縁甕	残高 6.9	22.6		やや粗（2㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・外面：濃橙褐色 断面：暗黄褐色	口縁部1/3	
29図－20	土師器 単純口縁甕	残高 7.1	13.0		やや粗（2㎜以下の石英・長石・黒色粒を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：磨滅のため調整不明 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡茶褐色	口縁部1/3	
29図－21	土師器 単純口縁甕	残高 3.8	15.6		やや粗（2㎜以下の石英・長石を多く含む）	やや良好	口縁部：ヨコナデ 肩部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡褐色	口縁部1/4	器壁は薄い
29図－22	土師器 単純口縁甕	残高 6.7	**19.0**		やや密（1.5㎜以下の石英・長石・雲母を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 肩部：4条/cmのタテハケ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：茶褐色	口縁部1/2	
29図－23	土師器 単純口縁甕	残高 16.3	**14.3**		普通（1.5㎜以下の長石・石英・金雲母等を含む）	良好	口縁部：内湾し端部は丸い ヨコナデ胴部：6条/cmの斜行ハケ調整 肩部：6条/cmのヨコハケ調整 胴部内面：斜め上方向へのヘラケズリ	全面：淡橙褐色	上半部1/2	
29図－24	土師器 赤彩椀	**4.8**	13.5		普通（1.5㎜以下の石英・長石・金雲母を含む）	やや良好	口縁部：細く収める 口縁部内面：ヨコナデ 内面：丁寧に仕上げられている 胴部：ユビナデ調整のため若干表面に凹凸がある	内・外面：橙褐色 断面：淡黄褐色	1/2	全面赤彩

第46－2表　西Ⅰ遺跡A－2・3区　下段・下段斜面出土遺物観察表2（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器種	寸法（cm）			胎土	焼成	調整	色調	残存度	備考
		器高	口径	底径						
29図－25	土師器 赤彩高杯	残高 4.5	13.6		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	口縁部：ヨコナデにより細く仕上げる 杯部外面：6条/cmのタテハケ 内面中～下位：ナデ	内面：橙褐色 外面：淡茶褐色 断面：灰褐色	杯部1/3	全面赤彩
29図－26	土師器 赤彩高杯	残高 3.3		**10.1**	普通（2㎜以下の長石・石英・雲母等を含む）	普通	脚部外面：5条/cmのタテハケ 脚端部：ヨコナデ 脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ後、粗いハケ調整	内面：暗褐色 外面：暗橙褐色 断面：暗灰褐色	脚部5/6	脚部外面赤彩
29図－27	土師器 赤彩高杯	残高 6.5		10.5	普通（1.5㎜以下の石英・長石・金雲母等を含む）	普通	脚部外面：6条/cmのタテハケ部分的にタテ方向ケズリ下げ 脚部内面：ヨコ方向のヘラケズリ 脚端部：ヨコナデ	内・断面：灰褐色 外面：橙褐色	脚部1/2	脚部外面赤彩
29図－28	土師器 高杯	残高 6.5		**10.2**	やや粗（1.5㎜以下の石英・長石をやや多く含む）	普通	脚部外面：ヨコナデ 脚部内面：ヘラ状工具で粗いケズリを施した後、ユビナデ	全面：淡橙褐色 外面の一部に黒斑	脚部2/3	
29図－29	土師器 鉢	残高 5.5	15.7		やや粗（1.5㎜以下の石英・長石等を多く含む）	普通	口縁部・体部：やや雑なナデ 調整内面：ヘラケズリ？	内面：淡橙褐色 外面：淡茶褐色 断面：淡黄褐色	上半部1/6	
29図－30	土師器 鉢	残高 6.2	20.5		普通（1.5㎜以下の石英・長石・金雲母等を含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部外面：ナデ？磨滅のため詳細不明 内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内面：淡赤褐色 外・断面：淡茶褐色	上半部1/4	

第47表　西Ⅰ遺跡A－2・3区　下段・下段斜面出土石器観察表

挿図番号	器種	寸法（cm）			石材	重量（g）	特徴	残存度	備考
		現長	巾	最大厚					
30図－1	平基無茎石鏃	**2.75**	**1.55**	**0.355**	安山岩	1.36	表裏ともに一次剥離面を残す	先端欠損	
30図－2	平基三角形石鏃	**2**	**1.75**	**0.33**	安山岩	1.69	表裏ともに一時剥離面を大きく残し浅い調整	完形	

第48表　西Ⅰ遺跡A－2・3区　下段・下段斜面出土鉄製品観察表

挿図番号	器種	寸法（cm）			特徴	残存度	備考
		現長	巾	最大厚			
30図－3	不明鉄製品	5.2	4.7	0.6	刃部をもたず端部は面をもっている		

第49表　西Ⅰ遺跡A－2・3区　下段・下段斜面出土鉄滓観察表

挿図番号	器種	寸法（cm）			特徴	残存度	備考
		現長	巾	最大高			
30図－4	羽口	4.8	2.9	3.6	羽口先端の下部に付着した滓状	羽口下端部	
30図－5	椀形滓	6.3	6.7	1.8	メタル度　なし		

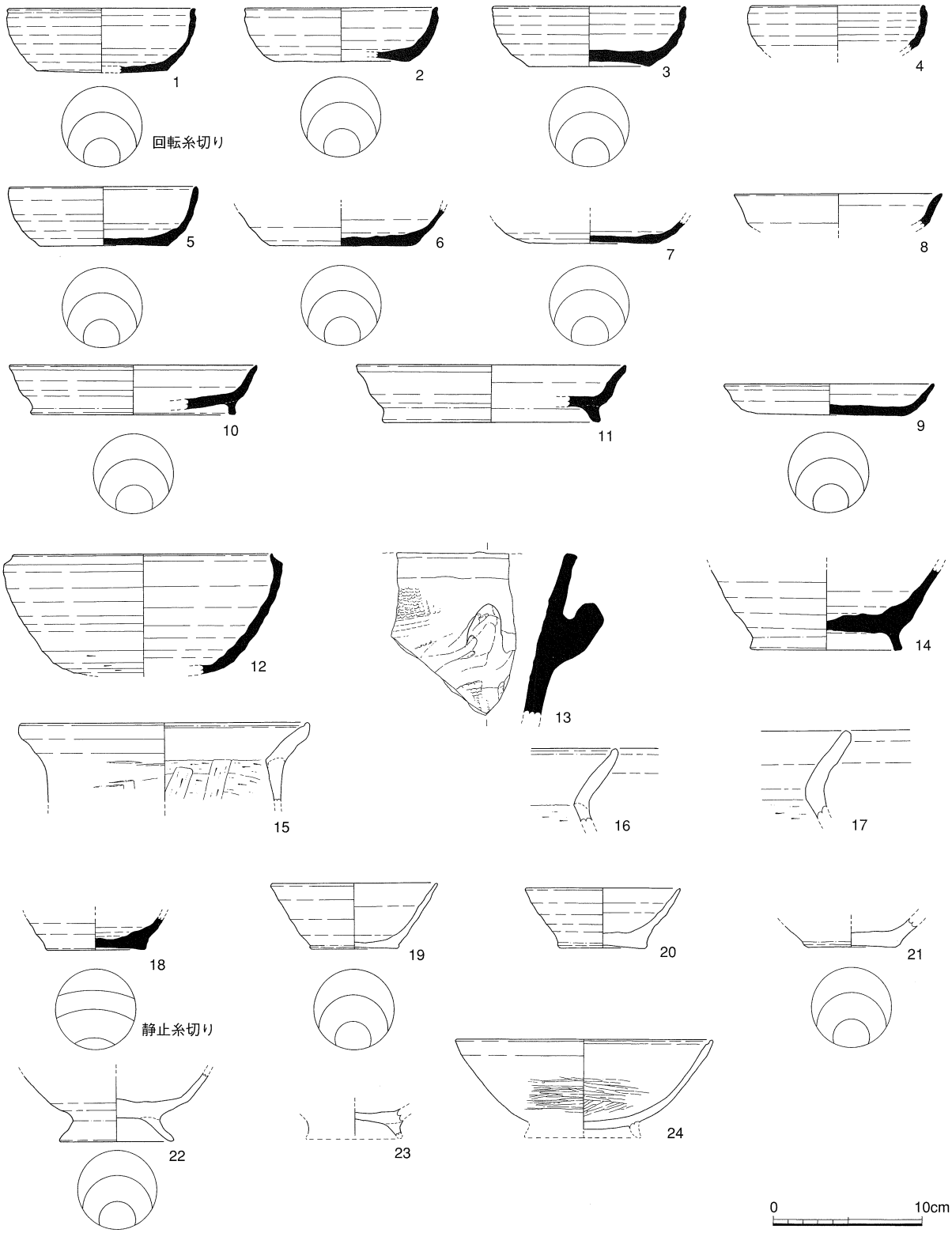
第50表　西Ⅰ遺跡A－2・3区　下段・下段斜面出土石製品観察表

挿図番号	器種	寸法（cm）			石材	重量（g）	特徴	色調	残存度	備考
		現長	最大幅	最小幅						
31図－1	砥石	12.2	6.9	3.4	凝灰岩	437	6面のうち4面は顕著に使用される	白褐色	完形	

第51表　西Ⅰ遺跡A区　包含層出土遺物構成表

〔　〕は頸部のみ残存の個体数

	A－1 上段	A－1 中段	A－1 下段	A－1 下段斜面	A－2 上段	A－2 中段	A－2 下段	A－2 下段斜面	A－3 上段	A－3 中段	A－3 下段	A－3 下段斜面
須恵器・杯身			17	23			11	9		4	2	1
須恵器・杯蓋			20	19		3	17	14		4		2
須恵器・高杯			4	13			4	4				1
須恵器・大甕	1			13		2	1					1
須恵器・提瓶												1
須恵器・横瓶			2			1		2				
須恵器・甑		1		1			3	1				
須恵器・直口壺	1		5	2		2					1	
須恵器・長頸壺			1									
土師器・甕			66〔84〕	106〔161〕		18〔33〕	35〔23〕	37〔43〕		4〔2〕	2	9〔7〕
土師器・赤彩甕				3			1					
土師器・椀			2	4			1					
土師器・赤彩椀			3	2			2	4				
土師器・高杯	1	1	9	11			2	3			1	2
土師器・赤彩高杯			7	2		3	3	4				
土師器・甑			13	10		4	4	3		2		
土師器・手捏ね土器			4			2						
土師器・鉢		1	5	2			2	4				
土製支脚			1									
土師器・台付土器					1	6						
赤彩台付土器			1									
鉄滓				1				1				
鉄製品			2	2		1						1
石鏃				1	1			1				
スクレイパー								1				
砥石				1								
剥片		1					1					

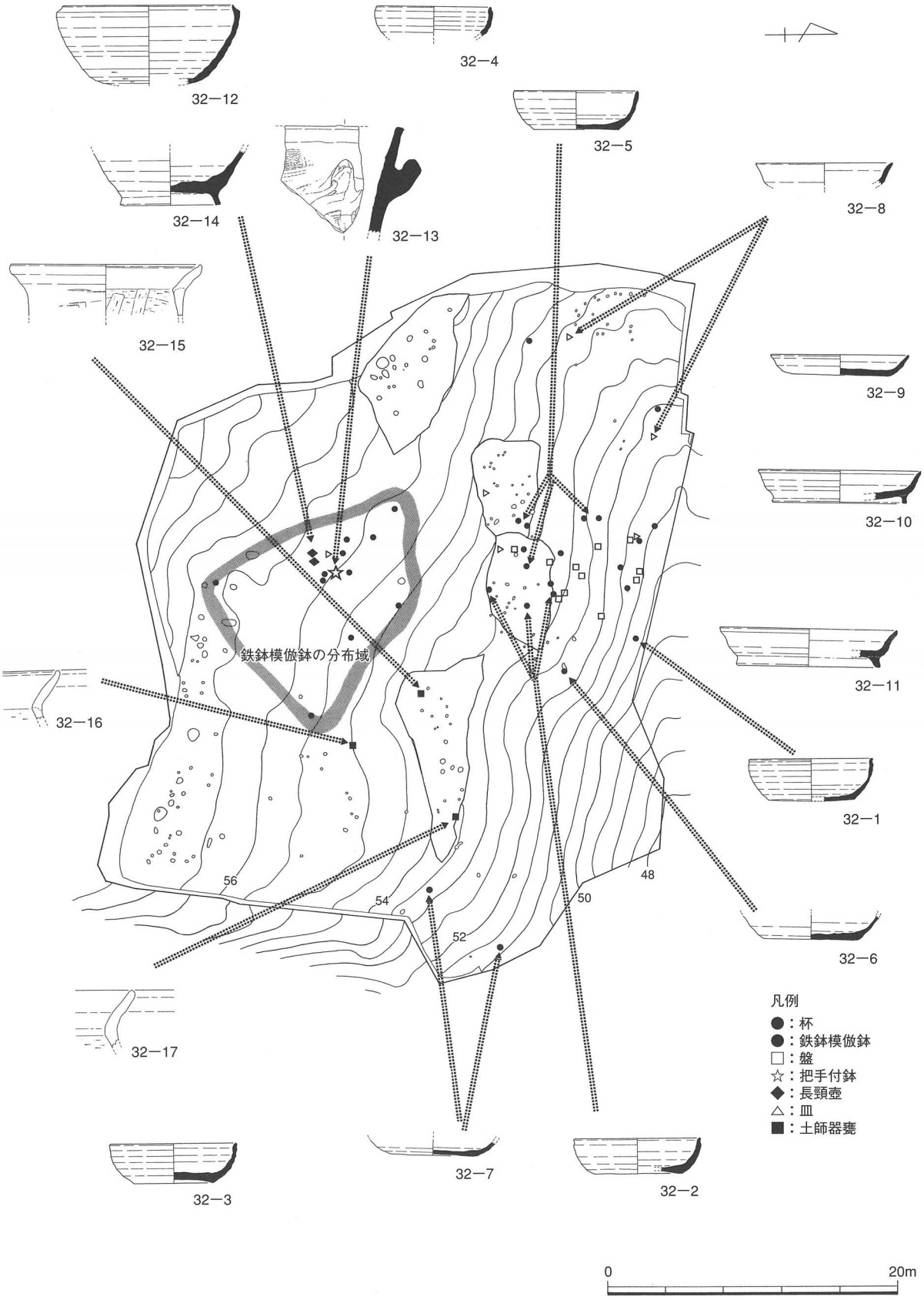


第32図　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良・平安時代遺物実測図（S=1/4）

奈良・平安時代の遺物

Ａ区包含層中からは８世紀後半～11世紀前半の須恵器・土師器・黒色土器などが出土している。８世紀の遺物は遺構に伴わないがＡ－２区中段～下段斜面にかけて分布している。杯身・盤・皿・把手付鉢・鉄鉢模倣鉢・土師器甕など多様な器種構成を示す。

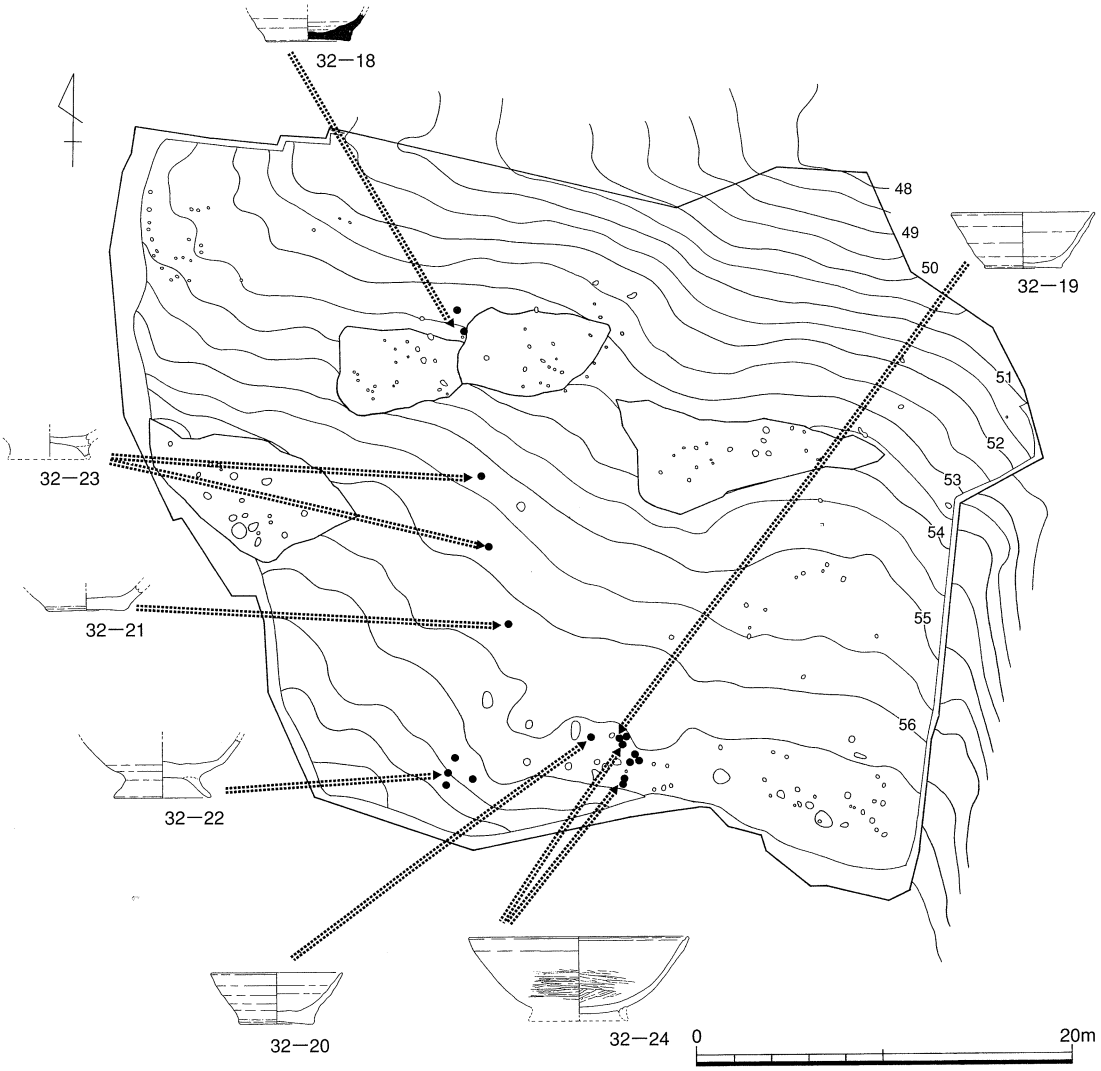
９世紀以降の遺物はＡ－２区上段包含層を中心に出土しており、須恵器杯身・土師器杯身・土



第33図　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良時代の遺物分布状況図（S＝1/400・土器1/6）

第52表　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良・平安時代の遺物観察表（太字数字は確定値：明朝体数字は復元値）

挿図番号	器　種	寸法（cm）			胎　　土	焼　成	調　　整	色　　調	残存度	備　考
		器高	口径	底径						
32図－1	須恵器 杯身	4.3	12.3		密（0.5㎜以下の長石等を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ口縁端部を外側にひねり出す	内面：暗褐灰色 外・断面：暗灰色	1/5	
32図－2	須恵器 杯身	3.6	12.7	8.9	密（1.5㎜以下の長石を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 外面：口縁端部を外側にひねる 底部外面：回転糸切り	内・外面：黒褐色 断・外底面：暗灰色	1/4	重ね焼き痕あり
32図－3	須恵器 杯身	**4.1**	12.7	8	密（0.5cm以下の長石、黒色粒を含む）	やや良好	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ	内・外面：褐灰色 断面：濃灰色	3/4	外面中位に重ね焼き痕
32図－4	須恵器 杯身	残高 3.1	11.4		緻密（0.5㎜以下の長石・石英をわずかに含む）	やや良好	口縁部：回転ヨコナデ。口縁端部は外側にひねる	内面：濃青灰色 外面：暗灰褐色 断面：濃灰色	口縁部1/5	
32図－5	須恵器 杯身	4.0	12.4	8.5	密（1㎜以下の長石等を含む）	良好	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 口縁端部は丸くおさめる	内面：淡紫灰色 外面：褐灰色～淡紫灰色 断面：濃灰色	1/5	外面に重ね焼き痕
32図－6	須恵器 杯身	残高 2.6		9.5	密（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	普通	体部：回転ヨコナデ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 底部外面：回転糸切り	内・断面：淡褐灰色 外面：淡灰色	1/3	
32図－7	須恵器 杯身	残高 1.6		8.2	緻密（0.5㎜以下の長石・石英等をわずかに含む）		体部：回転ヨコナデ 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 底部外面：回転糸切り	内面：褐灰色 外面：濃灰色 断面：淡青灰色	底部1/3	
32図－8	須恵器 皿	残高 2.3	14.8		密（1㎜以下の石英・長石を含む）	やや良好	口縁部：回転ヨコナデ	内・外面：褐灰色 断面：淡青灰色	口縁部1/6	
32図－9	須恵器 皿	2.1	13.9	9.8	密（1.5㎜以下の石英・長石等を含む）	普通	口縁部：回転ヨコナデ 内面底部：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 底部：回転糸切り	内面：暗褐灰色 外面：淡青灰色 断面：暗緑灰色	1/3	
32図－10	須恵器 高台付盤	**3.4**	16.4	13.4	やや密（1㎜以下の長石等を含む）	普通	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転糸切り 底部内面：回転ヨコナデ後、不定方向ナデ 口縁端部は細く、鋭く仕上げる	内面：暗青灰色 外・断面：暗褐灰色	1/2	内面に径11.6cmの重ね焼き痕
32図－11	須恵器 高台付盤	3.9	17.8	14.3	密（0.5㎜以下の長石等を含む）	やや不良	体部：回転ヨコナデ 口縁端部外面に面を持つ	全面：淡茶褐色	1/3	
32図－12	須恵器 鉢鉢型鉢	推定 8.4	17.2	18.5	密（1㎜以下の石英・長石を含む）	やや不良	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転ヘラケズリ 口縁端部は内側に細くつまみ出す	内・断面：淡灰色 外面：濃灰色	1/3	
32図－13	須恵器 把手付大型鉢	残高 10.9			密（1.5㎜以下の長石を含む）	良好	外面：格子目状タタキ 内面：同心円押さえ具痕	内・断面：淡灰色 外面：暗灰色	口縁部の一部	
32図－14	須恵器 高台付長頸壺	残高 5.6		9.2	普通（1㎜以下の長石・石英を含む）	良好	内・外面：回転ヨコナデ 底部外面：糸切り後ナデ	内・断面：淡青灰色 外面：暗灰色	底部のみ	
32図－15	土師器 単純口縁甕	残高 5.3		19.0	やや粗（2㎜以下の長石・石英・赤色粒を多く含む）	良好	口縁部：回転ヨコナデ 外面：タテ方向のイタナデ 胴部内面：ヘラケズリ	全面：暗橙褐色	口縁部1/8	口縁端部内面に凹面をもつ
32図－16	土師器 単純口縁甕	残高 5.0			やや粗（2㎜以下の長石・石英を多く含む）	普通	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	全面：淡橙褐色	口縁部1/4	口縁端部は内側に肥厚
32図－17	土師器 単純口縁甕	残高 5.9			やや粗（3㎜以下の長石・石英を多く含む）	良好	口縁部：ヨコナデ 胴部内面：ヨコ方向のヘラケズリ	内・断面：淡橙褐色 外面：濃橙褐色	口縁部1/12	
32図－18	須恵器 杯身	残高 2.2		6.4	密（1.5㎜以下の石英・長石を含む）	良好	内・外面：回転ヨコナデ 底部：静止糸切り	内・断面：濃灰色 外面：暗褐灰色	底部のみ	
32図－19	土師器 杯	4.4	11.0	5.7	密（0.5㎜以下の赤色粒・黒色粒をわずかに含む）	普通	体部：回転ヨコナデ 外面：回転糸切り	全面：淡橙褐色	1/3	
32図－20	土師器 杯	**4.1**	10.2	5.7	密（0.5㎜以下の石英・赤色粒をわずかに含む）	普通	体部：回転ヨコナデ 底部外面：磨滅のため判然としないが糸切りか？	内・断面：暗茶褐色 外面：淡橙褐色	1/2	
32図－21	土師器 杯	残高 1.9		5.8	密（0.5㎜以下の雲母・赤色粒を含む）	普通	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転糸切り	全面：橙褐色	底部1/4	
32図－22	土師器 高台付椀	残高 4.6		7.3	密（0.5㎜以下の金雲母・赤色粒を含む）	普通	体部：回転ヨコナデ 底部外面：回転糸切り後、高台接合のためヨコナデ	全面：橙褐色	1/5	
32図－23	土師器 高台付椀	残高 1.9		推定 6.3	密（1㎜以下の石英・長石・雲母・黒色粒を含む）	普通	全面：回転ヨコナデ	内・外面：橙褐色 断面：淡黄褐色	底部1/2	
32図－24	黒色土器 杯	残高 3.6	17.0		やや粗（1㎜以下の石英・長石・赤色粒・雲母を含む）	普通	外面：単位の細かなヨコ方向ヘラミガキ 内面：炭素吸着の後、丁寧なヘラミガキ	内面：黒灰色 外面：明橙褐色 断面：淡褐色	1/5高台は欠損	口縁端部内面に段を設ける



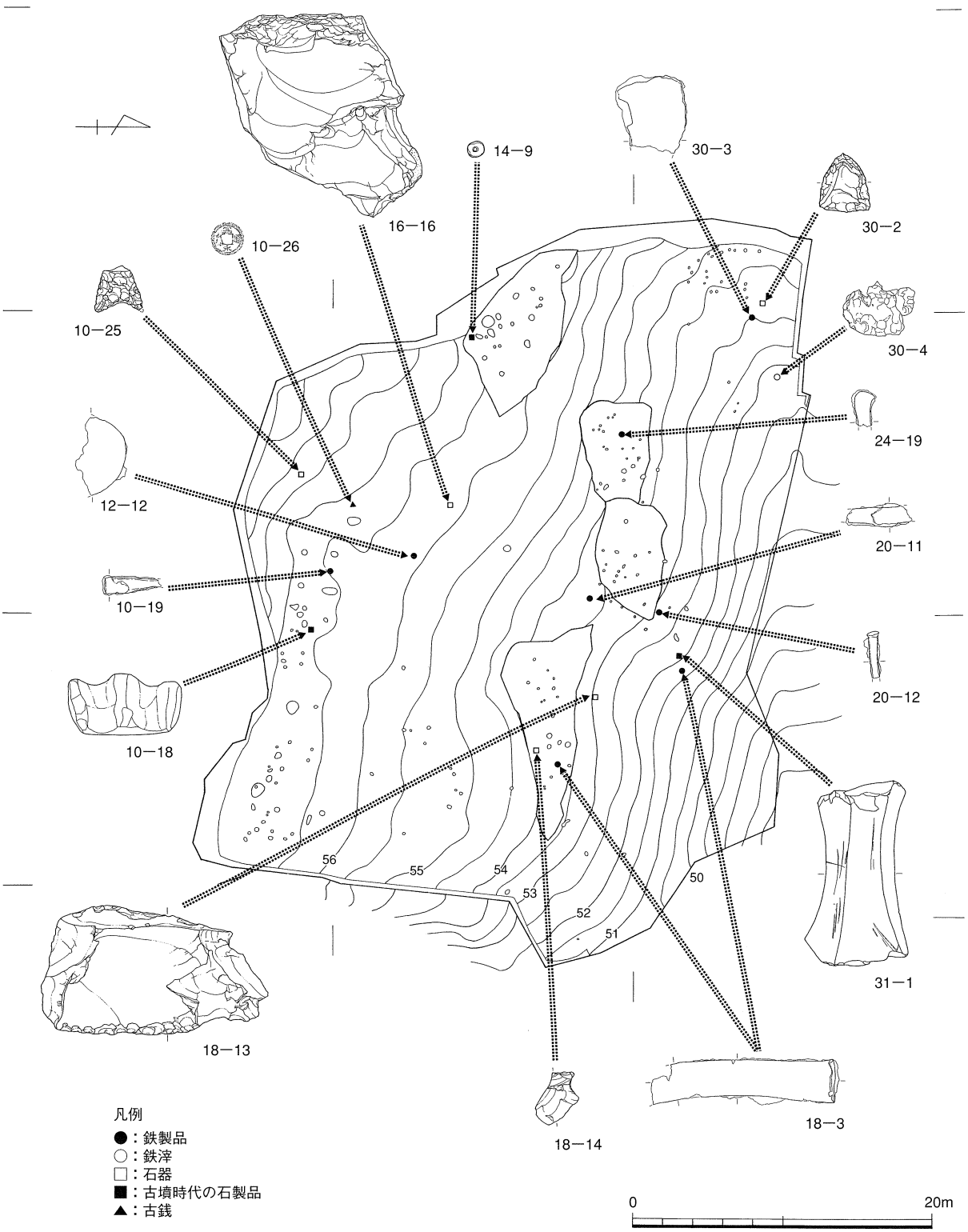
第34図　西Ⅰ遺跡Ａ区　平安時代の遺物分布状況図（S=1/400・土器1/6）

第53表　西Ⅰ遺跡Ａ区　奈良時代の遺物構成表

	A−1 上段	A−1 中段	A−1 下段	A−1 下段斜面	A−2 上段	A−2 中段	A−2 下段	A−2 下段斜面	A−3 上段	A−3 中段	A−3 下段	A−3 下段斜面
土師器甕				1			2		1		1	
須恵器杯身		1	7	4		2	2				1	
高台付盤			2			1						
鉄鉢模倣鉢						1						
高杯		1										
長頸壺				1		1						
把手付き大型鉢						1						

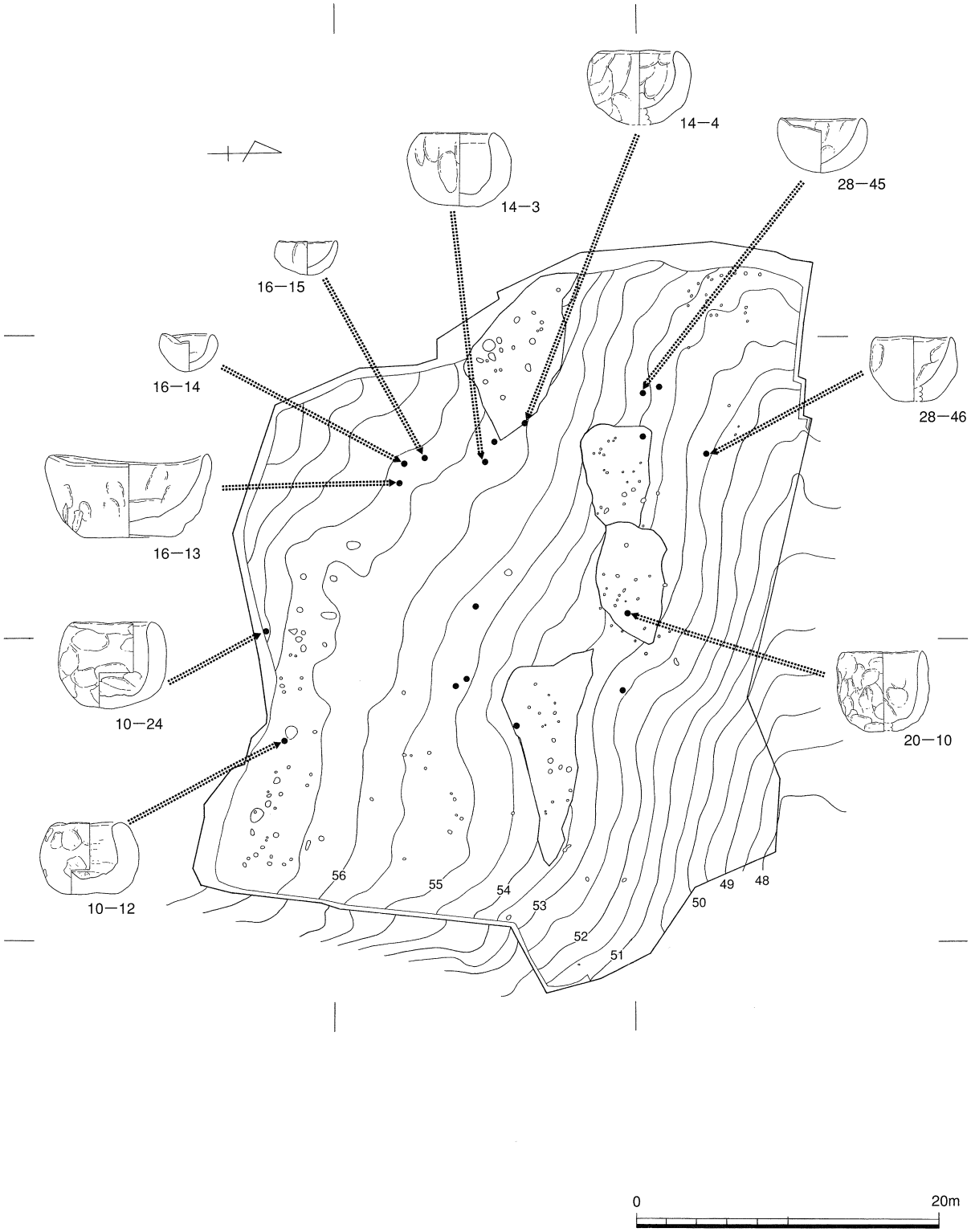
第54表　西Ⅰ遺跡Ａ区　平安時代の遺物構成表

	A−1 上段	A−1 中段	A−1 下段	A−1 下段斜面	A−2 上段	A−2 中段	A−2 下段	A−2 下段斜面	A−3 上段	A−3 中段	A−3 下段	A−3 下段斜面
須恵器杯身９C			3									
土師器杯身９C					2	2	1					
土師器杯身10・11C				1		2						
黒色土器					1							



第35図　西Ⅰ遺跡Ａ区　石製品・鉄製品分布状況図（S=1/400・石製品1/2・金属製品 砥石1/4）

師器椀・黒色土器椀など供膳具が主体となっている。約200年間にわたり、断続的に土器が使用されているが短期的にはごく少数の土器が利用されているにすぎない。遺構に伴わないことから性格は判然としない。



第36図　西Ⅰ遺跡Ａ区　手捏ね土器分布状況図（S=1/400・土器1/4）

手捏ね土器の出土状況

Ａ区内では17個体の手捏ね土器が出土している。出土状況は比較的散在しているが、中でも段状遺構２とその周辺では６個体が集中している。その他の段状遺構では１～２個体出土しており、各建物ごとに保有している状況が確認できた。

第３節　Ｂ区の概要

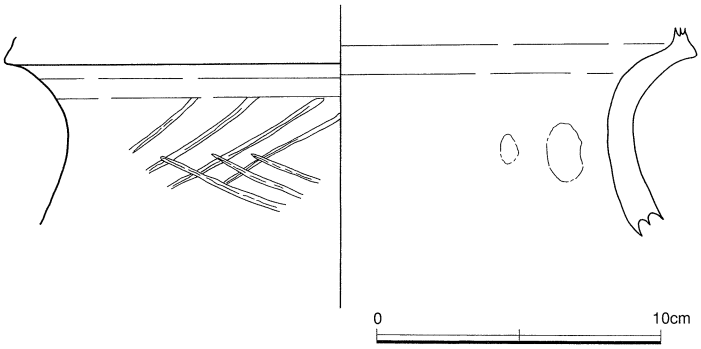
Ｂ区はＡ区より東側に一段落ちた谷に面する緩斜面に位置している。標高は51～53mであり、全体として擂り鉢状の地形を呈している。Ｂ区は本来、中央部分に谷が貫入しており、その谷が堆積によって埋没して平坦面が形成されている。よって、中央部分は黒色土が堆積し、保湿性が高く水気の多い土質である。

調査の結果、Ａ区から転落したと思われる須恵器・土師器の小片が出土したが、遺構は検出できなかった。水分が多く、軟質な土質のため、居住等に適さないためと考えられる。

第55表　西Ｉ遺跡Ｂ区　遺物構成表

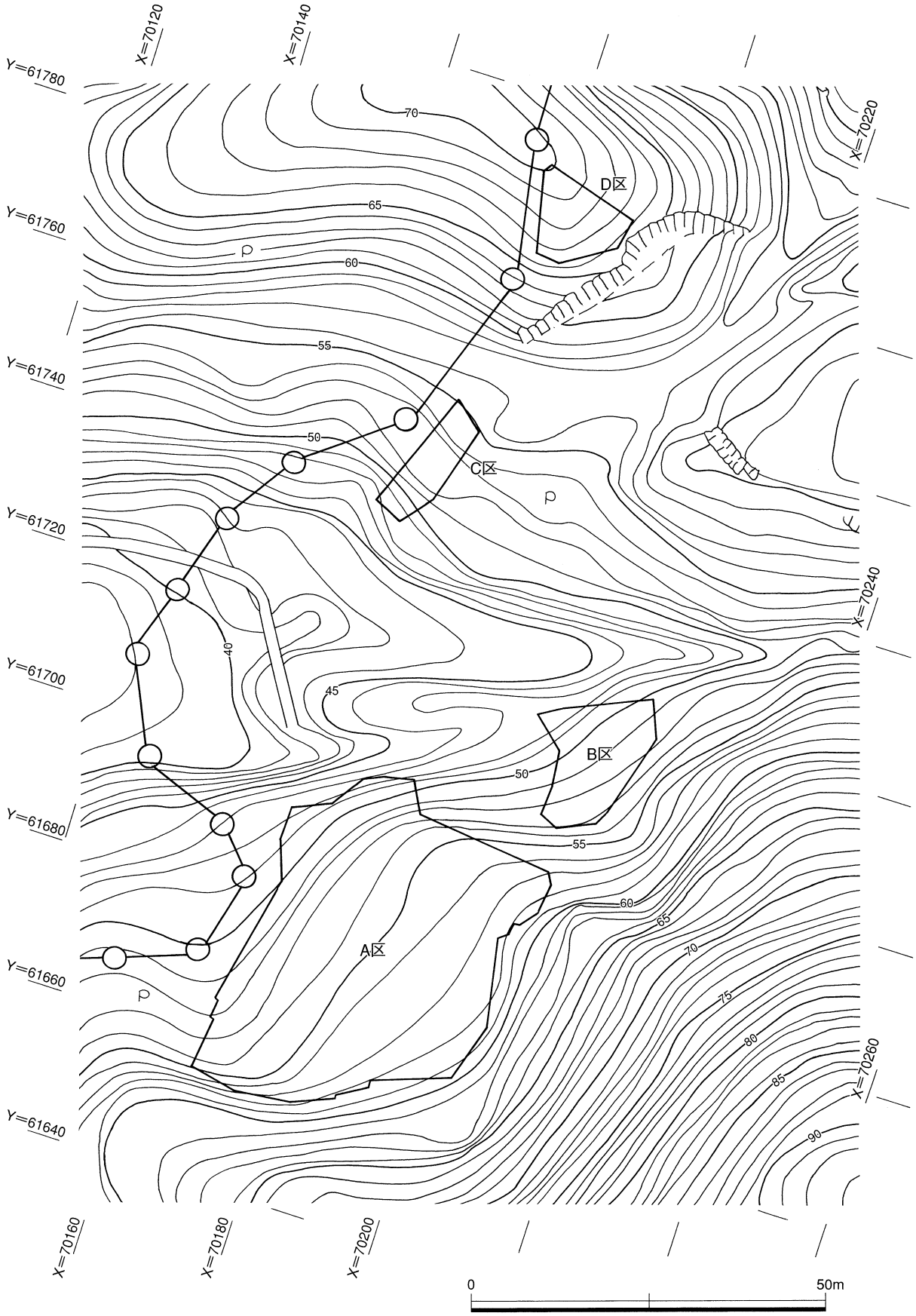
Ｂ－１区	須恵器・大甕	胴部破片 2		
	須恵器・杯蓋	口縁部1/8以下 1		
	土師器・甕	口縁部1/2以下 2	口縁部1/8以下 2	頸部1/8以下 2
	土師器・赤彩甕	頸部1/8以下 1		
Ｂ－２区	須恵器・大甕	胴部破片 1		
	須恵器・高杯	脚部 1		
	土師器・甕	口縁部1/8以下 2		
Ｂ－３区	須恵器・大甕	破片 1		

第４節　Ｃ区・Ｄ区の概要



第37図　西Ｉ遺跡Ｃ区　出土土師器実測図（S＝1/2）

この区域では、試掘の結果、土器片を含む暗灰色の遺物包含層が確認されたので、用地内で地形的に連続する斜面を西Ｉ遺跡Ｃ区・Ｄ区として本調査した。その結果、遺構は検出されなかったが、いずれの調査区からも土師器の破片が若干出土した。しかし、図化できたものは、Ｃ区から出土した古墳時代前期の壺形土器（第37図）のみであった。この壺形土器は、焼成良好で、色調は明黄褐色を呈する。胎土は密であり、１㎜程度の石英を含む。残存する頸部外面には無軸の羽状文を施し、内面には指頭圧痕を残す。遺存は頸部から口縁部にかけての半周のみであった。



第38図　西Ⅰ遺跡Ｃ区・Ｄ区　位置図（S＝1/800）

第5節　まとめ

西Ⅰ遺跡Ａ区では出雲３期～５期（TK43～TK217）の集落跡の一角を確認することができた。集落跡は標高48～59mのやや小高い斜面に所在し、斐川町内で現在判明しているものでは最も高所に所在する古墳時代後期の集落といえる。町内で同時期の集落遺跡としては杉沢Ⅰ遺跡などが確認されているが、調査例が少なく集落の実体については判然としない部分が多い。

西Ⅰ遺跡には竪穴建物は１棟も存在せず、削平段＋掘立柱建物という建築構成になっている。これは６世紀末前後に建築様式が竪穴建物から掘立柱建物に移行するという山陰地方の海岸平野部に特徴的な現象に反するものではない。しかし、調査区内での同時期の遺構は２～３基程度であり、調査区外の平坦面に遺構があると想定しても同時期の遺構は３～４基と見込まれ、小規模な集落であったことが想定される。集落の性格としては標高の低い場所に立地する母村から派生した分村・子村の可能性が考えられる。それに関連して、西Ⅰ遺跡の300m北方には石棺式石室を内部主体に持つ武部西古墳[6]が存在するが、西Ⅰ遺跡の集落存続時期とほぼ同時期の築造と思われ、西Ⅰ遺跡の集落構成員もその傘下におく小地域首長が葬られていた可能性がある。西Ⅰ遺跡の性格を考える上で看過できない古墳である。

また、鍛冶滓が３点余り出土しているが、鍛冶炉遺構は明確でなく、羽口、金床石、鍛造剥片なども出土していないため、この集落内での操業実体は定かではない。農具などの修理・再加工など小規模な副業的で小規模な操業が想定できる。

なお、集落の存続期間が土器の３型式程度の間に収まるため、遺物の様式関係を捉えるのに良い資料になると考えられる。煮沸具・手捏ね土器の出土状況は一定の傾向を持ち、集落内の土器保有について貴重な資料を提供したといえる。

集落としては７世紀初頭で廃絶するが、その後８世紀後半から11世紀までの須恵器・土師器・黒色土器などが遺構に伴わない形で散見される。集落としての体裁を成さず、墓域として使用されている痕跡も見いだせないことから、その性格は判然としない。

遺構の時期

遺構の造り替え状況や、出土遺物などから遺構の機能した時期を見ると以下の通りとなる。

時　期	出　雲　3　期		出　雲　4　期		出　雲　5　期	出　雲　6　期
遺構	段５古	段５新	段５新			
				段４		
	段３古	段３新				
		段２				
			段１	段１	段１	

須恵器杯蓋の個体数は、出雲３期22個体、出雲４期77個体、出雲５期４個体を数えており、この数値を素直に読むと、出雲３期に集落が成立し、出雲４期に隆盛を迎え、出雲５期に入る時期に衰退・廃絶したことが読みとれる。特定器種による年代観ではあるが、大枠はとらえているものと考えられる。

第56表　西Ⅰ遺跡Ａ区　出土須恵器杯蓋構成表

時　期	杯蓋型式	A1 中段	A2 中段	A3 中段	A1 下段	A2 下段	A1 下段斜面	A2 下段斜面	A3 下段斜面	段状遺構 1	段状遺構 2	段状遺構 3新	段状遺構 4	段状遺構 5床面	段状遺構 5覆土
出雲３期：TK43	A3a		1		2	3	3				1	1		2	
	A3b						2	6							
	A3c									1					1
出雲４期：TK209	A4	2	2	1	6	3	3	4		4			2	1	4
	A5	2		2	10	6	4	3	1	4			1	1	4
	A6			1	1	2	2								1
出雲５期：TK217	A7	1				1	1			1					
	不明					1	1		1	1			1		

三輪玉について

西Ⅰ遺跡では段状遺構１・掘立柱建物跡１から水晶製三輪玉が１点出土している。県内では他に４遺跡で10個体が出土している。玉作遺跡である玉湯町平床Ⅱ遺跡[3]・堂床遺跡[4]で３個体出土しているほか、東出雲町島田池１区２号横穴墓[2]で５個体、同２号墳から１個体、松江市福富Ⅰ遺跡[5]では古墳の副葬品と思われるものが１個体出土している。なお、６世紀前半の築造とされる浜田市めんぐろ古墳[7]では金銅製三輪玉１個体が、６世紀中葉の築造の鳥取県淀江町長者ヶ平古墳[8]では金銅製三輪玉３個体が見つかっており、６世紀前半の築造と考えられる平田市の上島古墳[9]からは倭風大刀の護拳帯に取り付けられたと考えられる方形飾り金具が見つかっている。

本来、三輪玉は５世紀後半から倭風大刀の系譜上にある楔形柄頭大刀・玉纏大刀などの柄飾りとして金銅製で製作されていたものを、水晶・石英などに置き換えたものであり、金銅製品に比較して、細部の加工が簡略化され退化していることは否めない。金銅製三輪玉を使用した楔形柄頭大刀は、大阪府峰ヶ塚古墳、奈良県藤ノ木古墳出土例や伊勢神宮古神宝などの例から装飾大刀の中でも格付けが高いとされるが[10]、水晶製三輪玉は金銅製三輪玉のコピーであり、その産地を近隣に控え、供給を受ける機会の多い出雲地域では必ずしも高い格付けの大刀とはいえないのではなかろうか。また、地域首長は畿内などから最新式の龍鳳系環頭大刀や大陸系の大刀を下賜されているが[9・11]、首長層より下位に属する横穴墓埋葬者層などにはその影響が及びきらず、倭風大刀の保有が継続していたものと考えられる[12]。

島田池遺跡出土品は倭風楔形柄頭大刀としては末期に属すると考えられ、西Ⅰ遺跡出土品も同時期のものである。この集落に楔形柄頭大刀を保持するような人物が居住した可能性もあるが、水晶製三輪玉１個体という出土状況のため性急な結論づけは見送りたい。

第57表　島根県内出土三輪玉一覧

遺跡名	所　在　地	時　期	出土場所（遺構、層位）	寸法（全長×厚さ：mm）	材質	共伴した祭祀系遺物	備考
西Ⅰ遺跡	斐川町三絡	出雲４～５期	掘立柱建物２	37.6×19.55	水晶	手捏ね土器	本書
島田池遺跡	東出雲町揖屋	出雲４期	２号墳頂	42.1×23.1	水晶		文献（２）
			１区２号横穴墓	34.5×17.1	水晶	大刀 玄室内反対側に勾玉・管玉・丸玉・切子玉・小玉	
			１区２号横穴墓	34.6×16.5	水晶		
			１区２号横穴墓	41.6×18.4	水晶		
			１区２号横穴墓	35.4×16.7	水晶		
			１区２号横穴墓	32.5×18.4	水晶		
平床Ⅱ遺跡	玉湯町平床	古墳後期	Ⅲ区遺構外	(28)×(22)	石英	勾玉・平玉・臼玉・丸玉・小玉未製品	文献（３）
					石英		
堂床遺跡	玉湯町林村	出雲３期	SB06（玉作工房）	34×15	水晶	勾玉・管玉・丸玉・切子玉・臼玉未製品	文献（４）
福富Ⅰ遺跡	松江市乃木福富町	古墳後期	６区遺構外（古墳？）	45×27	水晶		文献（５）
めんぐろ古墳	浜田市治和	６世紀中頃	石室内	35～40×３	金銅	鏡・切子玉・鈴釧	文献（７）

鉄製鎌について

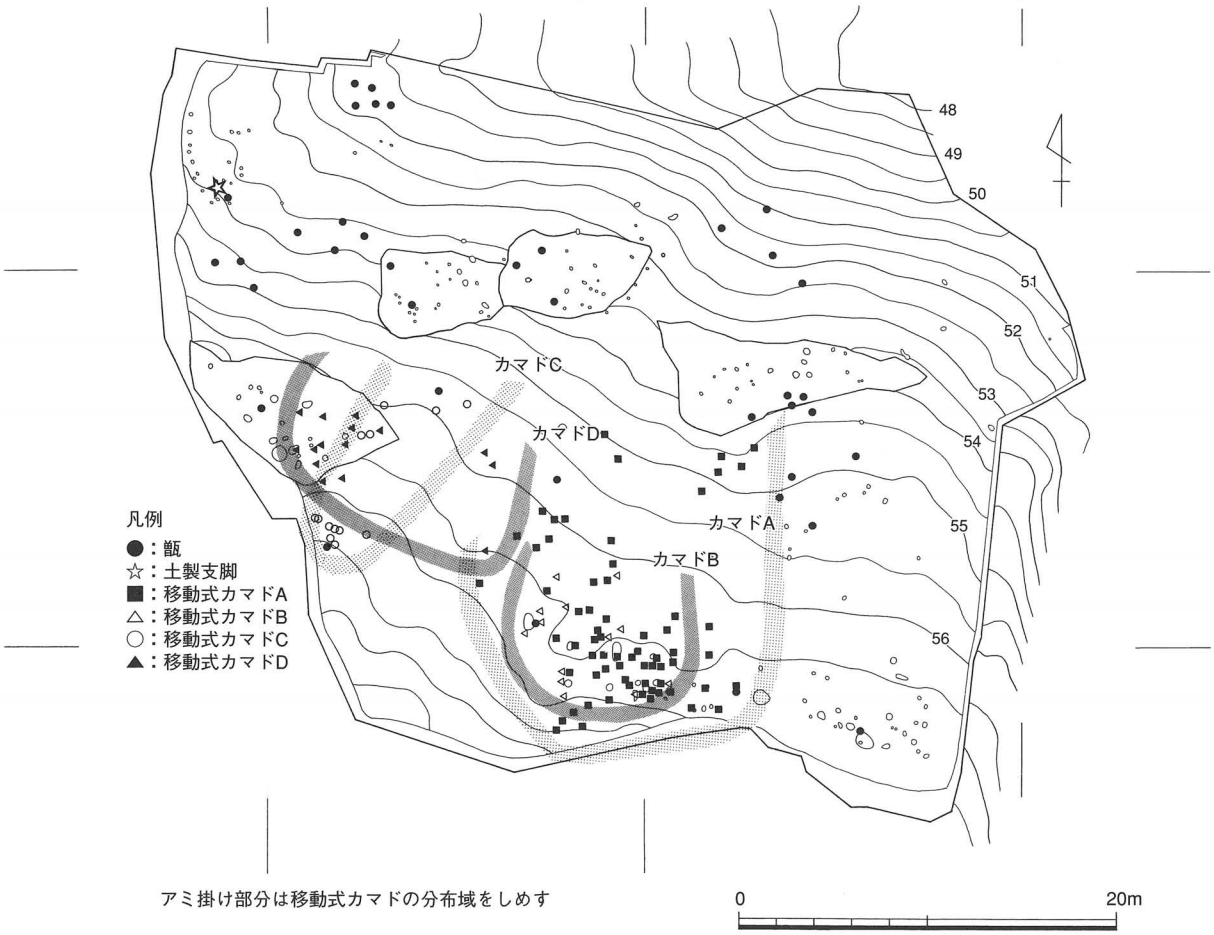
段状遺構３古段階の遺構面からは中型の曲刃鎌が出土している。島根県内では約40例出土しているとされ[13]、約半数は古墳時代後期に属することが明らかにされている。

煮沸具類の分布状況

煮沸具類のうち、移動式竈・甑・土製支脚の分布状況について表示したものが、第39図である。

このうち、移動式竈は破片の胎土・色調・調整・厚さなどを手掛かりに分類作業を進めると５～６個体に絞り込めることが確認できた。そして、下段・下段斜面に転落している破片は個体の口縁部や焚口部など上半部が細片化したものが大半なのに対して、上段で確認される破片は大きな基底部片が卓越している状況が看取された。このような破片の散布状況から移動式竈は段状遺構１・掘立柱建物１付近に２個体、段状遺構２及びその南隣に３個体が存在したことが推察され、段状遺構３・４・５では遺構の利用が中止された時点で移動式竈は存在しなかったと考えられる。この現象が段状遺構１・２と段状遺構３・４・５の性格差を反映しているのか、にわかに判じがたい。しかし、段状遺構１・２では明確な掘立柱建物が存在し、それに対して段状遺構３・４・５では明確な掘立柱建物が確認できない点など、遺構の性格差は明らかである。

煮沸具類のうち移動式竈が一定量存在するのに対して、土製支脚は１点と少ない。出雲地域の平野部では６世紀末～７世紀初頭に移動式竈・土製支脚・甑・甕が煮沸具の４点セットとなる[14]が、



第39図　西Ⅰ遺跡Ａ区　煮沸具類分布状況図（S＝1/400）

それ以前に系譜が遡れない土製支脚についてはその出現時期や系譜が注目される。移動式竈は5世紀後半から6世紀の間は数例の出土例が確認されている[15]が、土製支脚に先行して煮沸具セットに定着するのか、斐川南部の地域性として土製支脚の定着が他地域より若干遅れるのか興味深い。

以上のように、西Ⅰ遺跡は斐川町内では調査例の少ない古墳時代後期の集落跡であることが確認された。調査例が多く資料の蓄積されている近隣の旧神門郡・旧意宇郡域などの同時期の集落遺跡との比較検討が課題となるが、現状では旧出雲郡域での集落調査例が少なく、西Ⅰ遺跡が一般的な集落例だという実証も困難なため、しばらく類例の増加を待って検討されるべきと考えている。検討課題としては以下のことが考えられる。

①集落の構造（建物の配置・規模・棟数など・竪穴建物から掘立柱建物への移行形態とその時期）
②一家族の保有する建物構成（一家族単位の建物所有数）
③土器様式の変遷（須恵器・土師器を含めた様式変遷）
④土器様式の地域差（大井窯産須恵器の流通と他窯との関係・土師器の地域差）
⑤移動式竈・土製支脚・甑などの導入時期
⑥集落内祭祀の実体（玉類・手捏ね土器・赤塗土器などの出土状況）
⑦集落とその墓域の関係
⑧鍛冶操業など集落内での手工業生産の実体
⑨耕作地とその形態の把握

参考文献

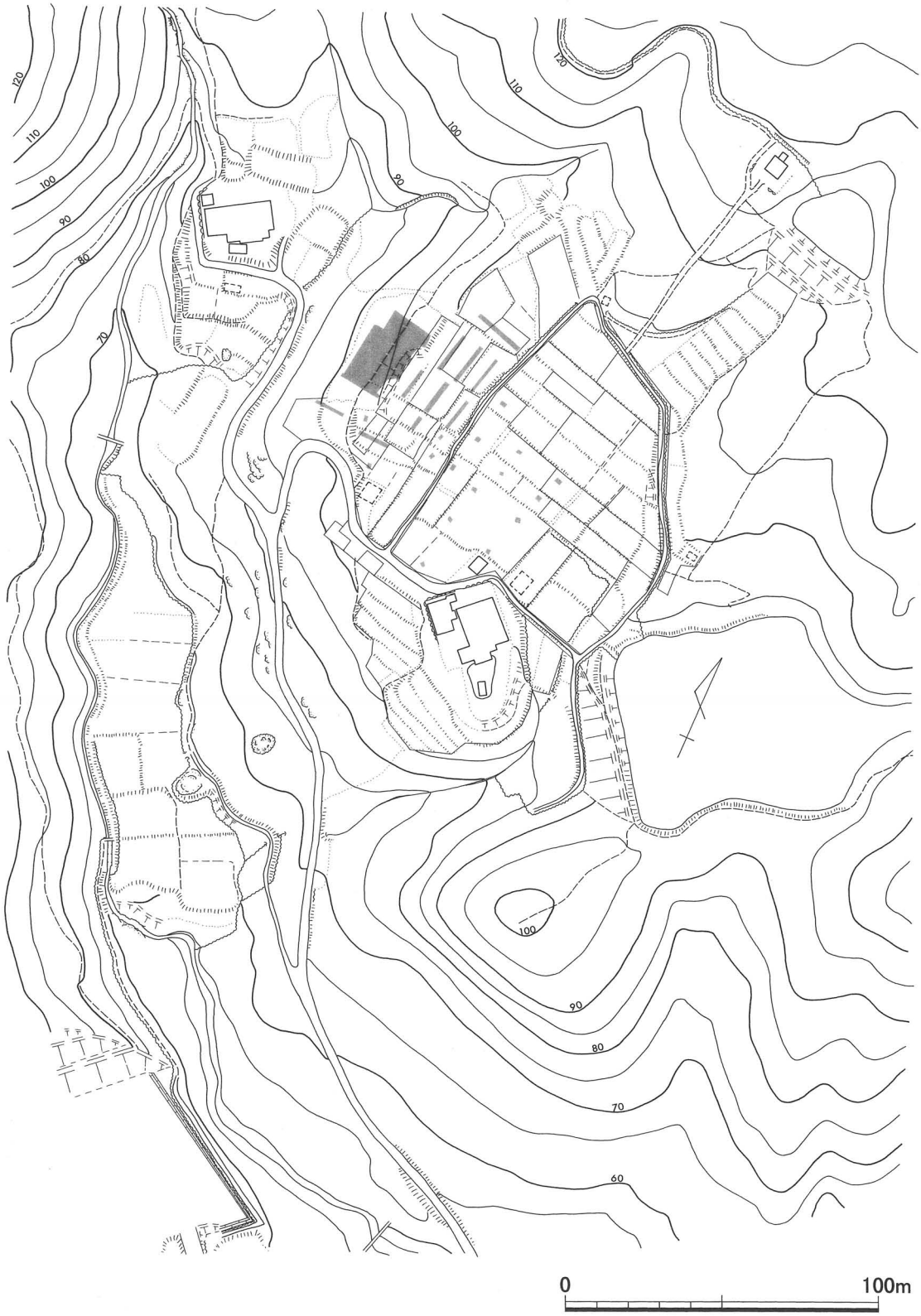
（1）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会　1994
（2）原田敏照・中川　寧『島田池遺跡・鷭貫遺跡』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1997
（3）宮本正保・林　健亮『岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡』日本道路公団中国支社・島根県教育委員会　2001
（4）是田　敦・橘　弘章『堂床遺跡』日本道路公団中国支社・島根県教育委員会　2001
（5）柳浦俊一『福富Ⅰ遺跡・屋形1号墳』島根県教育委員会　1997
（6）出雲考古学研究会『古代の出雲を考える6　石棺式石室の研究』1987
（7）山本　清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」『山陰古墳文化の研究』1971
（8）中原　斉・角田徳幸「鳥取県・長者ヶ平古墳の研究」『島根考古学会誌』第7集　島根考古学会　1990
（9）松尾充晶「第6章　装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター　2001
（10）白石太一郎「玉纏大刀考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　1993／小林義孝・有井宏子「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀」『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』第7号　1996／高島　徹「装飾付大刀を出土した古墳」『金の大刀と銀の大刀　－古墳・飛鳥の貴人と階層－』大阪府立近つ飛鳥博物館　1996／濱口和弘「推古朝前後に造られた双室墳－奈良県植山古墳－」『季刊考古学』第74号　雄山閣　2001
推古天皇（敏達天皇妃）とその子である竹田皇子の合葬墓と想定される橿原市植山古墳でも東石室（6世紀末）から、水晶製三輪玉が出土している。6世紀末以降は大王家や畿内の有力氏族でも水晶製三輪玉を使用した可能性がある。
（11）大谷晃二「出雲の地域政権と大和政権　－金銀装大刀にみる出雲の東西－」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター　1999
（12）松尾充晶（島根県埋蔵文化財調査センター）の教示による。
（13）林　健亮「第5章第1節　出雲地方出土の古墳時代の鎌について」『熊谷遺跡・要害遺跡』日本道路公団・島根県教育委員会　2001
（14）広江耕史「山陰の炊飯具」『古代の土器研究－律令的土器様式の東西4　炊飯具－』古代の土器研究会　1996／岩橋孝典「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の煮沸具について」『古代文化研究』第11号　島根県古代文化

センター　2003

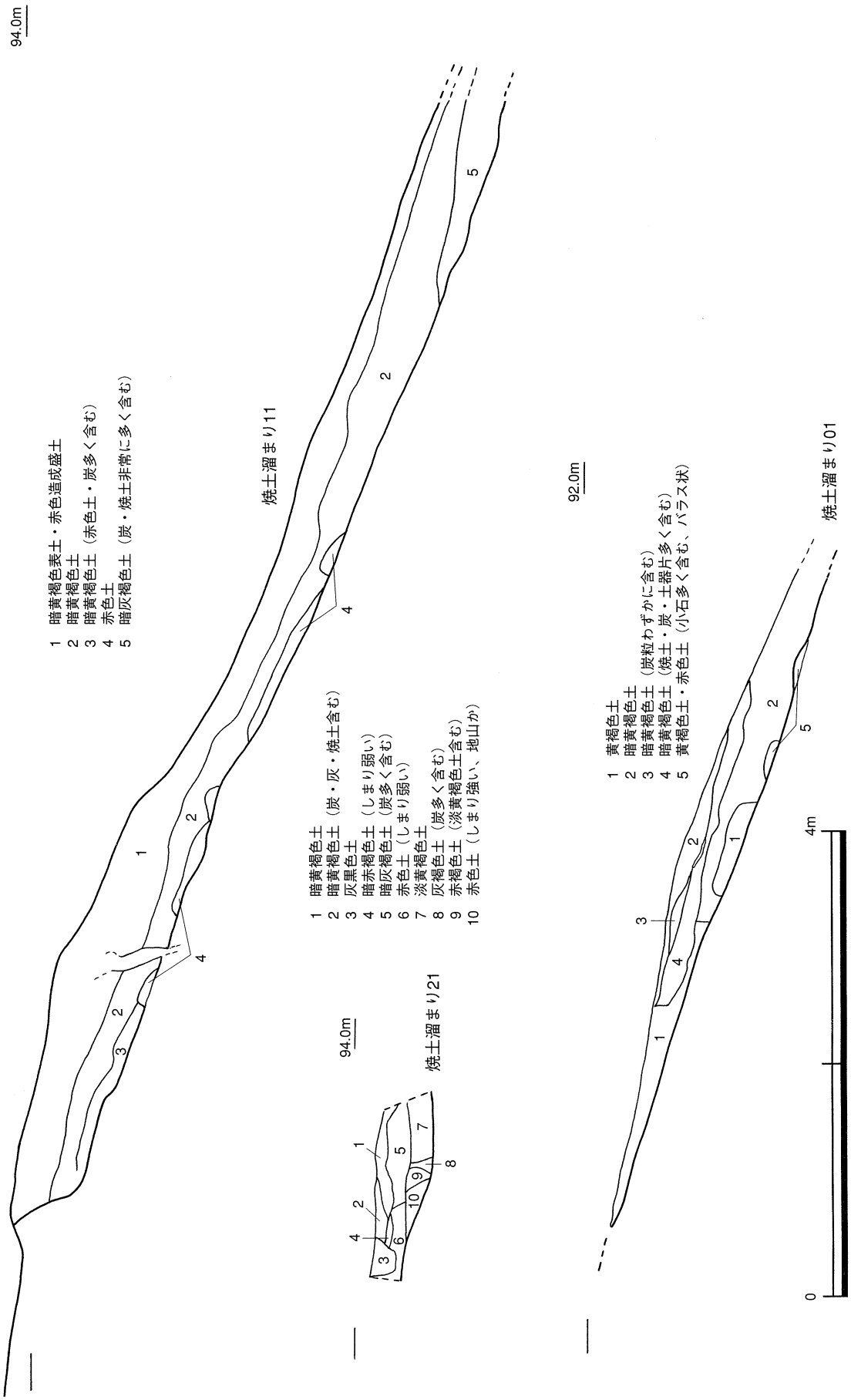
(15) 5世紀末～6世紀（TK43期まで）の移動式竈出土遺跡については以下の例が知られている。安来市山ノ神遺跡、東出雲町勝負遺跡、松江市堤廻遺跡・米坂遺跡・西川津遺跡、玉湯町堂床遺跡、出雲市井原遺跡・三田谷Ⅰ遺跡。島根県教育委員会『山ノ神遺跡・五反田遺跡』1998／島根県教育委員会『勝負遺跡・堂床遺跡』1998／松江市教育委員会『堤廻遺跡』1986／松江市教育委員会㈶松江市教育文化振興事業団『遅倉横穴墓群・米坂古墳群』1999／島根県教育委員会『西川津遺跡Ⅵ』1999／島根県教育委員会『堂床遺跡』2000／出雲市教育委員会『井原遺跡発掘調査報告書』2002/島根県教育委員会『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.1)』1999

第４章　祇園原Ⅰ遺跡の調査

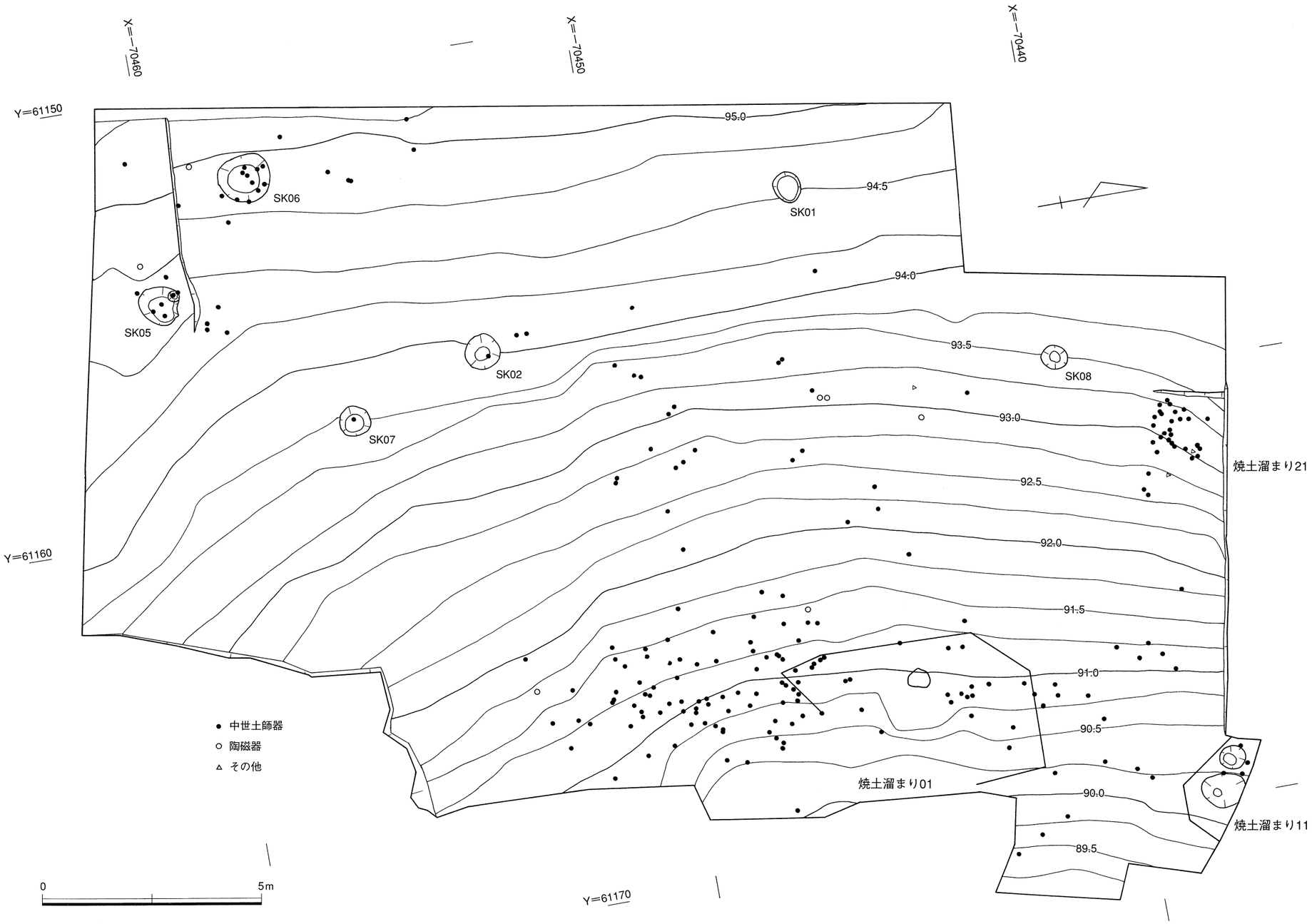
仏経山（標高366m）の東麓に位置するこの遺跡では、調査対象区域として18,500㎡を見込んでいた。トレンチを39地点、合計202㎡設定して確認調査したところ、北に向かって下る深い谷筋の東斜面（標高90m～95m）で遺構・遺物が確認されたので、この区域について350㎡の調査区を設



第40図　祇園原Ⅰ遺跡　調査区位置図（S=1/2,000）



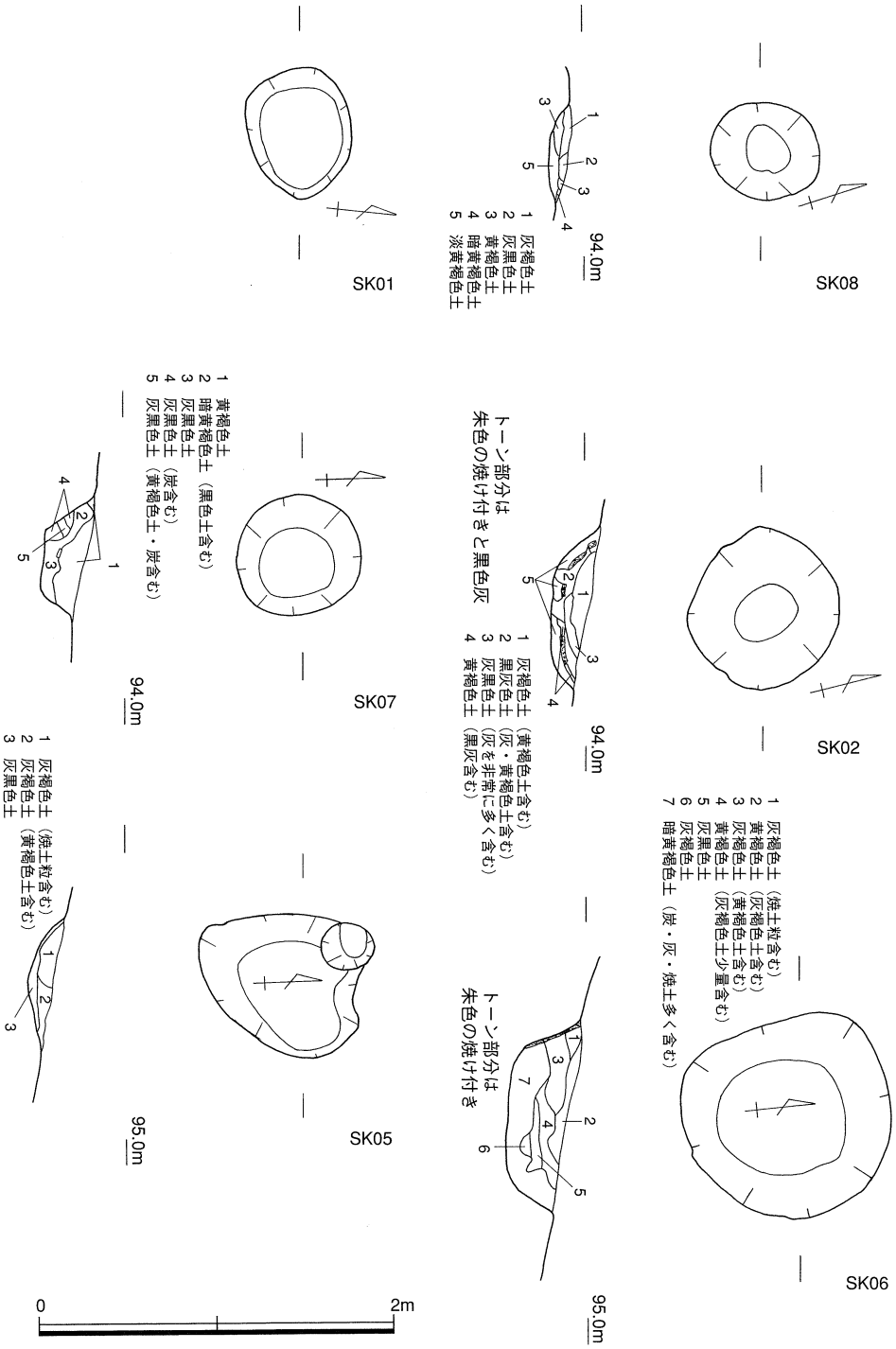
第41図　祇園原Ⅰ遺跡　焼土溜まり土層断面図（S＝1/50）



第42図　祇園原Ⅰ遺跡　遺構及び遺物分布平面図（S＝1/100）

第58表　祇園原Ⅰ遺跡　土坑規模計測表

遺構名	検出場所	平面形	断面形	規模				出土遺物	遺構の性格
				長軸(cm)	短軸(cm)	径(cm)	深さ(cm)		
SK01	緩斜面	楕円形	逆台形状	74	58	－	23.5	土製品	小炭窯
SK02	緩斜面	円形	弓弧状	86	80	－	23.0	土師質土器	焼土坑
SK05	緩斜面	不整形	弓弧状	110	88	－	13.0	土師質土器	焼土坑
SK06	緩斜面	円形	逆台形状	120	116	－	38.0	土師質土器	焼土坑
SK07	緩斜面	円形	逆台形状	－	－	70	27.0	土師質土器	焼土坑
SK08	緩斜面	円形	弓弧状	60	54	－	11.0	なし	小炭窯



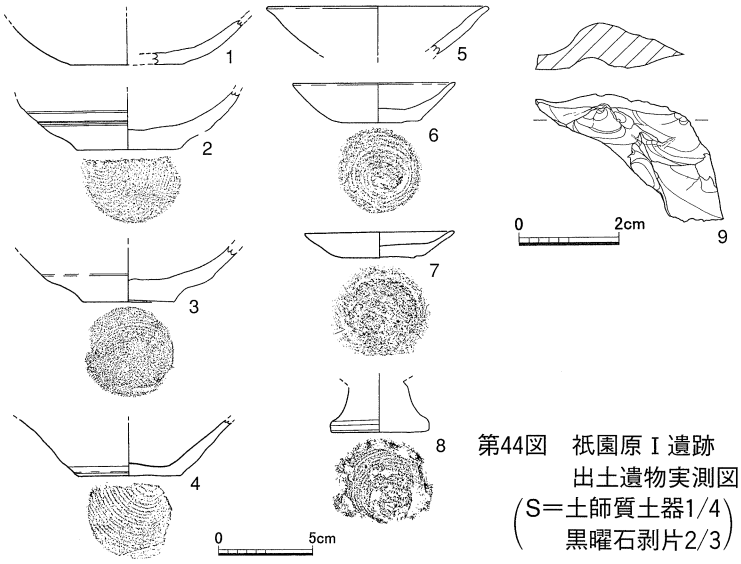
第43図　祇園原Ⅰ遺跡　土坑実測図（S＝1/40）

けて、平成13年10月30日から平成13年11月28日まで本調査を行なった。

発掘調査の結果6基の土坑と3か所の焼土溜まりが検出された。これらの遺構や遺物包含層から土師質土器や陶磁器が出土した。

検出した6基の土坑のうち4基は、地中構造が半球状から深い椀状あるいは断面が逆台形状を呈し、内壁面は赤く焼け付いていた。これらは土師質土器を若干ながら伴っており、焼土（内壁面が焼け付いた残骸とみられる）・灰・炭・土が詰まっていた。何かを生産したと考えられる残滓は内容物の中にも、周囲の土中からも検出されていない。6基の土坑のうち残る2基（SK01・SK08）は、地中構造が皿状あるいは断面が浅い逆台形状を呈しており、内面は一部赤く焼け付いているが、内容物は細かい炭が多く目立ち、遺物は伴わない。この2基は時期不明の小炭窯（製炭窯）である可能性が高いと思われる。

また、焼土溜まりの内容物は、土師質土器も含めて前者の土坑の内容物と同様と思われる。これ



第44図　祇園原Ⅰ遺跡
出土遺物実測図
（S＝土師質土器1/4
黒曜石剥片2/3）

らの遺物の中には龍泉窯系青磁の破片と見られるものも含まれており、土師質土器についても顕著な型式差は認められないので、祇園原Ⅰ遺跡から出土したこれらの遺構、遺物については、概ね13世紀代の年代観が得られるものと思われる。２基の小炭窯と思われる遺構については時期不明と言わざるを得ないが、比較的浅い部分から検出したことや、人家に近い区域で検出したことなどから、近年における使用の可能性も考えてよいのではないかと思われる。他の４基の焼土坑は、生産に関わる可能性は低いと考えられるので、墓坑や何かの祭祀に関わる遺構である可能性が考えられる。これらの焼土坑に伴って出土した土師質土器の器種は椀皿類であり、その他の供膳具、調理器具、貯蔵容器など集落から通常出土してしかるべき生活用具が欠落している。また、周囲にはこの焼土坑群を包含する同時代の集落は確認されておらず、このような現状では、集落から数百メートル以上あるいは数キロメートル以上隔絶された施設であったと考えざるを得ない。

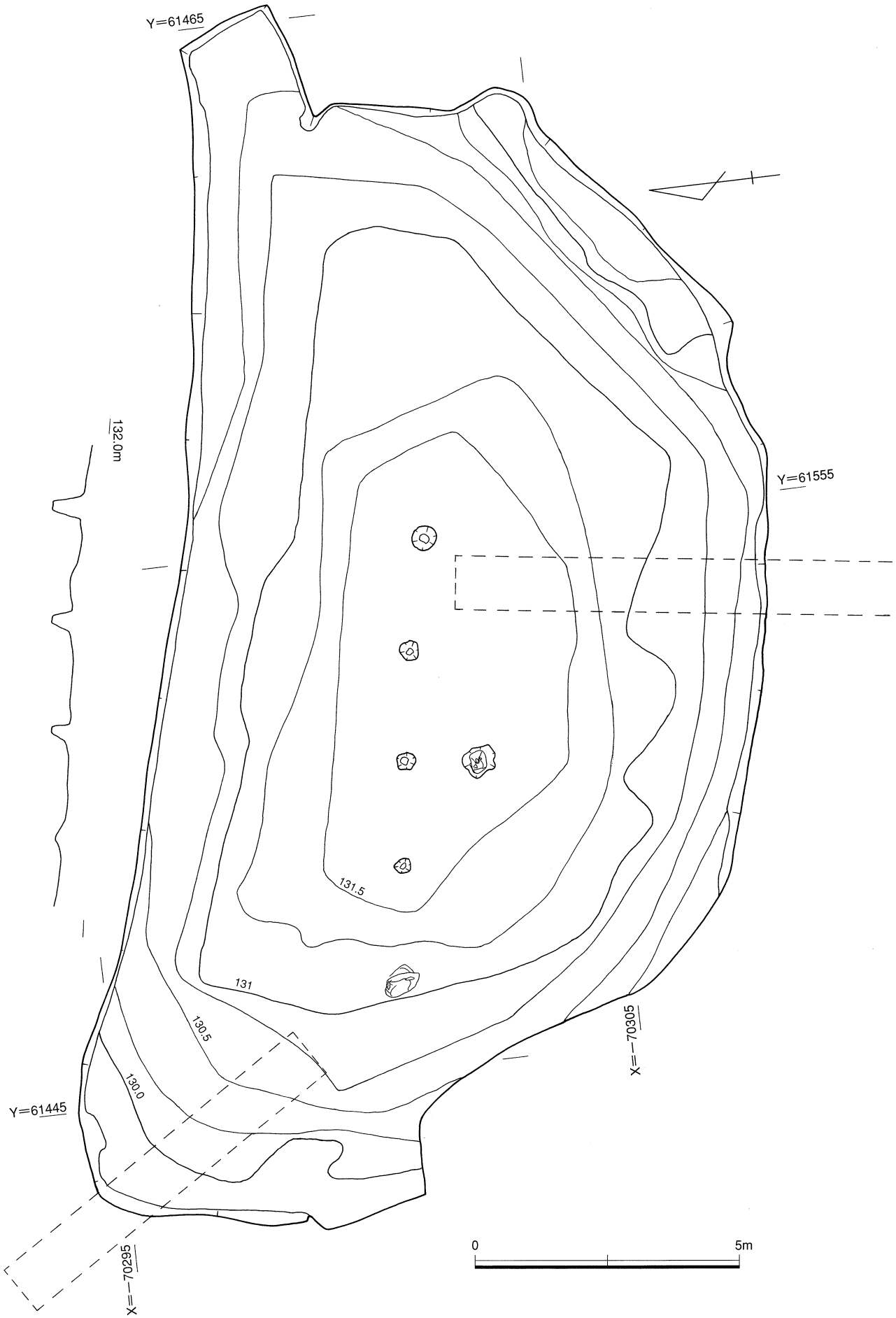
第59表　祇園原Ⅰ遺跡　出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種　別	器種	法　量（cm）	胎　土	色　調	焼成	手法などの特徴	遺存度
44－1	焼土溜まり11	土師質土器	椀	器高残存2.3底径6.0	密	赤褐色	良	外面回転ヨコナデ	1/2以下
44－2	焼土溜まり21	土師質土器	椀	器高残存3.0復元底径5.4	密	赤褐色	良	底部回転糸切り外面回転ヨコナデ	1/2以上
44－3	包含層	土師質土器	椀	器高残存2.9底径4.8	密、1㎜以下砂粒多し	赤褐色	良好	内外面ヨコナデ底部回転糸切り痕	1/2以下
44－4	包含層	土師質土器	椀	器高残存3.0底径復元5.4	密、1㎜以下砂粒多し	明黄褐色	良好	内外面ヨコナデ底部回転糸切り痕	1/2以下
44－5	焼土溜まり11	土師質土器	皿	口径復元11.6	密、1㎜以下砂粒多し	黄褐色	良好	内外面ヨコナデ	1/2以下
44－6	焼土溜まり21	土師質土器	皿	口径復元8.6器高2.15底径4.2	密、1㎜砂粒僅少	赤褐色	良好	底部回転糸切り外面回転ヨコナデ	1/2以上
44－7	焼土溜まり21	土師質土器	皿	口径復元8.0器高1.4底径4.0	密	灰白色～赤褐色	良	底部回転糸切り？	1/2以上
44－8	包含層	土師質土器	柱状高台皿	器高残存3.2底径5.2	密	黄橙色	良好	外面ヨコナデ底部回転糸切り痕	1/2以下
挿図番号	出土位置	種　別	器種	重　量（g）	材　質	備　考			
44－9	包含層	石器	剥片	4.53	黒曜石	裏面にヒンジフラクチャーの剥離面を持つ。			

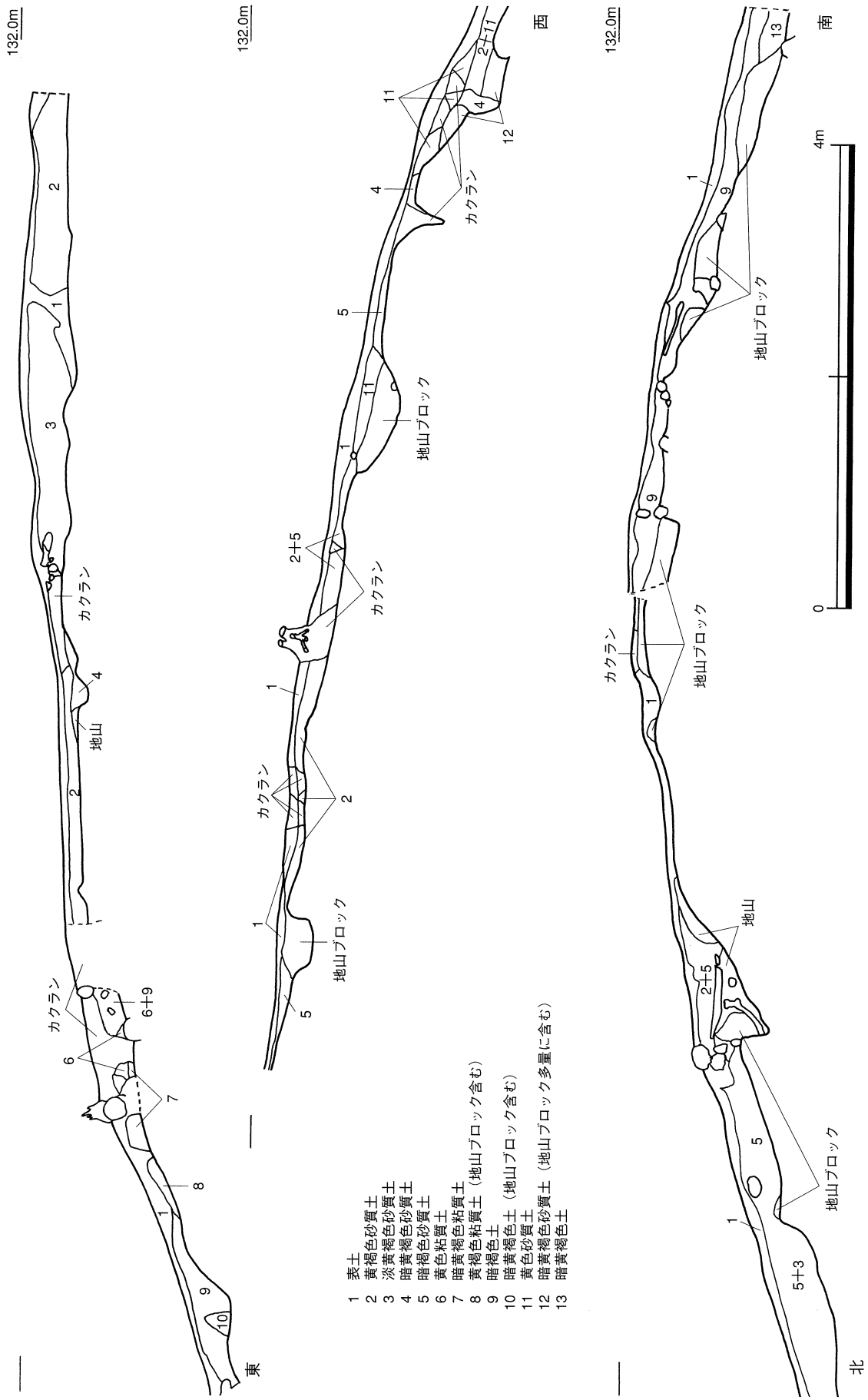
第５章　石橋Ⅰ遺跡の調査

石橋Ⅰ遺跡は仏経山（標高366m）の東、高瀬城跡（高瀬山標高314m）の西に位置している。出雲平野に面した標高131.7mの山頂部を中心として5,100㎡を調査の対象とした。確認調査として12地点、合計130㎡を発掘調査したところ、遺物は出土しなかったが、山頂部から柱穴が検出された。この部分を中心に250㎡の調査区を設定して平成13年９月19日から同年10月24日まで本調査を実施した。

発掘調査の結果、山頂部には30㎡ほどの平坦面があり、これを東西に貫くように３穴あるいは４穴からなる柱穴列１条が検出された。これらの柱穴は、ほぼ２m間隔で並んでいる。本調査においても遺物は出土しなかったので時期は特定できないが、立木などと組み合わせた建物跡の可能性が高いと思われる。石橋Ⅰ遺跡と名付けられたこの山頂は、高瀬城からは見えにくい出雲平野の西側を広く見通すことができるので、見張り台的な役割を担っていたことも考えられる。



第45図　石橋Ⅰ遺跡　遺構実測図（S=1/100）



第46図　石橋Ⅰ遺跡　土層実測図（S=1/50）

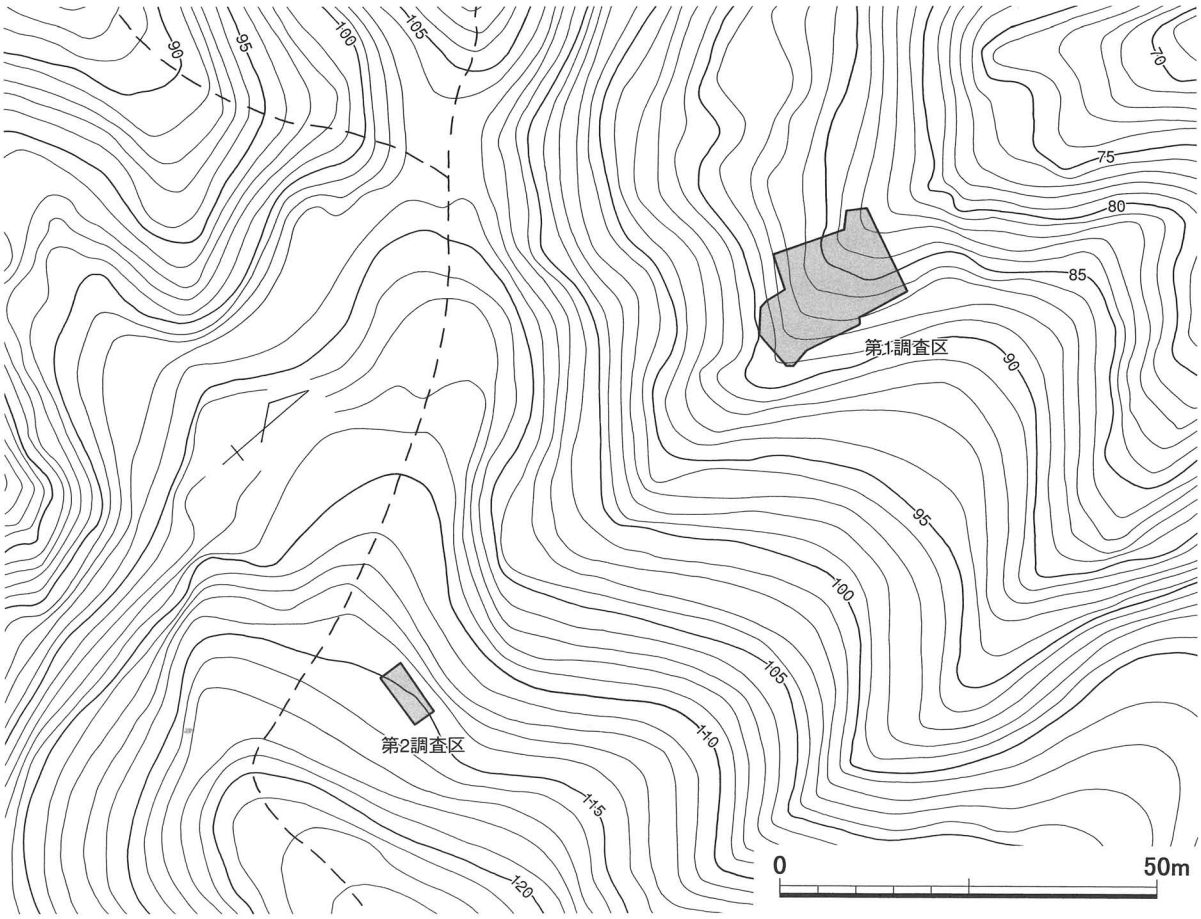
第６章　高瀬城北遺跡の調査

１．位置と調査の概要

高瀬城北遺跡は、簸川郡斐川町大字神庭1558－２番地他に所在する。ここは簸川平野の南側に連なる丘陵地にあたり、青銅器出土地として著名な荒神谷遺跡の東側約１㎞に位置している。南側には米原氏居城の高瀬城が存在するが、この遺跡はそこから北側の宇屋谷に向かって伸びる尾根の東側斜面に広がっている。

宇屋谷付近には数多くの遺跡が知られているが、その中でも特に中期～後期にかけての古墳及び中世の遺跡は注目される。古墳では、全長約58mの前方後円墳である神庭岩船山古墳が谷の入り口の微高地に、そしてこれに続く規模を持つ径32m、高さ5.3mの小丸子山古墳（円墳）が谷の平地にそれぞれ築かれている。さらにこの谷の西側に伸びる丘陵地には神庭古墳群をはじめ小規模な方墳や円墳が数多く造られている。以上のように大小さまざまな古墳が所在しているこの地域は、当時の身分階層の実態や社会情勢を知る上に重要な地域である。また、谷の平地部には須恵器等の土器片が散布しており、大規模な集落が営まれていたものと思われる。中世の遺跡では高瀬城が存在した関係で多くの城跡がある。谷の東側の丘陵地には鷹の巣城、錦田原城、宇屋谷城等が築かれ、比較的低い丘陵地に位置する宇屋谷城は高瀬城関連の館跡になる可能性を持っており注目される。

平成13年６月４日から７月３日にかけて遺跡の範囲、性格等を把握するための確認調査を行った。その結果、縄文時代の落とし穴と思われる遺構や焼土と土器片を検出したため10月10日から11月27日にかけて本調査を実施した。斜面下方部に第１調査区、上方部に第２調査区を設けて調査し



第47図　高瀬城北遺跡　遺跡周辺の地形図（S＝1/1,000）

たが、古墳時代中期以降の土師器、須恵器、中世の土器等の遺物が出土したのみで明確な遺構は検出することができなかった。

2．第１調査区

標高84～89mの緩やかな谷部にあたるところで、確認調査の結果、トレンチから多量の焼土と少量の土器片を検出したため、それらが出土した230㎡あまりを調査対象として本調査を実施した。

焼土の堆積状況

焼土は調査区の上方に２か所、下方に１か所まとまって出土した。それらはいずれも谷の主軸方向にゴルフ場のフェアウェイに似た細長い形状を呈しており、谷の上方から滑り落ちて堆積したものである。上方にある二つの焼土溜まりは、第２焼土溜まりの上に第１焼土溜まりが載った状態で検出されたことから、谷の西側→東側の順で焼土が堆積したものと考えられる。ただ、下方の第３焼土溜まりとの前後関係を明らかにすることはできなかった。遺構については第１焼土溜まりの上部から大形の土坑を１基検出したのみである。出土遺物としては焼土中から古墳時代の土師器片及び７世紀代の坏１点が完形の状態で検出された。

第１土坑

第１焼土溜まりの上部から検出された落ち込みである。谷のやや西側によった斜面に掘られているもので、北側がトレンチにより破壊をうけたため全体の形態は明らかでないが、不整形な長円形になるものと思われ、横口を持つ穴状の構造である可能性も否定できない。現存する規模は長さ2.83m、幅1.95mあまりで、深さは斜面上方部の縁から0.85mを測り、主軸は谷の中央線とほぼ並行している。底は縦方向がほぼ水平で、その幅は南壁から少し前の部分が最も広く1.16mを測るが、北側に行くにしたがって狭くなっている。底の横断は、中央部分は緩やかに窪み、両端は垂直ぎみに20㎝あまり立ち上って壁にいたっている。また、壁面にはピット状の落ち込みが４か所あまり存在していた。この土坑は発見当初、焼土や炭の発生源となる炭焼き窯等の遺構になるものと期待したが、底や壁に焼けた痕跡が認められず、明確な性格を把握することはできなかった。

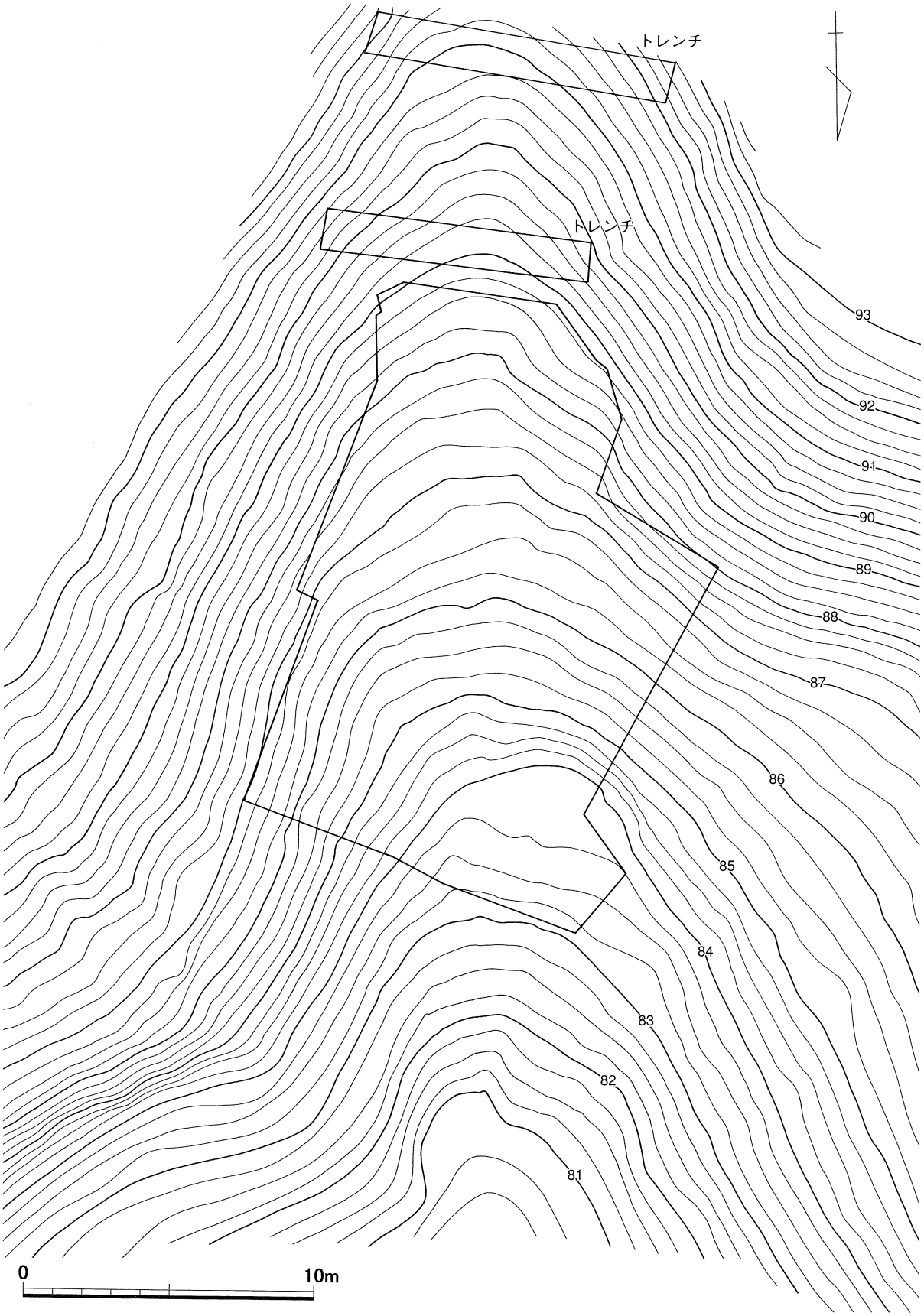
完形土器の出土状況

第１焼土溜まりの下方の端から見つかった土器は須恵器の坏である。一部、口縁端部を欠くところがあるがほぼ完形で、焼土中から伏せた状態で検出した。原位置からさほど動いていないものと思われ、第１調査区ではこの土器以外に同時期のものが１点も出土していないことから、何らかの理由で単独に使用されたものと考えられる。焼土との関係が推測されるが、出土地点が宇屋谷を流れる河川の支流の水源地にあたっていることも看過できない事実である。

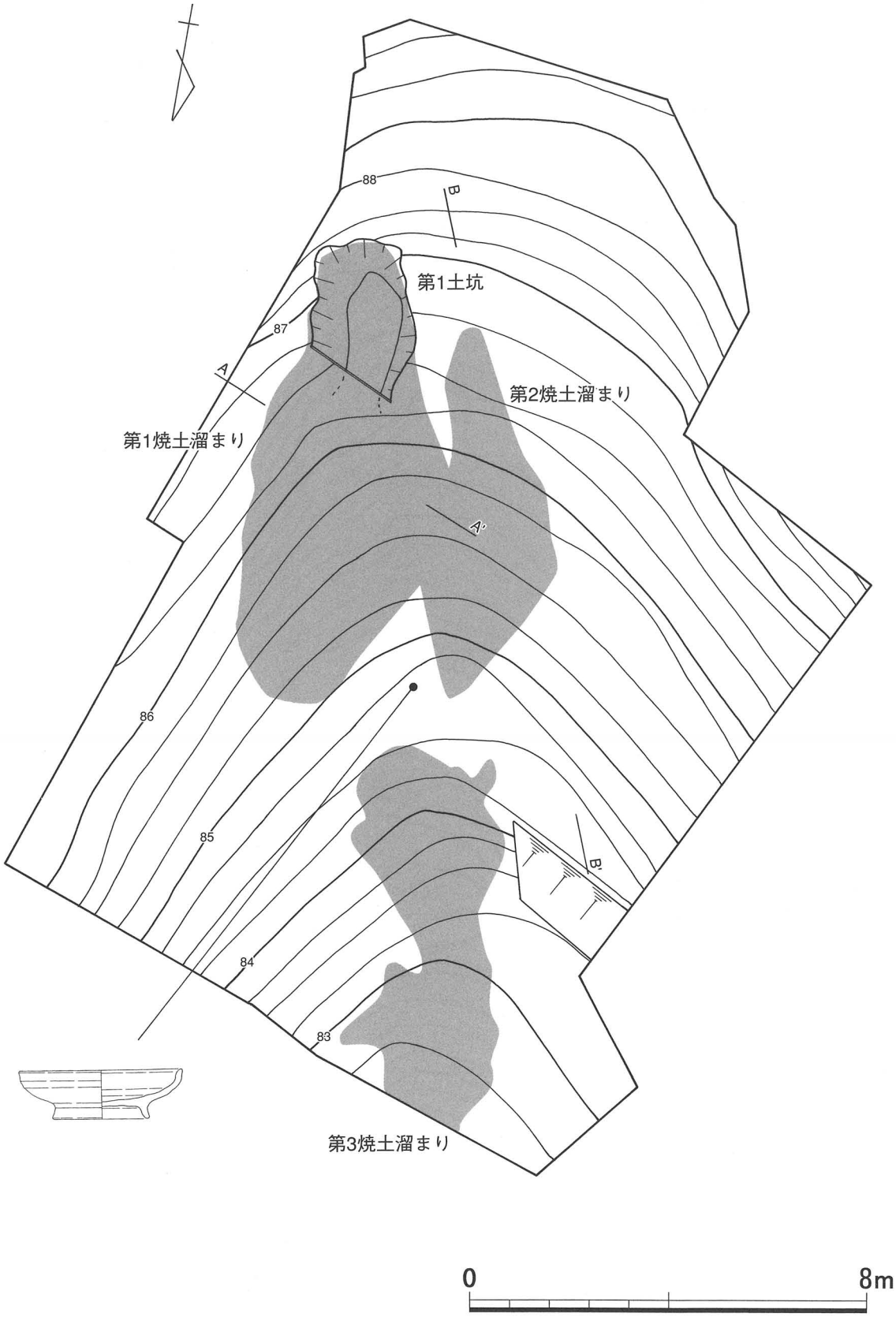
出土土器

第１調査区から出土した土器は古墳時代の須恵器、土師器と中世の備前焼が大半を占め、前者は焼土中、後者は表土から検出されている。以下、土器の概要を述べる。

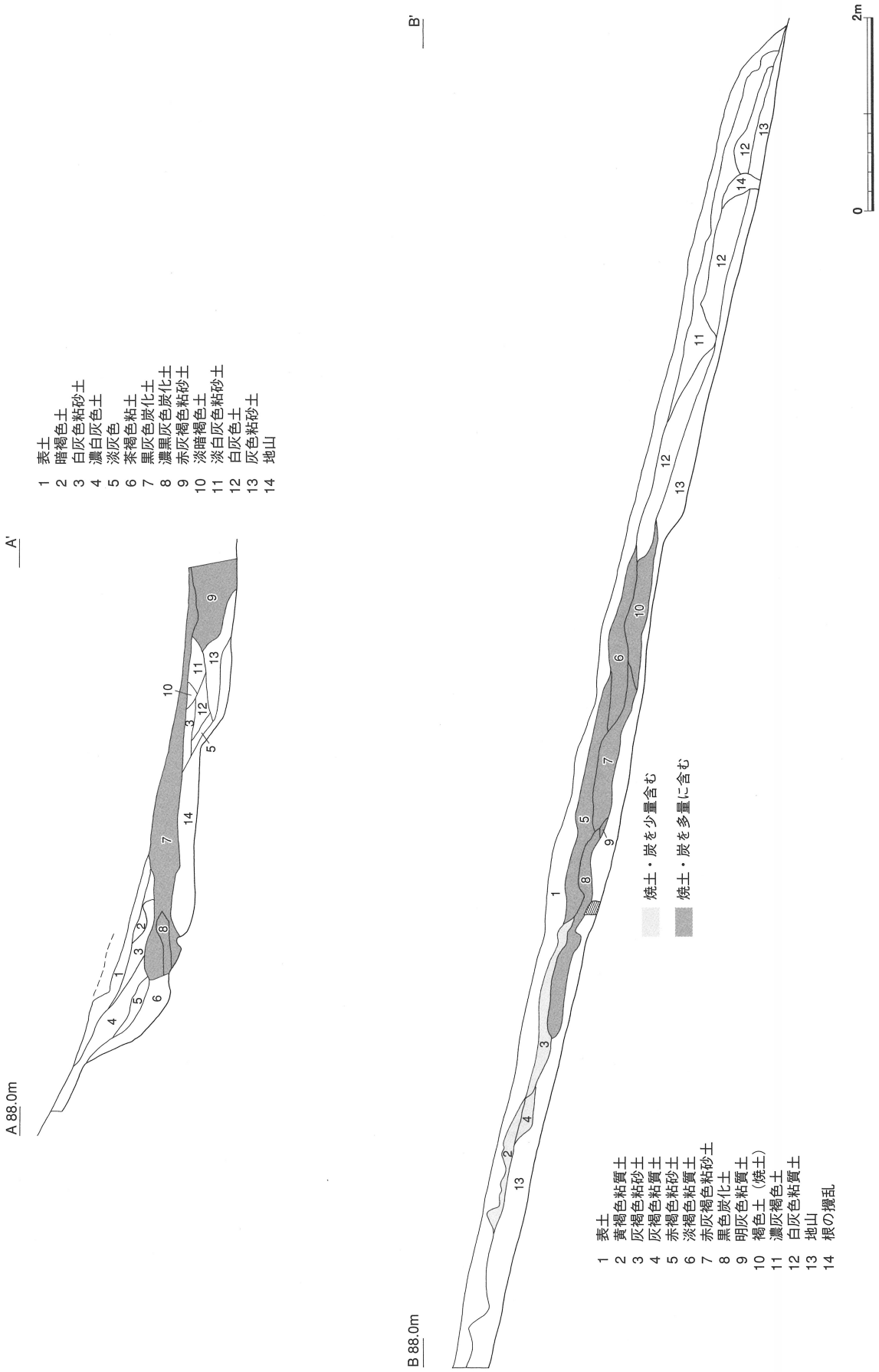
第52図１～３は古墳時代中期前後の土師器の口縁部片である。１は頸部から口縁部にかけての破片で、口縁端部を欠く甕である。形状は、「く」の字形を呈しており、口縁部の器壁はやや厚い。形状を詳しく見てみると、頸部からやや内湾して上がり、短く外反して端部にいたっている。調整は頸部から肩部にかけて外面にやや幅広い縦方向の刷毛目が、また内面には横方向にケズリがそれぞれ施されている。焼成は充分で、胎土に雲母を含む。２は推定口径14.7㎝あまりの甕である。形状は１に近いが端部下方の外反している部分の器壁は薄く、口唇部内側に平坦面を持つ。調整は全面に横ナデが施されているものと思われ、胎土は砂粒を多く含み，雲母も混ざっている。外面灰褐



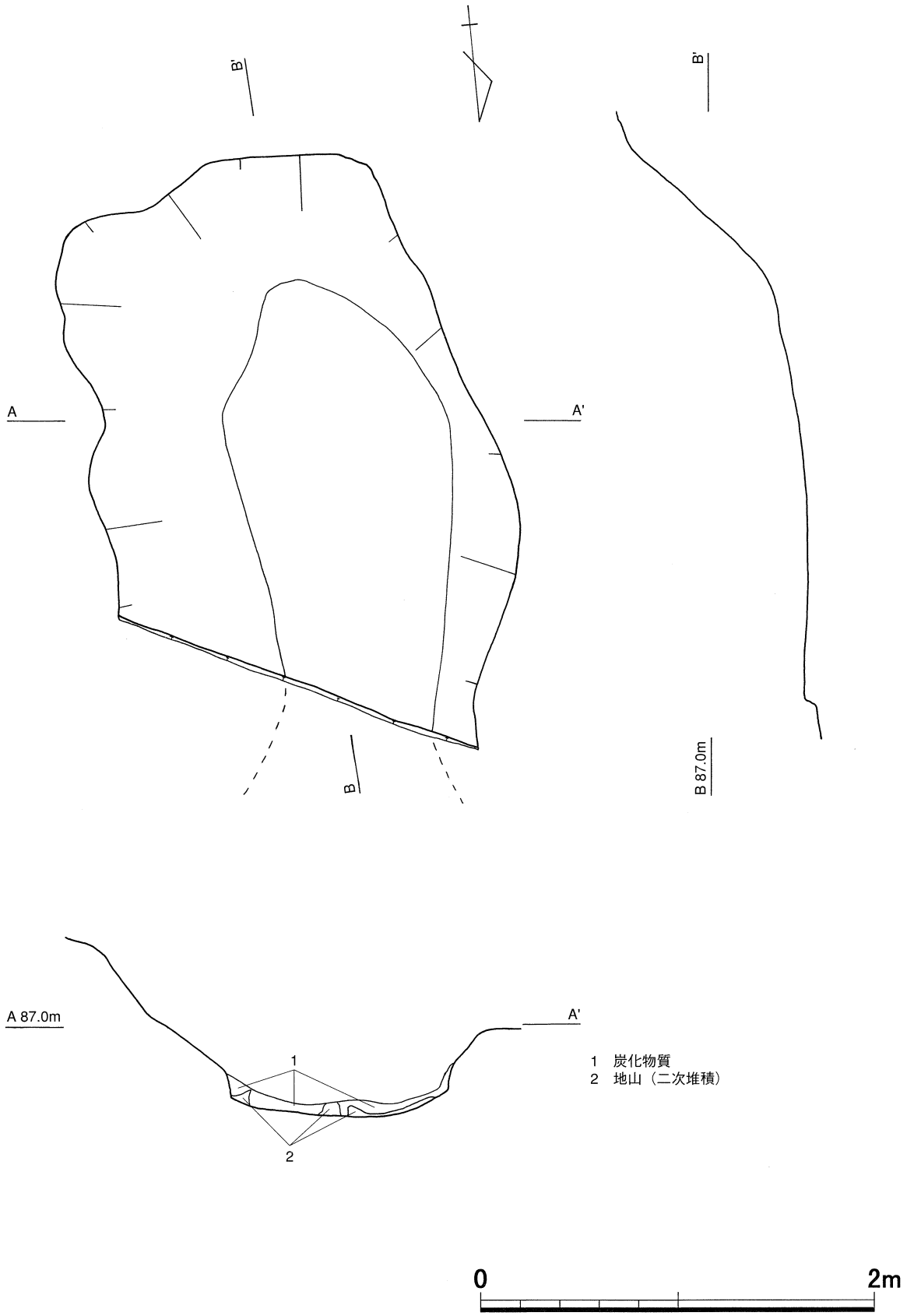
第48図　高瀬城北遺跡第１調査区　調査前地形測量図（S＝1/200）



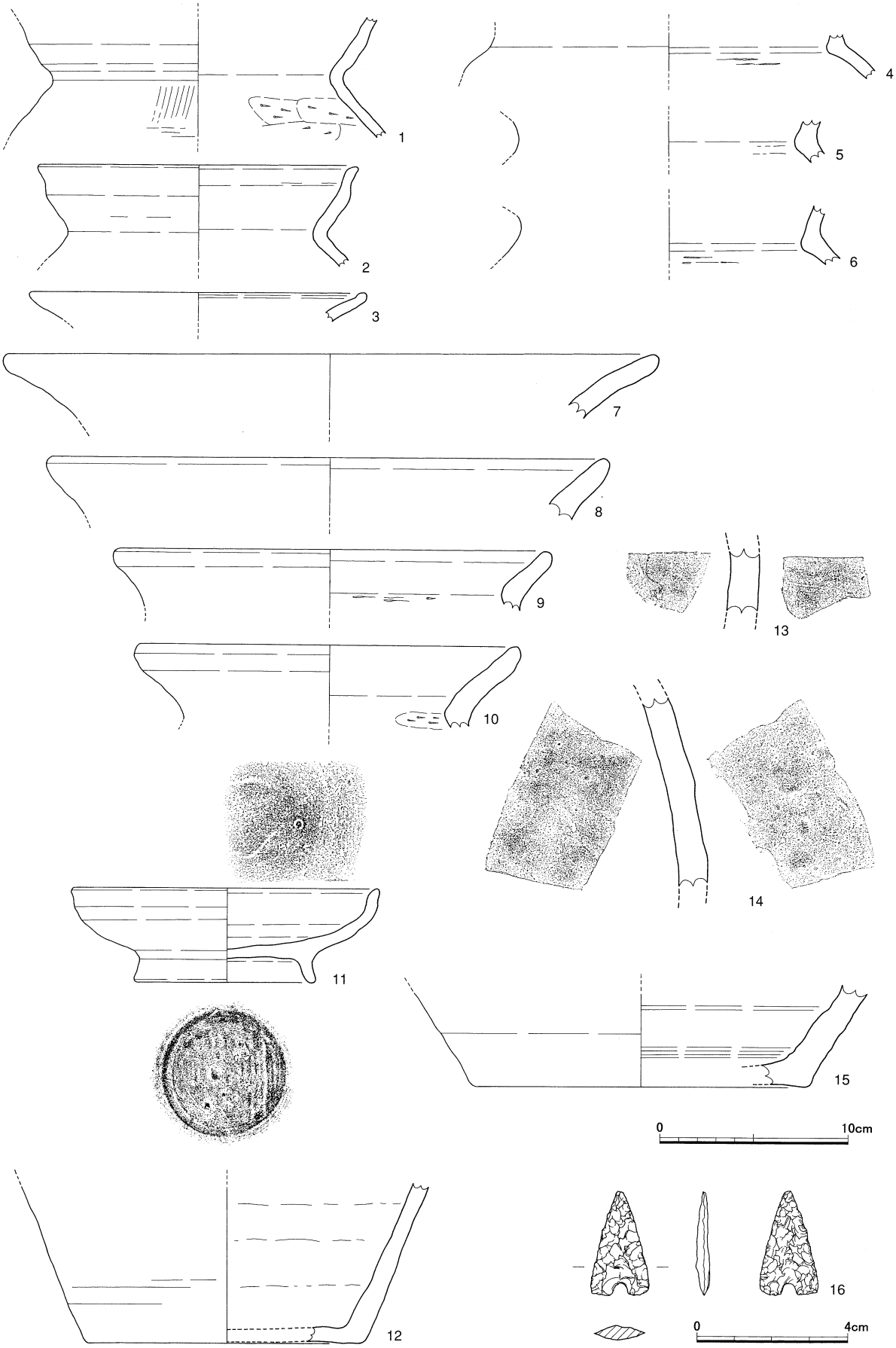
第49図　高瀬城北遺跡第１調査区　調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1/120）



第50図　高瀬城北遺跡第１調査区　土層図（S＝1/60）



第51図　高瀬城北遺跡第１調査区　第１土坑実測図（S＝1/30）



第52図　高瀬城北遺跡第１調査区　出土遺物実測図（S＝1/3・16のみ2/3）

色、内面黄褐色を呈し、焼成は良好である。3は推定口径17.7cmあまりの壷甕類の口縁部片で、端部付近の小破片である。形状は大きく外傾して開いており、端部は丸い。口唇部内側に浅い凹み線が廻っている。調整は横ナデが施され、砂粒を多く含んでいる。色調は外面が黄褐色，内面が暗黄褐色である。4～6は頸部の土師器片である。いずれも「く」の字形に屈曲しており、内面に横ケズリ、外面に横ナデを施している。焼成は良好で、胎土に砂粒を含む。7～10は外側に大きく開いている土師器の口縁部片である。推定口径は7が最も大きく34.8cmで8が29.9cm、そして9が28cmあまりで、最も小さい10が20cmである。いずれも造りがやや粗雑で、器壁は厚く、1～3の土器より新しいものと思われる。なお、10は内面にケズリの痕跡がわずかに残っている。11は口径16.3cm、器高5.0cm、底径9.4cmを測る須恵器の坏で、底部には高さ1.1cmあまりの高台が付いている。外形はやや内傾した高台から外側に大きく外反して上がり、それからやや内湾して短く外反して口縁部にいたっている。口唇部の内側は外傾した平坦面を持つ。外面の底部には糸切りした後にナデを施した痕跡が残っている。焼成は良好で、色調は淡い灰色。なお、坏部の内側に1か所ではあるが径0.4cmの竹管文が施されている。12は須恵器の壷か甕の底部片で、推定底径14.5cmあまりを測る平底である。外面は底部から約3cm上方まで横方向のケズリが施されており、内面には粘土紐を巻き上げた痕跡が一部に残っている。13～15は備前焼の壷の破片で、13、14は胴部片、15は推定底径18.2cmあまりの底部片である。16は第1調査区の上方のトレンチから出土した安山岩製の石鏃で長さ2.7cmあまりのやや細長い三角形を呈した抉りの小さい鏃である。

3．第2調査区

尾根から東側に少し下がった斜面に設けた調査区で、第1調査区の上方に位置する。トレンチ調査で縄文時代の落とし穴状の遺構を検出したため30m²あまりを調査した。

第1土坑

この土坑は調査区のほぼ中央の斜面から検出されたもので、1.34m×1.13mの長円形を呈し、深さは1.09mあまりを測る。上端から0.9mあまり下がったところで径が小さくなり、底は15cm×20cmあまりの不整な円形をしている。この坑は表土下にある灰褐色粘質土の下層から掘りこまれており、中には茶褐色粘質土が詰まっていた。中から遺物を検出することはできなかったが、掘りこまれた面の位置や堆積した土等から古い時期のものと思われ、獣の捕獲用の落とし穴と推測される。

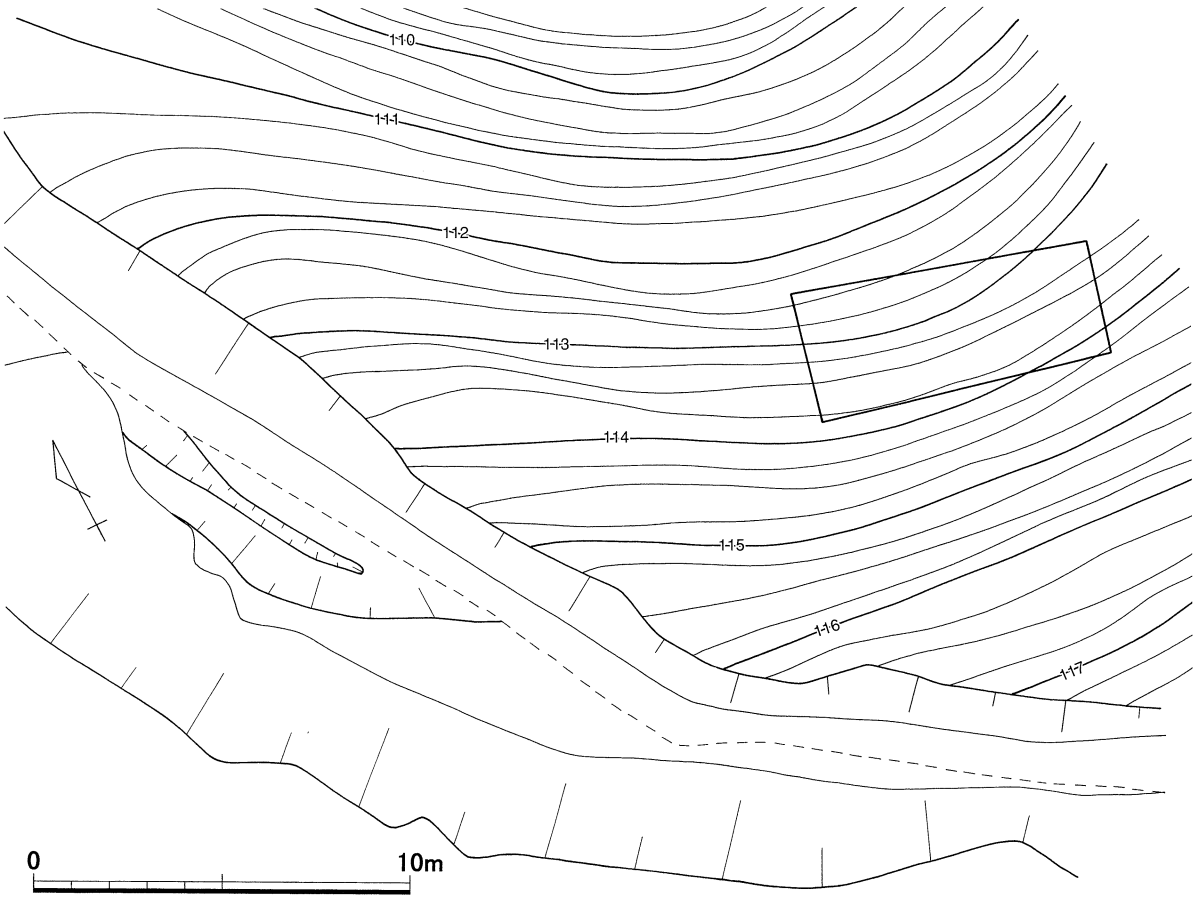
第2土坑

第1土坑の東側にあたる調査区の壁面付近から、径1.24m、深さ0.85cmあまりを測る土坑が見つかった。全形は不明であるが長円形を呈しているものと思われ、底はやや丸みを持ち、淡茶褐色粘質土と茶褐色粘質土が堆積していた。遺物は見つからなかったが、第1土坑と同様に下層から掘りこまれていることから同時期のものと推測される。

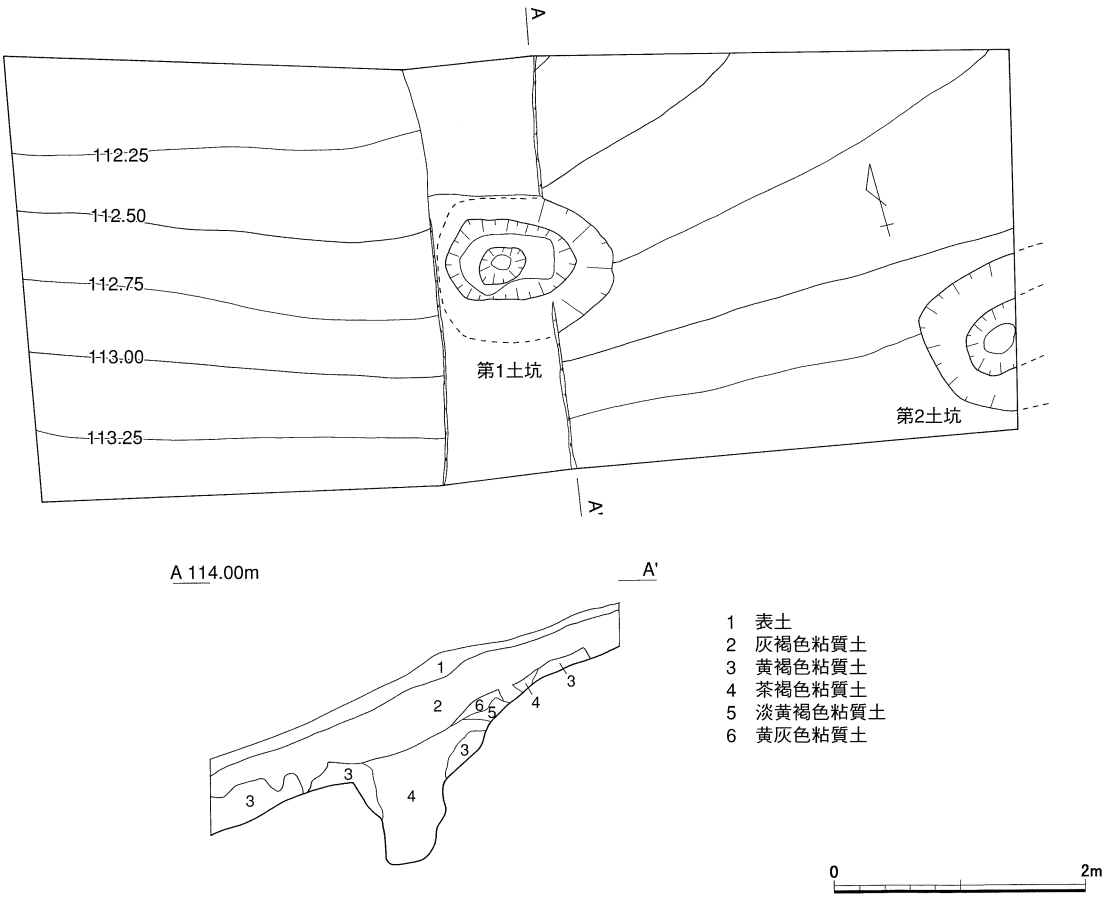
4．まとめ

今回の調査では明確な遺構を検出することはできなかった。焼土や遺物が出土したのは、調査地が谷地形であったため土砂が上方から堆積していることに起因しているものと思われる。ただ、ほぼ完形で見つかった須恵器の坏は、原位置からさほど動いていないものと考えられる。このような出土状況は出雲市芦渡町の廻田Ⅴ遺跡でも確認されており、今後類例の増加を待って検討が必要である。また、表土から備前焼の破片が出土していることから、調査区周辺は高瀬城関連の施設等が本来存在していたものと推測される。

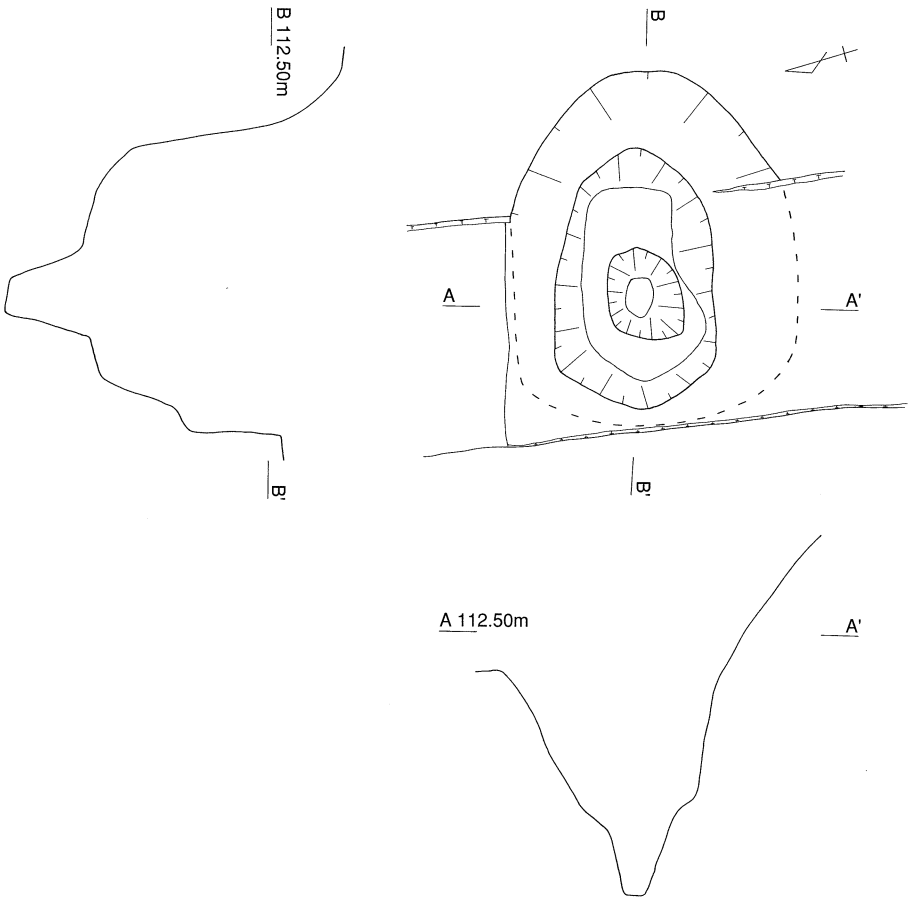
参考文献 『島根県斐川町遺跡分布調査報告書』 斐川町教育委員会　1992



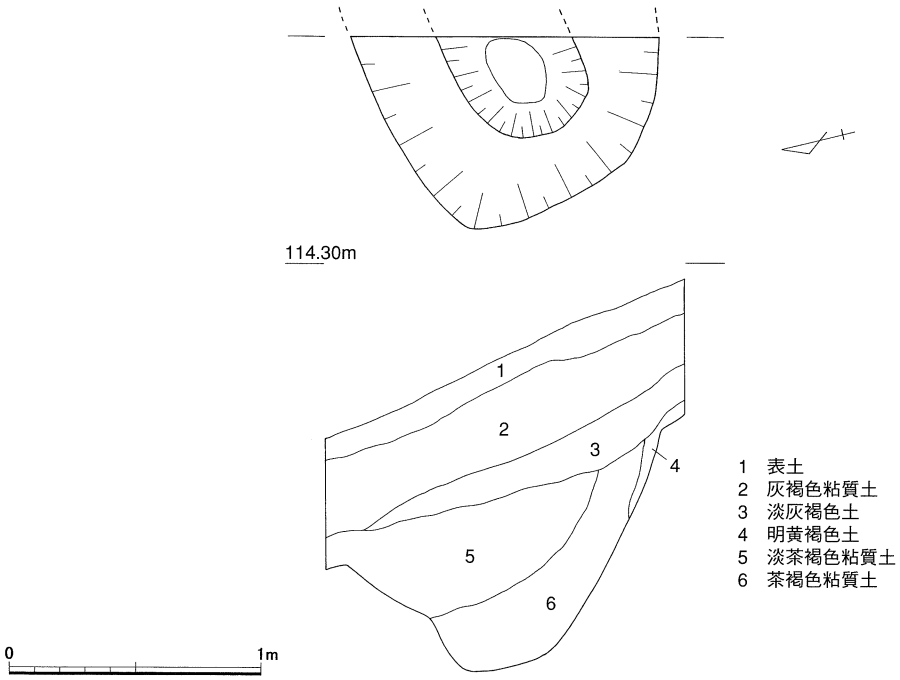
第53図　高瀬城北遺跡第２調査区　調査前地形測量図（S＝1/200）



第54図　高瀬城北遺跡第２調査区　調査後地形測量図・遺構配置図・土層図（S＝1/60）



第55図　高瀬城北遺跡第２調査区　第１土坑実測図（S＝1/30）



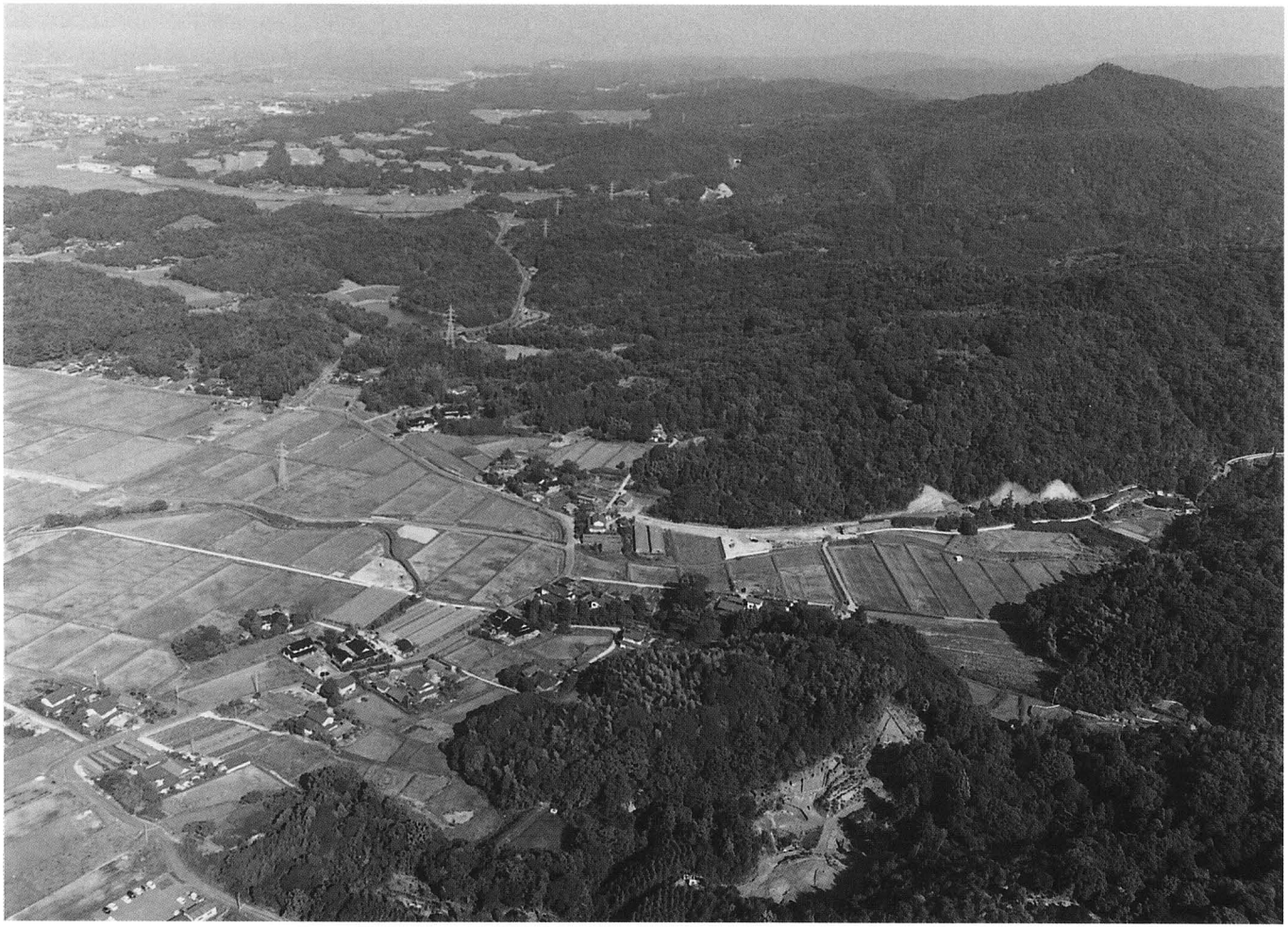
第56図　高瀬城北遺跡第２調査区　第２土坑実測図（S＝1/30）

図　　版

西Ⅰ遺跡　全景(南東上空より)

図版２

西Ｉ遺跡（中央）・石橋Ｉ遺跡（左上）　遠景

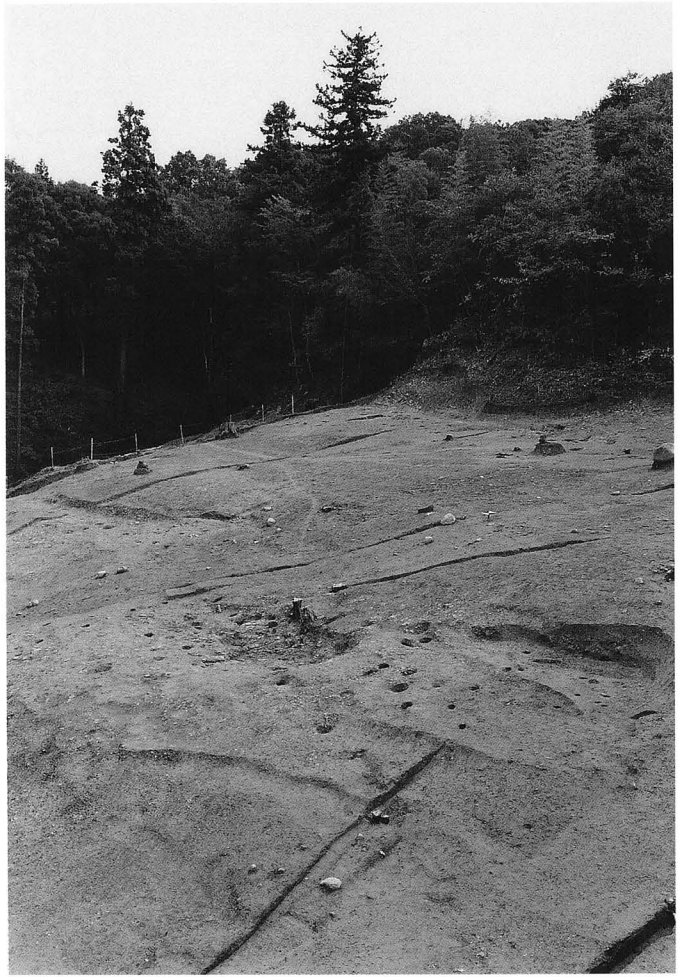


西Ⅰ遺跡　遠景（西側上空より）

西Ⅰ遺跡　全景（東側上空より）

図版４

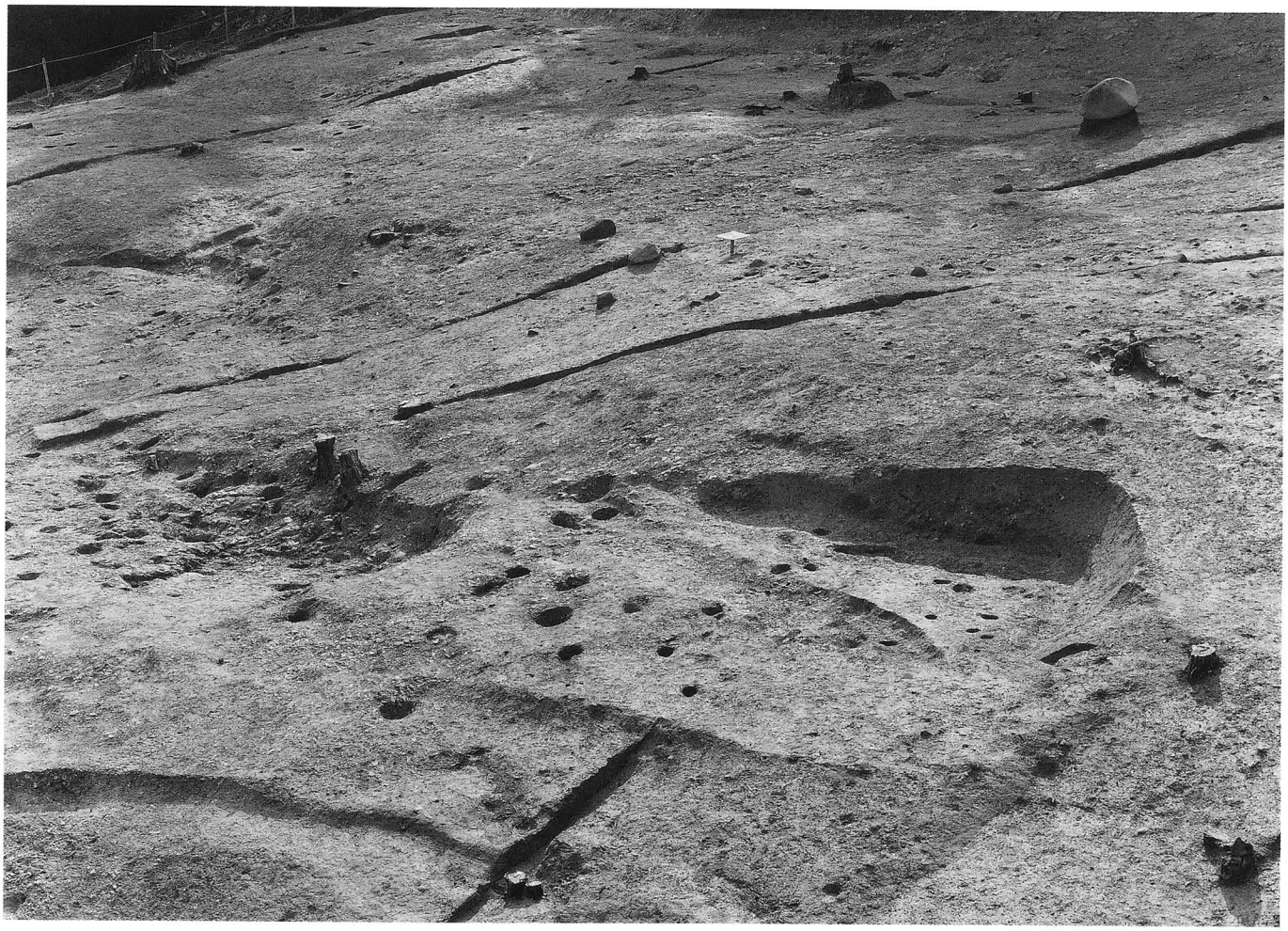
西Ⅰ遺跡Ａ区　全景（上空より）



西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・３・４・５（北側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２（北西側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・３・４（北西側より）



西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・３・４・５（北西側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・掘立柱建物１

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構１・掘立柱建物２

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構２・掘立柱建物３

西Ⅰ遺跡Ａ区　小規模ピット群

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３（西側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３（東側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３新段階・遺物出土状況

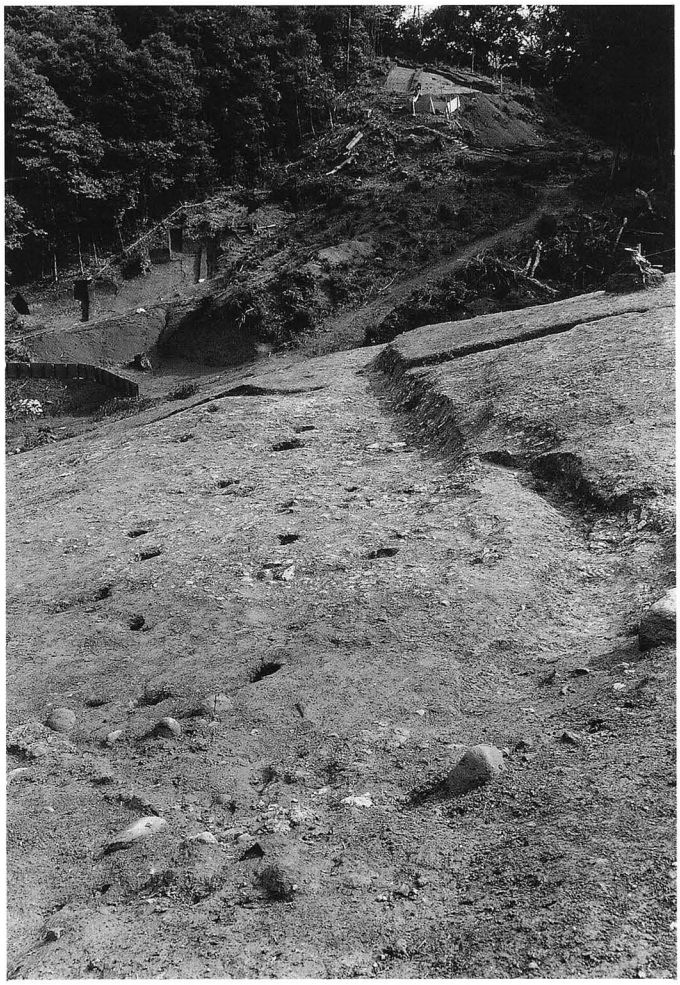
西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３新段階・遺構検出状況（南西側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３新段階・遺構完掘状況（北東側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構５・床面検出状況（北東側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構４・遺構完掘状況（北西側より）

西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構４・遺構完掘状況（東側より）



西Ⅰ遺跡Ａ区　段状遺構３（西側より）